

329

179



始



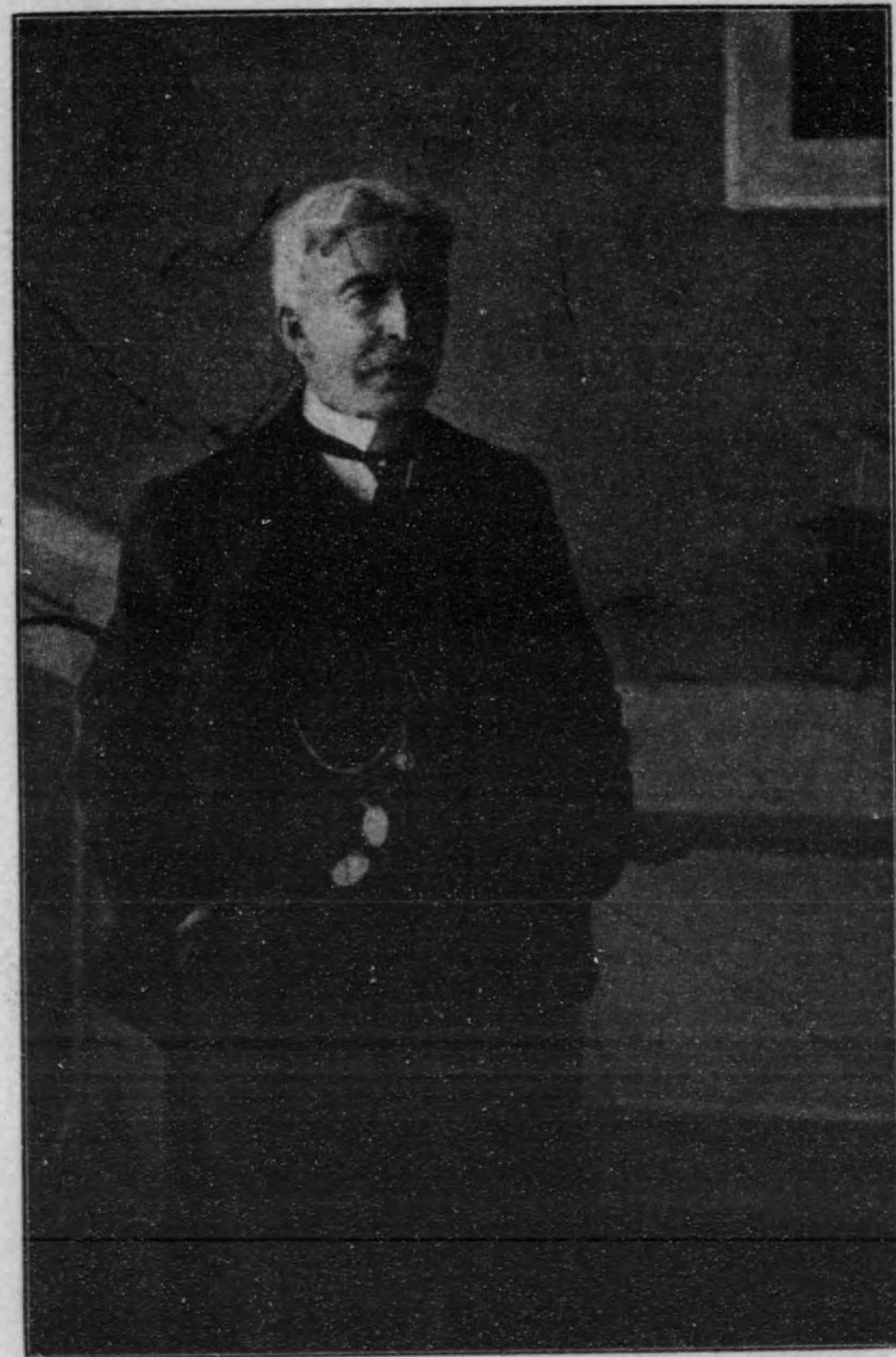
329-119

3A 277

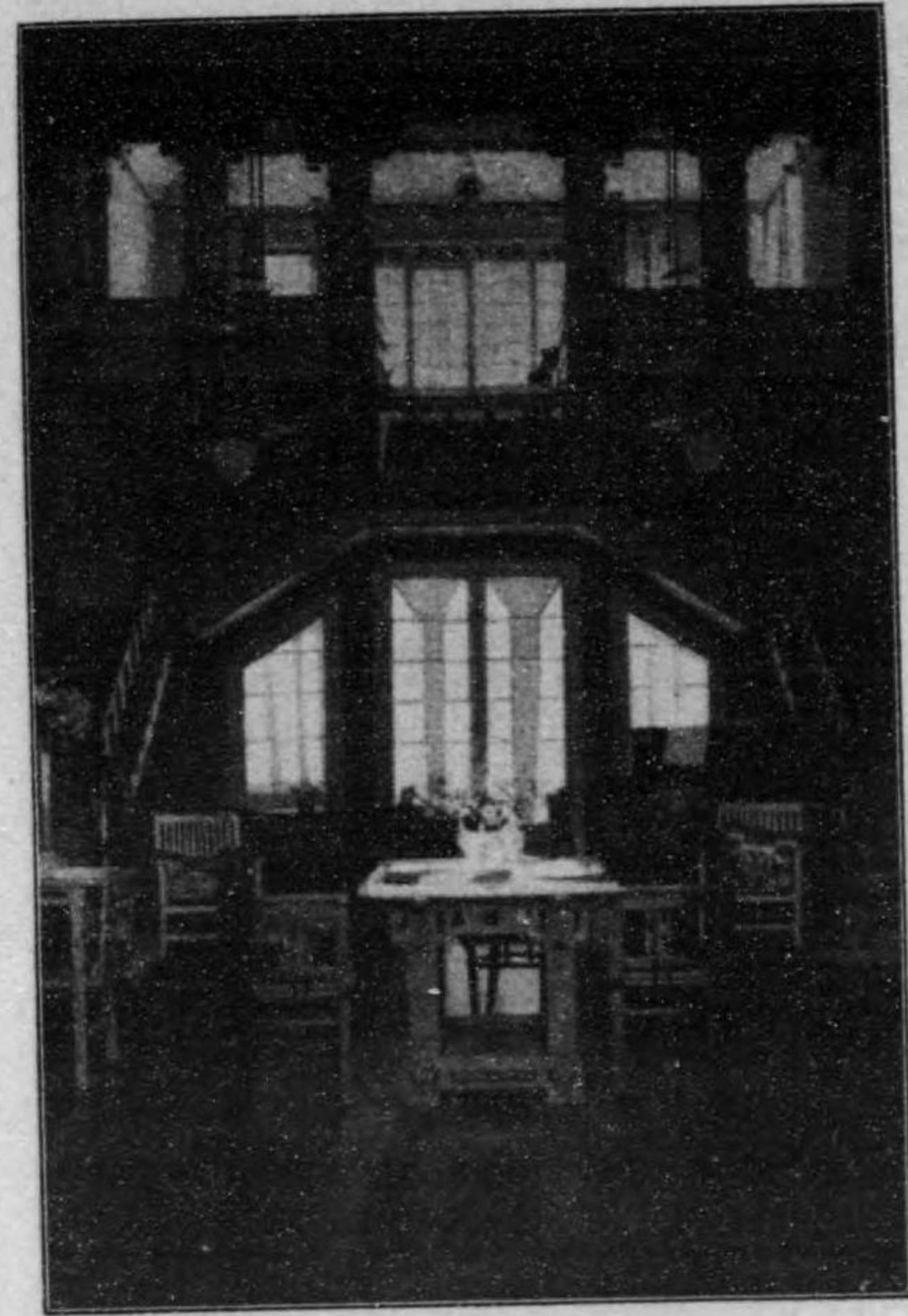
者 聖

藏林村野小
三佳田吹
譯 共





Antonio Fogazzaro.



別荘ラ・モンタニナの内部



ナニタンモ。ラ莊別の愛護其と谷溪のコテスアしり歌に作創が氏ロアツカオフ

譯者序

米の故ヂエームス、獨のオイケン、佛のベルグソンの如き哲學者を生み、また生まんとしつゝある現代に於て、唯物的世界觀に根源する、所謂自然主義を唱道するは到底時代錯誤アチロニスム而已。實に人はパンのみにて生くるものに非ず。世界文壇の最近傾向が、漸く精神的色彩を帯び來りつゝ始まれるは寧ろ至當の趨勢なるべし。我等は此の最近傾向の一先驅として、伊太利の文豪、故アントニオ・フォガッツアロ氏の著「聖者」を觀る。

聖僧フランシスを生み、詩聖ダンテを生みし、薔薇の花咲く北伊太利の野山には、流石に今は中世の名残の悉くは失せやらず、神秘の林霧溪間に漂ひて、訪ふ人の心に靈の世界を懷はすといふ。その北伊

太利を背景として、其處に漂ふ中世的空氣の中に近代的人物を活かし、人間久遠の問題にしてまたその歎求なる、肉より靈への奮闘を、嚴肅に且つ深刻に畫きて、此の問題に或る光をもたらさむとするが原著者の努力の主題なりき。羅馬教會内の新運動たる現代主義の驍將として彼の主張が、その全篇の精神なるかの如く觀ぜられざるにあらぬも、現代主義その物が既に業に肉より靈への問題中のものなるからには、此の小説の主題は依然是れにあらずして彼れにあらざるべからず。或人秋を評して、秋の意は哀深けれども弱からず、思高うして然も深し、こいひぬ。「聖者」は秋の書なり。

(2)

我等の譯は英譯よりの重譯なり。唯さへ翻譯は原書の眞味を傳ふるに難きものなるに、尙更重譯の事なれば此の點に就きて深く原著者並

に讀者諸氏の宥恕を仰がざるべからざるを思ふ。

翻譯に着手するに先立ち、我等は原著者の遺族に一書を送りて翻譯の許可を求めたるに、頃日ミラノ市のバルデイニ・エ・カストルデイと稱ぶ書肆より、「故フォガッツアロ氏の小説を日本語に翻譯するは、同氏の遺志に協ふ事なるべしと思へば、同氏の靈及び我等は該翻譯權を喜びて足下に呈す。希くは翻譯の成功並に讀者の稱讚の聲の高からん事を。云々」なる意味の返書を受取りたり。

(3)

我等は今、甚だ不完全ながらも、此の書の邦譯を成就し得たる事を深く神に感謝す。

大正元年十一月

小野村林藏
吹田佳三

目次

緒言	一
第一章 愛の湖	一
第二章 ドン・クレマンテ	四七
第三章 嵐の一夜	一〇九
第四章 顔と顔	一五六
第五章 聖者	二三一
第六章 三通の手紙	三五〇
第七章 浮世の渦巻	三七〇
第八章 ジアン	五〇七
第九章 神の旋風	五六九

目次

緒言

アントニオ・フォガツツアロは一八四二年の三月二十五日に北伊太利のウヰチエンツアで生れた。彼の父は學問があつて高尚な趣味を有つて居た人で、母は女性的の優しさに、機智と温な心を合せ具へて居た人であつたから、彼は小兒の頃から両親の善い感化の下に育つた。彼が最初に就いた師は、彼の才能と、その才能を培養するに最も良い方法とを知つて、彼をよく教育した。古典の稽古を終へてから、アントニオは始にパテユア大學で、次にトリノの大學で、法律を學んだ。卒業の後辯護士になつたけれども、自分の天職は法律家でなくて藝術家だといふ事を自覺して居たから、餘り永くは續かなかつた。其中に彼は辯護士をやめて、生來好きな音楽と詩とを熱心にやり出した。彼は若い時分から、伊太利に大小説家が無く、大抵の小説家は佛蘭西の作家の眞似ばかりして居るのを慨して、伊太利には伊太利の小説がなければならぬ、と始終云つて居た。けれども、彼の最初の小説「マロムアラ」は一八八一年、彼が三十九歳になるまで世に出なかつた。彼が四十歳に手が届く頃まで待つて、始めて最初の小説を公にしたといふ事を見ても、また一つの小説を書くに大抵四五年づゝの研究

を積んだといふ事を見ても、彼が如何に眞面目な人で、筆の走るが儘に書きなぐつたり、又はパンのために濫作するやうな人ではなかつた事が判る。彼は文士としての生涯を、人を教へる大なる機會として見て居た。そして、時を経るに従つて彼の周囲には、常に智識上や藝術上の事柄に就いて而已でなく、處世上の事柄に關しても彼の指導を仰ぐ所の熱心な弟子の一團が結ばれた。彼は終生不變の忠誠を羅馬教會に捧げて、一九一一年の三月の初、誕生日の三週間前に、六十九歳で世を去つた。彼と「聖者」の中のチヨヴァニ・セルヴァとの間には大分似寄つた點のあるやうに思はれる。

彼が書いたものは小説ばかりではない。詩もあれば、戯曲もあり、論文もある。併し彼の名は彼の小説によつて世に出たので、彼の名が後世に残るのも小説によつてであらう。彼の小説の重要なものは、「ピッコロ・モンド・アンテイコ」(昔の小世界)、「ピッコロ・モンド・モテルノ」(今の小世界)、「イル・サント」(聖者)、「レイラ」等である。この四篇は互に關係があつて、「昔の小世界」の中には、「聖者」の主人公ベネデットーの父のドン・フランコの信仰と、母のルイザの冷靜な理性との争、及びその争が遂に信仰の勝利に終る徑路を書いてある。「今の小世界」は、聖者ベネデットーの前身ピエロ・マイロニとジャン・デサレとの戀物語を主題

として居る。最後に擧げた「レイラ」は「聖者」の續篇ともいふべきもので、「聖者」の第五章の末段以後に現れる美少年マツシモ・アルベルテイとレリアといふ(後にレイラともいふ)女との關係や、アルベルテイが聖者ベネデットーの事業を繼續しやうとして色々の迫害に遭ふ有様などを描いたものである。

「聖者」はフォガツアロの名を彼の故國以外に於ても有名ならしめた傑作である。この書が公にされると直ぐ、評論界の議論の中心點となつた。羅馬法王廟の檢閱官會議は、この書を異端的だといつて禁止書籍目録に編入したが、それが爲めに却つて世人の注意を牽いて、餘計に讀まれる様になつた。

讀者は「聖者」を讀まる、前に、次の事を知つて置かれると便宜である。――

ピエロ・マイロニといふ男の妻が、結婚後間もなく發狂して、癡狂院に入れられた。ピエロは不愉快に日を送つて居る中に、ジャン・デサレといふ、これも矢張不幸な結婚をして、當時夫と別れて居た、美しい女と戀意になつて、互に愛する様になつた。それから暫時は彼は自分の信仰を棄て、この不信仰な女と不義の快樂に耽つて居たが、臨終の間に正氣に

緒言
復した妻の言葉を聞いて自分の非を覺つて、悔恨の情に堪へず、その儘何處ともなく姿を隠して仕舞つた。その時から「聖者」の發端までに三年の月日は経つた。そしてジアンは猶悲のために何事も手につかず、戀人に何處かで遇ふかも知れぬといふやうな、儂い事を頼にして暮して居た。彼女は今しも、白耳義に旅行してその友なるノエミ・ダツセルといふ處女と一緒にフルウチユといふ町に滞在して居る。

アントニオ・フオガツアロ作
聖者

小野村林 謹 英 譯
吹田 佳 三

第一章 愛の湖

ジアンは讀みかけの本を開いたまゝ、膝の上に置いて窓の側に腰をかけて居た。彼女は鉛色の水を湛へて足下に眠つて居る楕圓形の湖を見下したり、或は自分の居る家や、その廢園や、向ふ岸の樹木や、遠方の畑や、右手にある橋や、尼院の背後に隠れて見えなくなる静な道路や、壯麗な、神秘的、生氣のないフルウチユの町の阪になつた屋根の上などに、絶えず形容の變る影を投げながら通り行く雲を見上げては、染々と思に耽つた。丁度今まで讀んで居たあの「侵入者」といふ恐ろしい、眼に見えない訪客が、今しもこの墓場のやうな町を通つて居るのではなからうか。あの黒ずんだ水の面に立つ漣はその影ではなからうか。而してその「侵

トリス自身は永遠の眠といふ好もしい賜を齎して既に此家の戸口に立つて居るのではなからうか。折しも會堂の鐘は五時を報じた。高く高く白雲の邊で澤山の鐘の魅するやうな聲がフルウチユの町の家々や巷の上に永遠の休息を與ふる呪文を唱へた。ジアンは二つの冷たい手が自分の眼を覆ふのを感じた。同時に香の波が彼女の頬に觸れて「邪魔者が一人來ましたよ。」と佛蘭西語で囁く氣息が彼女の髪を戦がした。而して柔かな唇が彼女に接吻した。彼女は驚いた様子もなく、手を揚げて自分の肩越しに俯いて居る顔を抱いた。

「ノエさんお歸り。Magari fossi tu l'Intruse. (貴女が「侵入者」だと好いの)」

ノエにはその言葉が解らなかつた。

「Magari して伊太利語なの？ 何だか亞刺比亞語見たやうね。早く教へて頂戴。どうぞ。」

ジアンは立ち上つて、

「教へたつて解りつこはないわ。」とにつこりして「今からいつもの伊太利語の會話のお稽古をさせようか？」

「え、どうぞ。」

「貴女は弟と一緒に何處へ行つて？」

「テムリングの繪を見に聖約翰病院へ行つて來ました。」

「さう、それで好いの。ちやあテムリングの話をさせよう。併しそれよりも先に、弟は貴女に何が云はなかつて？」

娘は笑つた。

「えい、カルリノさんは妻と喧嘩をされるとお云ひなさいますの。ですから妻も貴方も喧嘩をしますとカルリノさんは云ひましたのよ。」

「カルリノさんに云はなければいけません。だが、弟が貴女に惚れると好いんだが。」

とジアンは眞顔になつて去ひ足した。娘は眉を蹙めた。

「嫌ですわ！」

「何故いやなの？ 弟は愛想もよし、伶俐だし、學問もあるし、地位もあるちやありませんか。それにお金持ですよ。金なんかくだらないと云へるかも知れないけれど、金はまた金でそれだけの價值はあるものですよ。」

ノエも、ダルセルは兩手を友の肩に置いて、その眼をちつと覗き込んだ。物問ひたげな青

い眼はしんみりとして憂の色を帯びて居た。このやうに注視められても動じないでその注視に堪へた茶褐色の眼の中には肯かぬ氣と、當惑の色と、笑とが交々輝いた。ノエミは臆て口を開いた。

「カルリノさんと一緒にナムリングの繪を見たり、合奏をしたり、ア・ケムピスの事を話したりするのは面白いんですけれど、あんな無信仰の人が近頃になつてア・ケムピスをお好きにおんななさるなんて、何だか勿體ない様な氣がしますの。全體妻はカトリック信者でない人になら、多分誰にも敗けない位カトリック教に近いのですが、貴女の弟さんのやうな不信者が如何にも感じたやうな聲でア・ケムピスをお読みなさるのを聴きますと、妻の基督教の信仰が無くなつて仕舞ひさうな氣がします。妻はね、カルリノさんが貴女の弟さんだから好きなんて他に何も理由があるんぢやないんですよ。——まあ、ほんちにジャン・デサレつていふ人は折々妙な事を云ふ人ね。ほんちに妙な事を！一體どうしたのか知ら——。だが妻の先生の口眞似ぢやないが「謎さん、まあお待ちなさいよ。」

「何を待つのか？」
ノエミは友の頸を抱いた。

「妻は細い網で貴女の魂を浚へて美しい大きな眞珠を曳き上げますよ。藻も少しはあるかも知れない。底の方から泥もちつとはあがるかも知れない。それから小さな珊瑚蟲も。」

「貴女には妻が解らないのね。妻のお友達の中で妻が解つて居ないのは貴女だけよ。」

「それはさうでせうよ。貴女は貴女を崇拜してる人にだけ本當に貴女が解ると思つて？ほんちに、誰も皆貴女を崇拜すると思ふのは貴女の自惚ですわ。」

ジャンは少し唇を尖らせて顔を擧げた。これは彼女のよくする癖で彼女の友達のよく知つて居る所であつた。

「馬鹿な人ね。」

と云つたが直に顔を和げてノエミに接吻して、半ば悲しげな半ば可笑しさうな笑を見せた。

「妻がいつでも云つてる様に、女はみんな妻を崇拜します。貴女はごうしてもしないつて云ふの？」

ノエミは強く云つた。

「そんなことよ。」

ジャンの眼には悪戯と深切とが輝いた。

「伊太利語では *Di, di tutto cuore* (心底から) 一つ云ふんですよ。」

デサレ姉弟は前の夏をマロオヤで過ごした。—— 其間ジャンは努めて人附合を善くして、彼女の心を受けた癒す事の出来ない創痍を出来るだけ秘して居た。カルリノは心に神秘的情緒の動く時にはジルス・マリアの邊にニイチエの蹟を探つたり、世俗的感情の動くときには花から花に迷ふ蝶のやうに女から女にと飛び歩いたり、度々サン・モリツやポントレジナで食事をしたり、羅馬の獨逸大使館附の陸軍武官とやノエミ・ダルセルと一緒に音楽を奏したり、或はノエミの姉夫婦と宗教を談じたりして居た。

このダルセル姉妹は孤兒で、白耳義生れではあるがその祖先は和蘭人の新教徒であつた。姉の方のマリアは伊太利の哲學者のチヨヴァニ・セルヴァと云ふ老人と風變りな、傳奇的な交際をした後に結婚した。セルヴァは恐らく伊太利に在る進歩派のカトリック教徒の最も眞正な代表者であつたから、若し伊太利人が神學上の問題にもつと深い興味を有つて居たならば、彼は必ず其國で有名な人物になるに違ひなかつた。マリアは結婚前にカトリック教の信者となつて居た。セルヴァ夫婦は毎年冬の中は羅馬に住み、其他はスピアコで暮した。妹の

July

ノエミは堅く祖先の信仰を守つて居た。彼女は交るがはるアルウセルと伊太利とで日を送ることにして居た。ところが彼女と共に住んで何かと世話をして呉れた老女教師がつい一ヶ月前の三月の末にアルウセルで死んだ。その當時セルヴァは大病に罹つて居たので、彼も妻のマリアもこの危急の場合にノエミの處へ行く事が出来なかつた。ジャン・デサレは大層ノエミを愛して居たので、幸ひ弟のカルリノは白耳義を未だ知らなかつたから、彼に勸めて共にアルウセルへ行つて、セルヴァ夫婦の代りにノエミの世話をする事になつた。かう云ふ理由で四月の末頃にノエミはデサレ姉弟と一緒にブルウヂュに居たのである。彼等は「愛の湖」と云ふ鏡のやうな小さな湖水の岸に別荘風の家を一軒借りて居た。カルリノはブルウヂュの町に惚れ込んで仕舞つた。殊にこの湖水が氣に入つて、自分が書いて見やうと思つて居る小説に「愛の湖」と云ふ題を附けやうと考へて居た。併しその小説は未だ單に彼の頭の中に存在して居るのみであつて、彼は他日神韻飄渺たる獨創の作品を出して社會を驚倒して呉れやうと云ふ愉快な豫想を抱いて日を送つて居たのである。

「兎に角、心底からはしませんよ。」

とノエミは答へた。

「どうして？」

「妾はある人に妾の心を任せやうと思つてますから。」

「ある人つて誰？」

「坊さんの。」

ジャンは身慄をした。ノエミもはっと思つた。彼女はジャンが何處とも知れの修道院の寂寥裡に深く身を埋め盡して仕舞つた男に儂い戀をして居る事をジャンから打明けられて居たから、友の心を絶えず苦しめて居る事柄をこんな戯談半分に云ひ出して悪い事をしたと思つて胸を躍らせた。而して顔を眞赤にした。

「あの、先刻のメムリングの話はどうなつて？メムリングの話をしかけて居たのでしたに。」

ノエミは佛蘭西語で話したから、

「伊太利語で話さなければいけませんよ。」

とジャンは静かに云つた。

ジャンの眼には深き悲愁と絶望との色が浮んで居たから、ノエミは彼女の注意の言葉に構

はず、佛蘭西語で色々友愛の情を表す言葉を云つて、それからジャンに優しい言葉と接吻を求めた。

ジャンは喜んでその求に應じた。ノエミにはジャンを平素の通りに落着かせる事が容易に出来なかつた。けれどもジャンはノエミの額に垂れて居た髪を両手で撫であげて、ノエミが心配して色々機嫌を取らうとするのをちつと見ながら、ノエミが自分の感情を害したなど、心配しないやうにと言葉静かに宥めた。實際ジャンは鬱いで居た。併し是れは今に始まつた事ではない。ジャンは今日迄陽氣であつた事はなかつた。それはノエミにも解つて居るが、今日は悲愁の雲がとりわけ深いやうである。多分あの「侵入者」を読んだ故かも知れない。ジャンは「ほんどにね。」と云つたが、その言葉の調子と彼女の眼色とは、彼女をこの様に悲しませる「侵入者」といふのはメテルリンクの書いた架空の存在者ではない、あの恐ろしい「死」そのものであると語つて居た。ジャンはノエミが色々心配さうに尋ねるのを打消して、

「伊太利から手紙が来てよ。ドン・チウセツペ・フロレスさんが亡くなつたつて。」

「フロレスさん？フロレスさん誰？」

ノエミは彼の事を忘れて仕舞つて居たので、ジャンは折角何もかも打明けて話したのにな

んなに忘れつばいとは頼み甲斐のない人だと云はぬ許りにノエミを責めた。このドン・チウセツペ・フロレスといふのはヴェネチアの老僧で、ピエロ・マイロニの最後の傳言を帯びてジアンをウキラ・デ井エドの別荘に訪れた人である。ジアンは其時自分の戀人ピエロ・マイロニは此老僧の勸告によつて世捨人にならうと決心したのだと一圖に思ひ込んで居たから、彼女はフロレスを冷淡にあしらつたばかりでは腹が癒えず、今度のフロレスの世話は、無限の慈悲に満ちた天父の僕に實に相應しい立派な仕業であること、自分の邪推を皮肉な言葉で當擦つた、それを聞いた老僧は、天來の光明に輝いた美しい顔に憐憫の色を浮べて、靈的の智恵に満ちた莊重な而も温和な言葉を以て諄々事の道理を説きかされたので、ジアンは終に自分の非を悔いて老僧の宥恕を乞ふたばかりではなく、今後は折々訪問して呉れよと頼んだ。

フロレスは其後二回ジアンを訪ふたが、二度とも不在であつた。それで其次にはジアンの方から老僧の淋しい住居へ行つて色々話を聞いた。徳は極めて高く、身を持つる事は甚だ低く、熱情に富んで而も謙遜、寡言のこの老僧との會談の消すべからざる記憶はジアンに堅く残つて居た。故國からの通信によると彼は既に此世の人ではない。彼は謙遜に心靜かに神

の聖旨に服従して永久の眠に就いた。死ぬ少し前、彼は永い一夜の夢の中に、あの主人が銀を僕等に預けて旅行する比喩談の中の忠實な僕の言葉、「見よ、我他に五千の銀を儲けたり。」といふのを續け様に見た。そして臨終の際に、「我が意にあらで聖意を成させ給へ。」と云つた。この手紙をジアンに寄越した者は、ジアンが心の中に多くの不安や宗教を求めぬ念があるに拘らず、なほ常に頑として神と不死とを永劫の迷信であるとして是を否認し、時折禮拜に列するけれどもそれは唯だ彼女は不信者であると云ふ好ましくない評判を避けるためであるといふ事を知らなかつたのである。

ジアンはドン・チウセツペの最期の有様を委しくはノエミに話さなかつたが、獨りでつくづくその事を考へるにつけても、若し自分に信仰を有つことが出来たならば、こんな悲しい苦しい思をせずに済むだらうにと漠然と自覺して深く情なく感じた。何故斯う感じたか云へば、ジアンはピエロ・マイロニの魂の奥底には常に或る遺傳的の宗教心が潜んで居た事を知つて居たし、且つ彼女はあの月蝕の晩、自分の不信仰を告白した時に、我と我が手で運命の書に自分の罪の宣告を書きつけたと、今は固く信じたからである。それからまた彼女はノエミには話さなかつたが、矢張同じ手紙の中に書いてあつた別の悲しい一句に就いて思に

沈んだ。黙つては居ても彼女の悲は顯然に知られた。ノエミは自分の同情を喜んで受ける友の心の奥深く秘められた悲哀に心を動かされて、ジアンに唇を押しあてたまふ暫時黙して居た。纏て彼女は二人の魂を結びつけた細い糸を断つてはならないと思ふかのやうに、友を抱きしめて居た手を静かに解いて、低い聲で、

「若しやその坊さんがあの——貴女はその坊さんがあの方のいらつしやる所を——。」

と囁くとジアンは首を振つて打消した。ドン・チウセツペがピエロの行術を知つて居やう筈はないと云ふ理由はかうである。あの悲しい七月の後の九月にジアンの不幸な夫はヴェネチアで酒の中毒で昏睡に陥ちて死んだ。それでジアンは十月にドン・チウセツペ・フロレスを訪ふて、庭園で、自分の夫が死んだ事をピエロに知らせて貰ひたい、さすれば（若し彼が今猶自分の事を思つて居て呉れるならば）此後は心に疚しい所無く、彼が自分の事を思ふとが出来てあらうからこの希望を語つた。老僧は言葉優しくその様な儂い空想に耽つてはならないと懇に諭し、またピエロが姿を隠してから少しも音信がないと容を正して明言した。ジアンはこの上いろ／＼の事を尋ねられるのを怖れたし、また自分の心の創痕を不熟練な指で弄られるのは嫌だつたから、此處で話題を轉じやうとした。

「貴女が先刻云つたあの坊さんの話をして下さいな。」

丁度その時、玄關にカルリノの聲がした。

「今話すのは廢止にして今夜にしませう。」

カルリノは白絹巾の頸巻を頸にぐる／＼巻きつけて這入つて來た。そしてこの「愛の湖」は名ばかり立派で、その實は有毒な嫌な小蟲を製造するより他に能のない大詐僞師だと罵つた。「けれども愛そのものもこの湖水と同じで、いゝ加減なものだ」。ノエミはカルリノに愛を談ずる事を許さない。自分で愛が解りもしない癖にどうしてそんならさうな事を云ふのかと詰る。大にお世話様、僕は貴女に惚れかけて居た處で、どうか變な事にならねば好いが大層心配して居たのだ。處か貴女が先刻妙な羽の付いた嫌な帽子を冠つて出掛けるし、またあの下らない肩の凝るメンテルリオンと云ふ野郎を褒めて趣味の低い事をさらけ出すし、今またそんな事を云ふから、これで僕も目が覺めて大に助かつた、とカルリノがやり返す。それから暫時の間二人は互に敗けず劣らず言葉を戦はせた。カルリノは扁桃腺が悪いのも忘れて鏡舌り散らすといふ大元氣なので、ノエミは彼の例の小説に就いて祝意を表した。

「もう随分抄りましたでせうね。」
小説家は答へた。

「戯談ぢやない、ちつとも抄りやしない。」

例の小説は少しも前へ進まずに回復の見込のない事態の淺瀬に乗上げて跪いて居る、二つの人物が作者の咽喉につまつて上へも下へも動かない、その一人は肥つた好人物で、今一人はタルセル嬢のやうな瘦せた皮肉屋だ、それで近頃無花果に蜂がどまつて居たのを其儘嚙み込んで死んだタスカニイの百姓と同じやうな心持がする、とカルリノが云ふ。その「蜂」はカルリノがさう云つて居るものゝその實は例の小説の事を話したいのだと見て取つて、遠慮なく彼處此處を螫したので、到頭カルリノはその事を語り出した。その小説は奇妙な精神的傳染を骨子としたもので、主人公は八十歳餘の學問のある敬虔な徳の高い佛蘭西の老僧である。佛蘭西人？なせ佛蘭西人なの？別に深い理由があるのではない。唯だ主人公は少し詩的空想と弾力性のある感情とを具へて居なければならぬのに、カルリノの意見によると伊太利人の僧侶でそんな高尚な天性を持つて居さうな者は千人に一人もないからである。扱て或日の事、非常な懷疑の爲めに信仰を裏はれて煩悶して居る所の一人の智慧の優れた男がこの

老僧の許へ来て懺悔をする。懺悔が済んでからその悔い改めた男はすつかり信仰を回復して歸つて行くが、老僧の信仰はこの告白の爲にその根底を動かされる。其邊でこの老僧の良心が通過する種々なる精神状態の長い精密な解剖が始まる。彼は學校の生徒が自分の頭が空虚であると云ふ外に何も知らずに、試験場の次の間で自分の順番の來るのを、胸を躍らせて待つて居るのと同様の恐怖の念を以て日々死の到るのを待つて居る。彼は遂にフルウチュの町へ來る。此處まで話が進んで來ると例の批評家が口を出した。

「フルウチュへ？何故？」

「何故と云つて、僕は僕の小説中の人物を僕の好きな處へ遣るのさ。フルウチュの町には來世の次の室のやうな寂寞があるし、それにまたあの鐘の音が——正直に云ふとあの鐘は此頃大いに癪に障るんだが——それでも天の使の呼ぶ聲に聞えるかも知れないからさ。それから一つの理由は、フルウチュに丈の高い瘦せた、色の黒い、伊太利語は下手で音楽は解らないけれども伶俐だと云つても好い若い女の人が居るからさ。」

ノエミは唇を窄めて鼻に皺を寄せた。

「馬鹿な事ばかり云つてらつしやるわ。」

カルリノは猶ほ言葉を續けて、どう云ふ風にするか今の處では未だ判らないが、兎に角この色の浅黒い娘が例の老僧の處で懺悔をする事になると云ふ。ノエミは笑ひながら、どうして其娘は自分ぢやないに決つて居る、カトリック教徒でないものが懺悔をしに行くものかと反對する。カルリノは肩を聳かして、少々ぐらゐ間違つてたつていゝぢやないか、新教も舊教も畢竟は同じやうなものだ。それで老僧は此娘の單純な堅い信仰と接觸して自分の前の信仰を回復する様になるのだと云ふ。此處で彼は話を中止して、ノエミさんは一體どんな信仰を有つて居るのかどうも判らないと云つた。ノエミは顔を赤くして、自分は新教徒であると答へた。新教徒は判つて居るが、真正正銘混りつ氣なしの新教徒かとカルリノが問ふた。「妾は新教徒ですつたらそれでいゝぢやありませんか。妾の信仰の事なんぞ心配しないでうつちやつといて下さい。」

とノエミは焦れて叫んだ。實際彼女は新教の信仰を堅く守つて居た。併しこれは自分の確信から出たと云ふよりは寧ろ既に世を去つた彼女の両親を敬ひ愛する心から出たと云ふ方が適當であらう。それで彼女の姉マリヤが舊教に入つた事は彼女の心密かに非難する處であつた。

カルリノは話を續けた。或る神秘的異性の感化は總てこの老僧をしてこの娘との精神的結婚を冀ふに至らしめる。「馬鹿馬鹿しい」とノエミは例の通り口を尖らした。カルリノは構はずに先へ進んで行つた。この小説の最も微妙な最も美しい部分は今云つた老僧と娘との心に等しく不可思議な感化を與へる所の異性の力の解剖をする處にあるのだ。

ジアンは口を出した。

「カルリノさん！まあ何を考へてるの？八十にもなる爺さんが——。」

カルリノは「何て馬鹿ばかり集つたらだらう！」と何者か眼に見えぬ友に訴へるやうに空を見上げた。

カルリノは主人公をもつと老人に——譬へば九十歳位にしやうかごさへ思つた。將に自分の目前に迫らうとする來世の朦朧とした深淵を常に眼にして居る人間と靈物との中間にある一種の存在者を創造しやうかごさへ思つたことがある。娘はまたその血の中に年齢の寄つた男子を好む處の不可解な性癖を有つて居る。この性癖は女性にまゝ見受ける處で、これこそ眞に高貴な女性の最も眞正な標であつて、是によつて女といふものが女性から區別されるのである。この九十歳の老人——墓場の入口に立つて居るが、なほ「時」の勢力を以てしても

打勝つ事の出来ない剛毅な精神に支へられて居る老僧——の方へ二十四歳の娘を引きつけるこの神秘的な力に關して語るべき天來の妙想がカルリノの頭の中に藏されて居る。それはそれとして、扱て此話の結末は如何いふ風につくのかはノエミにもジアンにも想像が出来なかつた。それだからカルリノも彼の咽喉に塞まつた無花果と蜂とが、上りも下りも出来ない始から云つて居るではないか。併しこの書物も甘く結末がつかねばならないといふ考は唯だ單に淺薄な取るに足らない偏見に過ぎないといふ事が、今の場合にせめてもの心遣である。この世の中に眞に終のあるものが何處にある？とカルリノが云つた。それは一應尤だけれども、併しこの小説には是非何と結末をつけねばなるまいと二人の女が云つた。

この小説の最後の場は、老僧と娘とが月の光を便にアルウチユの町を逍遙する實に美しい光景を書くつもりである。其夜二人の魂は互に交通して彼等は半ば戀人同志のやうに語り、半ば豫言者のやうに冥想に耽るのである。丁度眞夜中に彼等二人は眠つて居る「愛の湖」の汀に立つて、雲の邊で鳴る鐘の凄い音に無言で耳を傾ける。其時に二人は彼等の靈魂にも男女の別のあると、未來はフォーモー星の上で愛の生涯を送るといふことを臆げに覺る。「なせ態々フォーモー星をお選びなすつたの？」

とノエミは問うた。

「ほんごに貴女等にも困つたものだ。フォーモーといふ名が實にいゝぢやないか。獨逸の霜で凍つて東洋の日光で溶けたやうな響がする。」

「馬鹿らしい！宛然化學のお話だわ。妾ならアルゴル星にするわ。」

「ぢや、貴女は貴女の牧師と一緒にアルゴル星へ行くさ。」

ノエミは笑つた。カルリノはジアンにどちらの星の方がいゝかと問うた。ジアンにはどちらがいゝか判らない。彼女は話を聴いて居なかつたのである。カルリノは腹を立て、ジアンの不注意よりもその不注意の原因となつた隠れた心配を責めたいやうな風であつたが、餘り云ひ過ぎてはならないと思つて、他所へ行つて沈思冥想して煙と雲の哲學を書いて來いと云つた。けれどもジアンが少しも腹を立てずに室を出かけたので、それを呼びとめて小説の終はどうなるか聞いたかと問うた。左様、主人公と女主人公とがアルウチユの町を月明に乗じて逍遙する處だらうとジアンは答へた。

「今夜は月夜だらうから、十時から十二時まで、姉さんとノエミさんと三人で散歩して、少しノートを取りたいと思ふがどうです。」

どカルリノが云つたので、ジアンは室を出がけに、

「妾は坊さんの姿をしませうか。」

と問うた。ノエミは彼女に随いて行かうと思つたが、ジアンが待つて居て呉れよと云ふから後に残つて、カルリノに向つて貴女のやうな人にジアンのやうな姉は勿體ないと云つた。カルリノは貴女なんか何を知るものか——ほんどに何も知らないと言きながら、樂譜の挾を開けてパツハの小本を捜した。暫時の間はパツハの妙曲も彼等の激した感情を鎮める事が出来ないで、二人は小競合を續けて居た。そして聯奏をして居る間もジアンの事や互の弾き損ひに就いて戯談を云ひあつた。けれども今まで怒りの渦に擾がされて居た律呂の清流は、纏て二人の不機嫌を和げて、青空と詩的田園の影を映しつゝ溶々と流れた。

ジアンは讀みかけの「侵入者」を自分の部屋へ携つて行つたけれども讀まなかつた。その室は「愛の湖」に臨んで居た。彼女は窓に近く腰をかけた。橋の彼方、家と家との間に蜿蜒として禿た頂を出して居る丘陵の彼方に、青い霧に姿可笑しく包まれた高い塔の尖端が見えた。彼女は別室で絶えず静かに流れて居るパツハの妙曲を聴きながら、住み馴れた戀しい家を去

る者が一步毎に後を顧みながら行くうちに、路の曲り角で今まで見えた懐しい我が家の隅、たゞ一つ見え残つて居た窓までが全く見えなくなつた時に感ずる暗愁に等しい心地を以つてドン・チウセツへの事を憶つた。ジアンの悲哀の中には一つの憂慮の種因が交つて居た。彼女が受け取つた手紙に次の如き事が書いてあつた。ドン・チウセツが遺して置いた書類の中に「余の遺産管理人はこの一封を監督臺下に送達すべし。」と老僧の自筆で表書をしてある、封印をした小包が発見された。監督の邸宅から直接に出た時によると、その包の中にはドン・チウセツから監督宛てた手紙と「ピエロ・マイロニの死後開封すべし。」と別の筆蹟で書いた封筒とがあつたとか。そして監督は「ピエロ・マイロニといふ男は何處に居るか知らないが、死んだならば死んだと自分で知らせに来るだらう。」と云つた相である。

ピエロが夜に紛れて失踪するに先立つて、自分の將來の生涯と死に就いて見た幻の覺書をドン・チウセツに托して置いた事をジアンは知らなかつた。この幻はピエロがその妻が癡狂院で死にかゝつて居た時に地獄の小さな教會堂の中で見たもので、ジアンの少しも知らなかつた事である。その封筒に何が這入つて居たのだらう？ 屹度何かピエロが自分で書いたものに違ひないが、一體何だらう？ 多分彼の罪の懺悔状であるかも知れない。若し彼が

左様いふ事をしやうと思つてそんな方法を實行したとするならば、それはピエロの生來の神秘的性格や、理性以上に想像力が發達して居る事や、彼の元來の智的形相やに相應うて居る。ジアンがヴェナ・テ非・フォンテ・アルタで絶望の餘り再びピエロを愛すまいと自ら誓ひ。この世には今後自分の愛すべきものが他にないと感じた時から早くも三年を経た。だが思ひ切ると誓つたものゝ矢張ピエロを始終慕つて居た。けれども彼女は、感情の掣肘を受けない彼女の理性を以て、過去に於ける如く今もなほピエロを非難して居た。彼女の理性が感情の羈絆を脱して獨立して居るといふ事は彼女の大に誇とする處であつた。彼女はピエロがプリアの修道院で力任せに彼女を征服した時からアクア・バルレナの噴水池の邊で二人の唇が相觸れた瞬間に至るまでのかの男の所作と態度とを悉く容赦なく非難して居た。ピエロは人を愛する事も、事を決行する事も出来ない、優柔不斷な、心の定まらない、女々しい男であつた。實際彼は最後まで女々しかつた。自分のヒステリイ的な神秘説に就いて男らしい判断を下す事の出来ない女々しい男であつた。如上のジアンの中の非難の中には幾分か態とらしい處、過酷な處、この全能無敵の戀情に對して弱い叛逆を企てた跡が認められやう。ジアンは猶も案じ煩つた。若しピエロが僧になつた事が眞實ならば彼はきつとそれを後悔

するに違ひない。彼は餘りに肉感的である。當座の悲痛と熱中の時期が過ぎれば彼の肉慾は再び覺醒て、理性よりも寧ろ青年の感情と習慣とに訴へる點の多い信仰に對して彼の反感を起させるであらう。とはいふものゝ彼は實際僧になつたのだらうか。細い尖塔を以て空を指して居るノオトル・ダムの大きな塔も、尼院の陰氣な壁も、停滞した「愛の湖」の水も、またこの生氣のないアルウチュの町の寂寞さへも「然り」と答へる様に思はれた。けれどもこんな聲に耳を假す事は迷信であらう。

「何處まで行くの？ 妻がほんとに九十の坊さんになるの？」

とジアンは十時が鳴つた時に手袋を穿きながら問うた。カルリノは圖抜けて長い首巻の片端を自分の頸の後にあて、片端をノエミに持たせながら紡績の鐘のやうにぐる／＼廻つて居たが、遂に頸の周圍が頭よりも太くなつた。彼はノエミが笑つて首巻をしつかり持たなかつたので焦れた。

「姉さんでもノエミさんでも孰でも構はない。夫から往路に町の中央へ行つて、歸途に「愛の湖」の彼岸を回つて、道で何か面白い事を話すなら、何處へでも貴女方の好きな方へ行かう。」

とノエミに首巻の端を留針で留めて貰つて、やつと解放せられた時に、頸の太い小説家が答へた。

「貴方が側にいらつしやるのに？ それぢや如何して面白い事が話せるものですか。」

とノエミが云つた。カルリノは二人と一緒に歩かずに、ノートブックと鉛筆を持つて後から随いて行つて、折々氣に向いた時に立ち停るから、その時には二人も彼の欲するが儘に停るやうに、それからまた他に必要な事があれば臨機に命じるから、その時には云ふ通りになるやうにと説明した。

「解りました。始めにロセエルの機橋へ行つて白鳥を見ませう。」

とノエミが云つた。三人はノオトル・ダアムの方角へ出懸けた。カルリノは二人から十間程離れて従いて行つた。始めの内は先鋒と殿軍とが人通りの無い街路を通りながら元氣よく口論を續けた。先鋒の歩調が速過ぎるとカルリノは「九十にもなつて？ 九十にもなつて？」と叫ぶ。二人が笑うと「何を笑つてるんだ。静にッ！」と怒鳴る。それから月光を浴びた破風や尖塔が物凄く聳えて、直ぐ傍には墓場が眠つて居る古い教會堂を竹視して立ち停るかと思ふと、また二人に話したり手真似をしたりせよと頼む「何をばんやりと凝視して居るんだ？」

と詰る。纏て先鋒が反抗し始めた。殊にノエミが痲癩を起して居る。到頭彼女は背後を向いて焦れた相に足踏をしながら、この首巻をした厄介な小説家が五月蠅く指圖をしたり小言を云つたりするのを止めなければ捨て、置いて家へ歸ると息巻いた。その際ジアンは囁いた。

「あの晝間の坊さんの話をして下さいな。」

「坊さん——あゝさうでしたつけ。」

ノエミはカルリノに、これから可成云ふ事を語りやうにするからもつと離れて歩いて呉れるやうにと云つた。

今朝ノエミはロセエルの機橋の上に立つて、餌に飽いた多くの怪しい獸がどんよりした眼で思ひ／＼の方向を眺めて居るやうに、水の中から耳の大きな長い顔を突き出して居る大小様々の家屋と、この獸群の番人のやうに見えるハルの巨塔との動かぬ影を、白鳥が悠々とした足掻を以て揺がしながら樂しげに水の上を遊び廻るのを見たが、今は最早一羽も見えない。月は家の上を斜に照して、立派な屋根や、尖塔や、小塔の上に乗つて居るカルデアの魔法師の尖つた帽子様の物などの上に家の陰影を投げた。そして一番上にハルの壯大な塔の八角の冠が黒く聳えて居た。けれども暗い水面には少しも月影が映さなかつた。ジアンとノエミ

は欄干に凭れて陰氣な深い水をちつと眺めて居た。ノエミは絶えず話し続けた。カルリノがノートブックの三四頁を埋めて、その上に或る派手好みの商人の家の軒飾のスケッチをして仕舞つても、未だ二人は話して居た。この軒飾には日と月と星とが始めて是を見た記念すべき「一千七百十六年」と年代が彫りつけてあつた。

ノエミは例の話を始めた。彼はスピアコのサンタ・スコラスティカ修道院に居るベネディクト派の僧で名をドン・クレメンテといつてセルヴァ夫婦と相談の間柄である。チヨヴァアニはスベロへ行く路にある古い建築の廢趾の近くで始めて彼に遇つた。チヨヴァアニが彼を路を問うたのが縁となつて互に話を始めた。僧の年配は三十の阪を少し越した位で、容儀態度ともに誠に上品であつた。二人の話は近くの廢趾の噂から始まつて、總て修道院とその戒律とに移り遂に宗教問題に亘つた。このベネディクト派の僧は音聲その物が既に清浄な有徳の生涯の薫を漂はすやうに思はれたが、同時にまた智識と現代思想とに憧る、心を有つて居る事も明であつた。遂に二人は再會を約して惜しき訣別を告げた。靈魂の美に輝いて居る様な容貌を有つて居る此青年僧を圍繞める雰圍氣はチヨヴァアニに一種の刺戟を與へた。同時に、また、チヨヴァアニとの短い會談が靈魂の合理的光明に渴ける若僧の信仰の目前に展開げた思想

の曠野と、チヨヴァアニの宗教的知識とはベネディクト派を深く魅した。チヨヴァアニは嘗て或る名門の青年が意中の女の死後サンタ・スコラスティカ修道院でベネディクト派の僧になつたといふことをスピアコの町での噂に聞いたが、その青年とはドン・クレメンテに違ひないと思つた。彼はこの事を二三の僧侶に就て尋ねてみたけれども少しも得るところが無かつた。二人は其後度々會談した。チヨヴァアニはドン・クレメンテに書籍を貸して遣るし、ドン・クレメンテはセルヴァの住居へ来てマリアにも會つた。ドン・クレメンテはまた音樂の嗜があつた。その事は、チヨヴァアニが嘗て太陽が黎明に霧に包まれて照る時から、正午に赫赫と輝く時まで、徐々として力を増して行く有様を、神がシナイ山頭の巖石を覆ふ電雲の中に現れ給うた時から、次第に進んで人の心の中に光明を齎して臨み給ふに至るまでの神の自啓の進歩に譬へた言葉に感じて自ら作つた「黎明の歌」といふ一曲をオルガンで奏したので判つたのである。また或時チヨヴァアニは、既に一度ノエミと共に談じた事のある問題、即ち「人間の靈魂は此世を去ると同時に自己の未來の運命を覺るや否や」といふ問題をドン・クレメンテに提出した。其時の彼の答は、死後——。

ノエミが此處まで話した時にカルリノは背後から、此處へ天幕を三つ張つて終夜居やうと

する氣かと問うた。ジアンとノエミとは氣がついて、テ・レイヌ町の方へ歩き出した。ノエミは話を續けた。

「ドン・クレメンテさんは、多分人間の靈魂は此世と同じ様に自然の法則に支配される境遇の中に居つて、自分も其法則に支配されるのであらう、亦後の世でも今と同じ様に未來はただ徴候に依つて豫想するだけで決して確に判るものではあるまい、と云はれた相ですよ。」

狭い暗い町の入口で彼等と行違つた一人の男が此時後戻りをしてジアンとノエミの側を通り過ぎながら二人をちらちらと見た。ジアンは恐くもないのに恐しげに立ち停つて、カルリノを呼んで家へ歸らうと云つた。彼女の聲は實際常とは異つて居たが、カルリノは本當に彼女が恐がつて居るとは信じなかつた。一體何が恐しい？二三年前に大四辻の燈火が見えるではないか。それにカルリノはあの男を知つて居て、例の小説の中へその男をも編み込まうと思つて居るのである。彼は「白鳥の様な頸をした」イイテネスの兄弟の暗黒の魔で、ハロルド王の妹の聖ガンヒルドを喰かさうとした罰として、アルウチユの町を夜中彷徨いて罪亡しをしなければならぬのである。これまでにカルリノが夜アルウチユの淋しい處を歩く度に、いつでも必ずあの底氣味の悪い姿が目當もないやうに歩きまはつて居るのを見た。

「貴方は人に安心させるのがお上手ね。」

とノエミが云つた。

カルリノは肩を縮めた。そしてあの男に遭つたお蔭で小説の女主人公の名をガンヒルドにして、ノエミといふのは、姑の名にしやうといふ事に氣がついて大變都合がよかつたと云つた。

町の右側に聳えて居る大きなハルの黒い陰影の中で、先刻の氣味のわるい男がまた後戻りをして、ジアンの脇を殆んど擦れ合ふばかりに通り返つた。ジアンは今度は本當に身慄をした。丁度そのとき頭の上の雲の中で澤山の鐘が鳴り出した。

ジアンは物をも云はずノエミの腕を感性的に締めた。彼等は黙つて大四辻を過ぎた。カルリノは暗い鋸の齒の様な屋根の少し上に懸つて居る月に照らされた、左の淋しい町を通れど二人に指圖した。

「急いで早く歸りませうよ。」

とジアンは友に囁いた。けれどもカルリノはオテル・ド・フランドルの窓を漏れる舞踏の音楽を聴いて、二人に止めと命じて置いて、ノートブックに何か書きはじめた。ノエミが二

三年前にこのオテル・ド・フランドルで泊つた事があると云つて、この旅館の事を話しかけた時にジアンは不意に遮つた。

「マリアさんがその長い話を貴女の處へ書いてお寄せしなすつたの？」

ノエミは驚いたと云ふよりも寧ろ心配さうに、

「え、姉さんが。」

「何故マリアさんが態々そんな事を云つてお寄せしなすつたの知ら？」

ノエミは答へなかつた。ジアンは今まで離さずに握つて居たノエミの腕を揺ぶつた。

「何故黙つてらつしやるの？ 貴女はどう思つて？」

二人とも暫時無言であつたけれども、カルリノが左へ曲れと云つたのが聞えなかつた。カルリノは腹立たし相に傍へやつて来て、二人の肩を掴んでふう／＼怒りながら左の方へ向かした。二人は彼の聲にも様子にも氣がつかず、彼のなすが儘に従つた。

「何故返事をなさらないの？」

とジアンは悲と驚と相半して繰り返した。

今度はノエミが友の腕を締めた。

「家へ歸るまでお待ちなさい。」

「その樹の下で停るんだ。」

とカルリノが叫んだ。

ジアンはそれに構はず、古い大寺院の塙の下、一面に低い樹木の生えた、そして月光をあびた空地まで来ると、立寄りさま、今までノエミの腕に纏つて居た自分の腕を伸してノエミの手を掴み、情に激して身を震はせた。

「ノエミさん、貴女は姉さんに何か云つて？ さ、早く返事をして下さい！」

カルリノは背後から二人に、其處に居たくば居てもいいから、互に何か興味のある話をし居るやうな風をせよと云つた。

ノエミが怖々と低い聲で「え、」と答へたのでジアンは事情をすつかり覺つた。マリア・セルヴァはこのドン・クレメンテといふ僧がピエロ・マイロニであると信じて居たのである。

ジアンはノエミの手を緊と握り締めて、

「嗚呼！ けれども姉さんは本當にさう云つてなすつて？」

「さう云つたつて、何を？」

「何をつて！」

やれ〜！ノエミに事實を吐かせる事は中々容易でない。ジアンはノエミの手を離して行かうとした。けれどもノエミは吃驚して直にまた彼女の腕を掴んだ。

「うまい〜！だが、やり過ぎちやいけないせー！」

とカルリノが叫んだ。

ノエミは辯解した。

「堪忍して下さいね。つまり是は當推量なのよ。たゞもう、さうぢやないか知ら位のことなんですよ。姉さんもさう云つてよ。」

ジアンは疑懼と臆測を拂ひ除けて叫んだ。

「違ひますよ。違ひますよ。あのぢやありません。そんな筈はありません。あの人は音楽なんか知りませんよ。」

「左様ね、あのぢやありませんね。」

とノエミはカルリノが近づくを見て聲を潜めてジアンを慰めた。カルリノは傍へ来て二人の芝居を褒めて、そして二人に静に木立の間を歩く事を求めた。

木蔭へ這入つてから、何故こんな事を今まで云つて呉れなかつたのか、もつと早く家に居るうちに云つて呉れるとよかつたに、ジアンは殆ど腹立がましく苦情を云つた。それからマイロニは音楽家ではなかつたからこのベネディクト僧がマイロニである筈がないとまた云ひ出した。ノエミは自分を辯護した。今日メモリングを見に聖約翰病院へ行つて歸つた時に話さうと思つたが、ジアンが餘り沈んで居たから躊躇した。それでも矢張話さうと思つたが、カルリノが這入つて来たから話さなかつた。今夜一緒に歩いて居る中にジアンが餘り喧しく尋ねるから、甘く受け流す事が出来なかつたのである。若しオテル・ド・フランドルの側に立つて居た時に、ジアンがあの事を云ひ出さなかつたら、黙つて居る積であつた。そして家へ歸つてからすつかり話さうと思つて居たのである。

「で、姉さんは本當にさう思つてゐらつしやるんですね？」

とジアンが云つた。

いや、マリアも少し疑つて居るので、チョヴァニの方がそれを信じて居るらしい。少くともマリアの手紙には、チョヴァニがさう信じて居ると書いてあつた。これを聞いてジアンは躍起となつた。どうしてチョヴァニはそれを信じるのか。彼はその事に就いて何を知つて居

るのか。マイロニはピアノで樂譜の一段も弾けないのだ。嘸立派な證據があるのだらう！ノエミは温和しく、それでも三年経つ中に音楽を習つたかも知れない。僧侶は風琴を弾く必要があるから稽古をするのだらうと云つた。

「ぢや貴女もさう思ふんですね？」

とジアンは叫んだ。

ノエミは大に踴躍つて口籠りながら、「妾には解らないわ。」と云つたので、ジアンは激しく昂奮して、事實を確める爲めに早速スピアコへ行かねばならない、既にマリア・セルヴァにノエミを連れて歸る約束をしてあるし、またカルリノを勤めて直様出發する工夫も附かうと云つた。ノエミは之れを聴いて驚いた。姉婿ゾヨヴァニは、ジアンがスピアコへ歸らない方がジアンの爲にも、ドン・クレメンテの爲にも善いと思つて居るから、ジアンがスピアコへ行く事を好まないだらう。目下の場合、情を壓へて戀人に會ふ事を斷念する方が善いとジアンに納得させる事はノエミの役目である。セルヴァは既に全快したから、ノエミを迎ひに行かう、都合で白耳義までも出懸けやうと云つて來た。で、ノエミは今早速出發しやうといふ考に反對してみたけれども、唯だジアンに腹を立てさせる許りであつた。ジアンはセルヴ

ア夫婦が思ひ違ひをして居るのだと再三再四繰り返したが、それ以外に彼女の猛烈な抵抗の理由を擧げる事は出来なかつた。此時カルリノは姉の語氣の鋭い、「もうそれで澤山よ。」と云ふ聲を聴きつけて近寄つて來て、どうした、老僧と娘とが喧嘩をして居るのか、聽て例の神秘的な愛情が起り始める時分だのにと云つた。ノエミは痲癢を起して、

「打遣つといて下さい。今頃は貴方の九十の坊さんは草臥れて十通許りも死んでる時分ですよ。是からはもうぐづぐづ指圖は御免です。貴方よりも妾の方がアルウヂユの案内はよく知つて居ますから妾が先へ行きますせう。貴方は一町ばかり離れて隨つて來らつしやい。」

カルリノは呆氣に取られて「お、こりや酷い！」とより外に言葉が出なかつた。ノエミはジアンの手を取つて、サン・ゾーヴァール教會堂の小さな墓地の柵に沿つて歩いた。そして今まで秘めて居た事をジアンに打明けるのは今が好い時機だと思つた。

「本當は妾もゾヨヴァニさんの推測が當つてるのだらうと思つてますの。何故つてばドン・クレメンテといふ人はアレツシアの人ですもの。」

ジアンは情無さが胸に込み上げて來て堪へ切れず、ノエミの頸を抱いて涙に咽んだ。ノエミは狼狽へてジアンに心を落着けるやうに切望した。

「ジャンさん、後生ですから、ね！」

ジャンは泣吃逆をしながら、カルリノがこの事を知つて居るかどノエミに問うた。否、カルリノは知らないけれども、若し此有様を見たらどう思ふだらうとノエミは答へた。

「此處に居れば弟には見えなくつてよ。」

とジャンは吃逆り上げた。今二人は教會堂の蔭に居たのである。ノエミはジャンがこんなに嘆きながら、尙この事に氣が付いたのを驚いた。

「一生の願ひですから、弟に氣取られないやうにして頂戴ね。後生ですから。」

とジャンは云つた。

ノエミは決して他言はしないと約束した。ジャンは段々心を落着けて、纏てノエミに先立つて歩き出した。あゝ、獨居たい！自分の部屋で唯ひとり居たい！鋭い尖塔を以て空を指して居るノオトル・ダアムを見れば、勝誇つた無慈悲な敵を見る様に厭な氣持がする。過去三年間、自分は最早望を有つて居ないと思つたのは自分を欺いて居たのであつたと今あきらかに覺つた。既に死滅した筈のこの望が、今に猶如何に激しく苦しみ悶えて、依然自分の心を襲ひ來るかよ！否、いや、彼の人は僧になつたのではない。彼の人は違ふ！ピエロ戀しの情

が胸に溢れて、ジャンはノエミの腕を握り締めた。彼女を慰める聲は弱くなつた。將に消えむとして居る。多分彼の人かも知れない。多分萬事休したらしい。寂寥な夜と、愁ひ顔の月と、人氣の無い薄暗い町と、今し方吹き始めた氷のやうな風とは、ジャンの思に調和して居た。

ノオトル・ダアムの少し彼方で彼等はまた先刻の氣味の悪い男が道路の暗黒い側の壁に沿つて忍び足に來るのに遭つた。ノエミも早く歸りたく思つて足を早めた。カルリノは二人が「愛の湖」の彼岸に越える橋を渡らずに眞直に家の方へ行くのを見て、大聲で不服を唱へた。これは一體どうしたことだ？最後の幕はどうなる？もう忘れてしまつたのかと詰る。ノエミは口答をしさうな様子であつたが、ジャンは自分の秘密をカルリノに氣取られてはと氣遣つて、彼の云ふ儘になるやうにとノエミに乞うた。

「橋の上で一二分間停るんだ。」

とカルリノは云つた。

二人は欄干に凭れて動かぬ水の楕圓形の鏡を見詰めた。月は雲間に隠れて居た。纏てカルリノは語り出した。

「月がこんなに隠れて居るのは實に詭へ向きだ。けれども今あの雲の中に小さな窓が開いて、その真中に小さな星が一つ光つて、それが水に映つて呉れると、僕の未來の名譽を半分出して宜いんだが。この終の章は素張らしいものになるよ。先づかうなんだ。初めにロゼエルの棧橋から白鳥を見たらう。」

「白鳥は居やしませんでしたわ。」

「ノエミは口を出した。」

「居なかつたつて宜しい。で、月明で白鳥を見たんだね。」

「カルリノは構はずに話を續けた。」

「月明なんて水に映してやしなかつたわ。」

「ノエミが云ひ返した。」

「映さなかつたつて構やしないぢやないか。」

「カルリノは腹を立て、答へた。ノエミは、それならば何も今時分アルウヂユの町を彼方此方曳つ張り廻す必要はないぢやないかと云つた。カルリノはこの準備の研究、この殆んど寫眞の様に精密なノートは、恰も食卓へは出ないが臺所では役に立つ大森のやうなものだと

頗る詩的な比喩をして聽かせて、それから例の白鳥と月との事を話し續けた。

「貴女方は生きた貞潔と死んだ貞潔とを比べたでせう。老僧は娘に向つて、自分の魂の中にいま温な貞潔の曙光を認め始めたのは、自分の髪と同じ様に、追々近付いて来る死のために白く晒された自分の思想が多分貴女の生きた雪のやうな魂に照らされて居るからだらうといつたやうな實に美しい感想を述べる。それから彼は殆ど無意識に「アビシャグ」と呟く。貴女方は僕の最初の戀人のアビシャグといふ女を知らないだらう。この娘も貴女方と同じ様に老僧が誰の事を云つたのだから解らないから、「アビシャグとは誰の事です。」と聞くんだね。老僧は返事をせずに娘と一緒に「レイヌ町を通つて向へ行く。娘はまたアビシャグとは誰だ」と問ふけれども彼は矢張黙つて答へない。其時に、出たり隠れたり、お仕舞には二十四の鐘の聲を聽いて消えるあの恐しい黒い影が顯れる。」

「それは違つてやしなかつて？」

「ノエミは呟いた。カルリノはすんでの事に、「馬鹿だな！」と叫ぶ處であつた。彼はまた話を續けた。」

「老僧はその黒い影を、深い靈の周圍を彷徨つて、隙さへあれば自分よりもつと悪い他

の魔と一緒にその中へ這入つて住まうとする悪魔に譬へる。此處の處の連絡は貴女方には解らないだらうが、ちやんと連絡があるんだ。それから——また此處の連絡をどういふ風につけるかはまだ考へて居ないから、いづれ何とかする積だが——二人は愛を談じる。先刻大四辻を通つたね。今夜は彼處で音楽をやつて居なかつたが、例ならやつて居る。で、何處でも同じ事だが、假に彼處で大勢の男や女が互に秋波を送り合つて居たとする。彼處の古い塔と老僧とはこの光景を大目に見たが、娘はこんな状態の愛は馬鹿馬鹿しいと思つて、それを嘲る。老僧はあれはこの世の愛だと云ふ。丁度その時にオテル・ド・フランドルで結婚式の舞踏の音楽が聞える。」

「え？ 本當に結婚式の舞踏があつて？」

とノエミが問うた。

カルリノは痾癢を起して息を喘ませながら、肩を聳かして拳を固めた。それから深い嘆息を漏してまた話を續けた。

「娘は『併し天の愛といふものがありますか。』と尋ねる。丁度其時に僕が貴女方にサン・ソワールサン・ソワールの樹の下で停れと云つたけれども、貴女方は停らずに大四辻の端の處で停つた

のだ。どちらでも別に構はない。大寺院が見える處だつたから、それだけでいい。そこで老僧は『天の愛といふものがある。』と答へる。古い大寺院と夜と沈黙との威嚴が彼にインスピレイションインスピレーションを興へて、彼は熱心に話し始める。彼がどういふ言葉で話すかは、未だ僕の考へが纏らないから、今こゝで一寸云ふことは出来ないが、兎に角その主旨はかうなんだ。天の愛でも矢張この地上で生れるのであるが、地上では決して圓滿の域に達しないといふんだ。老僧は殆ど自分の愛を告白しやうとする。彼は張り裂けるばかりに鼓動する心臓と煩の様な熱烈な言葉を以て己が所信を告白する。自分は個人に對して心を傾けた事はない。實際自分自分で耻しく思ふ様な愛情を感じた事はない。けれども自分は誰か肉體を離れた女性の靈と自分自分とを合體させたいといふ智的、道徳的の渴仰を有つて居る。その女性の靈は肉體を離れた自分の實在に全く屬すべきもので、またそれと同時に二者の間に愛が介在することが出来る様に相互の間に適當な距離を保つて居なくてはならないと。」

「まあ大變なこと！」

とノエミは呟いた。カルリノは興奮して居るから、ノエミの聲が耳に入らなかつた。

「老僧はこの合體の中に神の三位一體に等しい人の三位一體を認めて居るらしい。だから

彼は人間がこの合體を渴望するのは正しい神聖な事だと思つて居る。到頭彼は餘り感激したので、疲れて口を噤む。娘は彼の手をとつて、二人はノオトル・ダムの方へ歩いて行く。此時に悪魔が現れる。誘惑の悪魔が現れるんだ。貴女方も先刻その悪魔を見たらう。どうだ？中々うまく考へたらう。材料の配列が中々うまく出来てるだらう。其處で二人は悪魔を見て逃げる。けれども空が曇るに連れて二人の心も曇つて来る。此處で雲の中に小さな窓が開いて、その真中に小さな星が一つ光つて欲しいんだ。二人が無言でその星が「愛の湖」に映つて揺ぐのをちつと見て居るうちに、二人の心の微妙な働がこの一つの思想の頂點に到達する——多分、この地球を包む雲の彼方のあの遠い世界で！」

ジアンは先程から欄干に凭れて暗い水面を見つめながら、一言も云はず、また弟の話を聽いて居る様子も無かつたが、此時情に激した様に體を起して叫んだ。

「けれどもカルリノさんは屹度そんな事を信じてやしないでせう。そんな事は迷信だ、空想だといふ事を知つて居るぢやありませんか。お前さんは妾にそんな事を信じさせたくないでせう。若し妾がそんな事を信じたらお前さんは真先に妾を追ひ出すでせう。」

「そんな事はない。」

とカルリノは反對した。

「いいえ、さうです！それに何か文學上の美しいものを書くためだと云つてお前さんまでがそんな夢の様な考を養成しやうと思つてなさる。左様いふ考が現に大變人間の氣力を弱めてるぢやありませんか。そのお蔭で人々が人世の現實から遠ざかつて夢ばかり見てるぢやありませんか。妾はそんな事は大嫌です。お前さんのやうな無信仰の人までが！お前さんも妾と同じ確信を持つてるぢやありませんか。人間は石鹼玉のやうなもので、暫時の間光るかと思つて直消えて、無には歸らずに萬物の中に歸るものだ——」

カルリノは度膽を抜かれて、

「僕が確信を持つてるつて！僕は何も確信して居るものはない。僕は懷疑者だ。それが僕の主義だ。姉さんも知つてるぢやないか。若し誰か本當の宗教は阿弗利加のカファ一人か亞米利加の土人の宗教だと云つたら、僕は「それはさうかも知れない。」と答へるだらう。そんな野蠻人の宗教はどんなものか僕は知らない。けれども僕には僕の知つて居る宗教の虚偽が判つて居る。だから僕は貴女に熱心なカトリック信者になつて貰ひたくない。また貴女を追ひ出すなんて——」

「追ひ出されない中に追込んで出る方がいゝつて云ふんでせう？」
 と云つてジアンはノエミの腕を執つた。カルリノは二人に「愛の湖」を周つて行く事を求めた。空に例の小さな窓が開くかも知れないではないか、開いて呉れるといゝがと彼は云ふ。ノエミは数時間前の話を思ひ出して、窓が開いてもその中に見える星がフォーモーロー星ではないかも知れないと云ふ。

「あゝさうだつた。フォーモーロー星の事を忘れて居た。併し今フォーモーロー星が出なくつてもその時にはフォーモーロー星が出るだらう。」

とカルリノは考へながら答へた。するとノエミはまた其他の困難を認めてそれをカルリノの前に提出した。若し窓の中に大なのも小なのも一つも星が見えなかつたらどうする？、カルリノは直様その困難の救済策を見出した。窓の中には屹度星が出るだらう。その星は小さくつて無窮の空に紛れて目につかないかも知れないが、兎も角窓の中に在るに違ひない、娘は見えないが、遠視の老僧には見える。纏て娘もまた信仰によつて之を認める。

ジアンは悲しさに、

「それで到頭その娘は眼の瞼んだ年寄の坊さんの信仰を頼にして、星のない處に星が見え

るやうに思つて、自分の常識も、若い時代も、生命も、何もかも失くして仕舞ふんだわ。可哀相に！多分お前さんはお仕舞に娘を尼院に葬るのでせう？」

ジアンはカルリノの返事を待たずにノエミと一緒に歩き出した。

彼等は纏て「愛の湖」を一周した。そして二人の女は今一つの橋の上に暫時佇んだ。例の雲の中の小さな窓は一向開かなかつた。遠方に見えるハルの大な塔、ノオトル・ダアムの巨大な鐘樓池の近くの低い塔、尼院の尖つた屋根等が乳白の雲に黒い輪廓を書いて立つた様は、尊い老人の集會のやうに見えた。カルリノは他に仕方も無い儘に、例の窓の最も適當な位置に就て大な聲で談議を始めた。

「今日は何曜でしたつけ？」

とジアンは聲を潜めてノエミに問うた。

「土曜日よ。」

「明日弟に話して、月曜と火曜とに色々用事を片付けて、水曜に荷造りをして、木曜に發ちませうよ。貴女は姉さんに手紙を遣つて、來々週スピアコに着きますと云つて置いて下

れませう。」

「そんなに急に定めないで、よくお考へなさいよ。」
 「もう定めました。如何しても本當の事を確めなければならぬ。若し彼の人に違ひなければ妾はあの人の邪魔にならないやうにする積です。けれども、兎に角一度會ひたい。」

「明日、ま一度相談させよう。ね、ジャンさん。まだ定めずにお置きなさいね。」

「妾はよく考へた末にさう決めました。」

真夜中の鐘がハルの大きな塔から鳴り渡つた。高く雲井で多くの鐘の長い嚴かな悲しい歌が響いた。ノエミは自分の思ふ通りに友を説きつける積であつたが、今は失望に心を満たされて黙して居た。彼女の耳には、暗黒くなり行く空から聞ゆるこの悲しい聲が、友の運命——負ひ果さるべき戀と苦惱との運命——を宣言して居る様に聴き做された。

第二章 ドン・クレメンテ

チヨヴァニ・セルヴァの書齋と書籍や書類を置いてある小さな卓の上は薄暗くなつた。チヨヴァニは立つて西側の窓を開けた。スピアコの町の背後の地平線は、カンテラノ城とメツツオ城からサン・ステファアノ城に亘るサピナの丘陵の斜線に沿うて、真紅に染まつて居た。カルテイナレ城を頂點として大小様々の家屋の尖つた集合より成つて居るスピアコの町は、黄昏の影に蔽はれて居た。街道が麓に沿うて紆つて居る圓い畦の頂の、緑色の窓扉のある小さな赤い別荘の蔭に叢生る橄欖樹の枝一本も動かねば、別荘の傍に立つて、古い小さなサンタ・マリア・テラ・フェアレの禮拜堂に覆ひ被つて居る樫の大木の枝一本も動かなかつた。草の香と近頃降つた雨の香とを孕むた爽やかな空氣が、カルヴォ山から下りて來た。時は七時を十五分過ぎて居た。アニオ川に潤はされるこの貝殻形の平野には、晩鐘が鳴つて居た。始にサンタンドレアの大きな鐘が、次にサンタ・マリア・テラ・ヴァレの鼻聲の様な鐘が、それから高く右手の大きな森の近くに在る小さな白い會堂のカワプチノの鐘や、其他彼處此處の遠い鐘の聲が聞えた。其時大人しい美しい女の聲、殆ど怖々した調子で、佛蘭西語で話す二十五歳

の聲が、チヨヴァニの背後の、半ば開いた扉の蔭から聞えた。

「這入りましても宜しう御座いますか？」

チヨヴァニは笑を含んで半ば身を廻した。そして腕を伸してその若い女を抱いて、無言の儘に自分の脇に引き寄せた。女は夫の魂が消え行く光と神秘的な鐘の歌とを追うて居る事を感じて、今口を開いてはならぬと思つた。彼女は夫の肩に頭を靠せて、霎時恭敬の念に打たれて黙して居たが、纏て低い聲で問うた。

「お祈を致しませうか？」

彼女を抱いて居る腕を締めたのが返事であつた。妻の唇も夫の唇も動かなかつた。唯無限の高御座を望むで凝視める二人の眼が擴がつて、言葉に現し難い思想や、無常の未來や、神に到る道に在る暗い門などの影を反映する畏敬と悲との色を宿した。鐘の音は静まつた。妻は青い眼で夫の熱心な眼を見詰めながら、唇を夫の唇に近付けた。男の雪を戴いた頭と女の美しい顔とは相接して、永い接吻を交した。若し世の人がこの様を見たならば、怪訝の念に堪へなかつたであらう。マリア・ダルセルは二十一歳の時に、宗教哲學に關するチヨヴァニ・セルヴァの著書の佛蘭西譯を讀んで、彼を戀慕した。彼女は未知の著者に書を寄せ

て、頗る熱誠の籠つた言葉を以て敬慕の情を表したので、セルヴァは返書の中にそれとなく自分の五十六歳といふ年齢と白髪とに言及した。女は再び手紙を寄せて、前記の二つの事は承知して居る。自分は愛を興へやうとも云はなければ、求めもしない。唯だ折々消息を頂戴したい、と答へた。彼女の書翰の中には聰明な智慧が光を放つて居た。之等の手紙を受け取つた頃、チヨヴァニは暗黒な危機に際會して、慘憺な苦闘をして居た。その有様を茲に書く必要はないが、彼はこのマリア・ダルセルといふ女が自分の救の星となるかも知れぬと思つて、再び彼女に書を送つた。

「今日は何の記念日か御存知で御座いますか？ 貴方は覚えていらつしやいますか？」

とマリアが問うた。

チヨヴァニは覺えて居た。今日は二人の初對面の記念日である。二人は未だ寫眞に依つて知り合つて居たのみに過ぎなかつたけれども、書信を交換して居る中に、互の魂の奥底を、誠心より出づる形容し難い熱情を以て明し合つた。四五回文通をしてから、チヨヴァニは未見の友に寫眞を呉れよと云つた。この依頼は女の豫期し又恐れて居た所であつた。彼女は直に返して貰ふ條件で寫眞を送つたが、それがチヨヴァニの優しい言葉に伴はれて再び自分の

手に戻つて来るまでは大層心配をした。チヨヴァニは女の賢さうな、熱情に富んだ、若々しい顔と、その美しい大きな眼と、釣合の良い姿とに心を奪はれた。それから二人が瑞西のルチエルの近くのヘルギスヴギルで會合する約束をして、男はコモ湖から、女はアルセルから、出發する際の、二人の心配といふものは一通ではなかつた。女は思つた。

「寫眞はあの方の氣に入つたけれども、本當の人間の態度、顔の線一つ、着物の色、面會の仕方、最初の一言、聲の調子、どれかあの方の愛情を一撃に壊して仕舞ふかも知れない。」男は考へた。

「あの女は『時』の爲めに荒らされた私の顔や私の白髪を知つて居る。そして寫眞ではそれを愛して居るけれども、私は一日と年が寄つて行くのだから、あの女が私を面り見たならば、多分この嘘のやうな愛情は一撃に殺されて仕舞ふだらう。」

彼は船で女よりも數時間早くヘルギスヴギルに着いた。女は朝パーゼルを發つて、アルセルニツヒバーンを経由して午後目的地へ着いた。女は朝パーゼルを發つて、アルセル

「停車場に着きました時には妾はふる／＼慄へて居たので御座いますよ。そして貴方が其邊にいらつしやらなかつたものですから、一時はほつと胸を撫で下しましたけれども、直に

また心配で堪らなくなりました。」

とマリアが云つた。

「お前は今日までちつともそんな事を云はなかつたね。」

とチヨヴァニは微笑みながら云つた。

若い妻は彼を見上げて同じくにつこりとした。

「貴方だつてあの時の事は詳細にお話しなすつた事は御座いませんでせう。」

チヨヴァニは妻の肩に手を掛けて、耳に口を寄せて囁いた。

「それは本當だ。」

マリアはびくりとした。そして自分の吃驚した事を可笑しく思つて笑つた。チヨヴァニも聲を揃へて笑つた。

「何で御座います？何で御座います？」

とマリアは顔を赤くして、心平でないけれども、尙笑ひながら叫んだ。夫は容易ならぬ秘密を明かす様な口調で、再び囁いた。

「あの時お前の帽子が歪むで居たよ！」

「あら、嘘で御座いますよ！そんな事があるのですか！」

とマリアは打消した。そして可笑しくて笑ひながらも、自分が不知不識の中にこんな非常な危険に遭遇したのかと思つて、胸を躍らした。本當に自分の帽子が歪むで居た筈がない。ヘルギスヴルに着くまでに幾度も幾度も化粧函の鏡を覗いたのだもの。

二人は二年以前のあの時の事を悉く想ひ起して笑壺に入つた。そして話しながら幾度も、妻は夫の胸に接吻し、夫は妻の髪に接吻した。あの時、停車場の中には遊覧客が澤山居つたので、チヨヴァニは其處から一二間離れて、旅館へ行く道に立つてマリアを待ち受けた。臙で丈の高い瘦形の女が、豫て打合はせてあつた目印の木犀の小枝を胸に挿して來るのが見えた。彼は帽子を脱いで近寄つた。そして二人は黙つて握手をした。彼は女の旅行鞆を持つて隨いて來る荷持夫に先へ行くと手真似で命じた。その後から徐々と歩いて行く中に、二人の咽喉は名狀し難い一種の感情の爲めに緊縮した。其中に女の方が先づ口を開いて、上品な美しい聲で「我が友」と云つた。

それからチヨヴァニは低い聲で、言葉も断れぬに、自分の熱心、愛情、歡喜に就いて語つた。二人は何時の間にも旅館の前を通り過ぎたのか少しも氣が附かなかつた。荷持夫は背後

から二度も「旦那！奥さん！此處で御座います！」と叫んだけれども、二人ともそれが聞えなかつた。それから女は微笑みながら自分の部屋へ這入つたが、顔は疲労の爲めに蒼白くなつて、頭は岑々と痛んで居た。チヨヴァニは再び外へ出て、ヘルギスヴルの平坦な花園や果樹畑の中を逍遙したが、過激な感動の爲めに疲労した人の様に喘ぎながら、この外國の緑濃な一地境に在る、石といふ石、葉といふ葉、この土地の懐に眠つて居る湖、千古變らぬ山々などを悉く祝福して、この様に老年に及んでこの様な愛を自分に送つた神を讚美した。そして暫時して宿へ歸つたが、歸り様が早過ぎた。その五月の日に同じ旅館に泊り合はせた獨逸人の老教授とその娘とはピラーツス山へ見物に出掛けたので、小な讀書室には他に誰も居なかつた。この讀書室でマリアとチヨヴァニとは互の手を繋ぎ合はせた儘、誰か這入つて來はせぬかと心配して何度も胸を躍らせながら、二時間といふ楽しい時を低い聲で語り過ぎた。

「あの部屋には、私共が腰を掛けて居ました長椅子の側に暖爐がありましたのを、貴方は覚えていらつしやいますか？」

とマリアが云つた。

「うむ、覺えて居るよ。」

「あの時は五月でしたのに大變寒う御座いましたでせう。そして給仕が暖爐に火を焚きに參りましたでせう。」

「さうだつたね。それから私がお前を泣かしたのはあの時だつたね。」

「あの時に仰有つた通りを唯今もう一度云つて御覽なさいませ。」

「そりや出来ない！」

チヨヴァニは妻の白い額を聖いものに觸るやうに恭しく接吻した。給仕がヘルギスヴ非ルの旅館のあの小なサロンの暖爐に火を焚きに這入つて來た時に、チヨヴァニは愛する者の手を放して、給仕が未だ室を出て行かぬ中に、云つた。

「古い薪は屹度終まで消えずに燃えますけれども、若い焔は果して何時まで燃えるでせう？」

マリヤは答へずに、眼を睜つてチヨヴァニの顔を眺めた。温室の玻璃が外部から霜に觸られて曇るやうに、彼女の眼はこの不當な疑惑に觸られて曇つた。

眞實チヨヴァニは二度とその様な考を抱かなかつた。神が二人の死後の生涯を如何に處

置し給ふとも、二人の靈魂は神の聖旨を愛する愛の中に必ず合體するに違ひないといふ、嚴かにして楽しい眞面目な確信から生ずる平和に、斯程までに貫かれ、斯程までに充ち満ちたこの二人の結婚のやうな結婚は世の中に何處にもあるまいと、二人は始終語り合つて居た。けれども二人は、魂の祈願を全能者の前に捧げる事を怠らなかつた。今し方二人が深く冥想しながら共に捧げた祈願は、チヨヴァニが作つたもので、次の如くであつた。

「父よ、耶蘇がかの最後の夜に祈り給ひし如く、僕等をして永遠に汝の中に耶蘇と共に住ましめ給へ。」

二人は現在に在つても、最も狹義な、最も正確な意味に於いて、二個一體であつた。そして恰も緑の流が碧い流と混る時に、その合流の初期に於いては、碎けた浪の此處彼處に時として或は森林の色を、或は大空の色を閃かす事がある様に、二人の靈的合體の中にも彼等の二個なる事が認められた。チヨヴァニは神秘家で、自分の心の中に凡ての人間の愛情を神の愛と調和させた。彼の妻は新教からチヨヴァニを通じて合理的信仰を渴望する一種の舊教に來つたのであるが、彼女は夫の神秘的な魂に自分の力に出来る限り深く這入つた。けれども彼女の心の中にはチヨヴァニを愛する情が凡ての他の情を統御して居た。彼女は富んで居

たし、チヨヴァニも可也の財産を有つて居たけれども、彼等は慈善事業に多くの金を投ずる事が出来るやうに、誠に約やかに暮して居た。彼等は冬の中は羅馬に住み、四月から十一月まではスピアコの或る小な別荘の二階を借りて住んで、唯だ書物と通信費とだけには金を惜まずに遣つた。チヨヴァニは今基督教道徳の合理に關する著述に忙しく、妻は夫に代つて參考書を読んだり、抜萃をしたり、ノートを取つたりした。

「今年の夏には是非ヘルギスヴルへ参り度う御座います。貴方はあの本の終の「潔白」の章を彼處でお書きなさいましたら宜しう御座います。」

とマリアが云つた。そしてあの小な入江に臨んだ林檎の樹の中に眠つて居る小な村、靜な湖、神々しい大きな山々、平穩な思索と仕事とに暮す穩な日などを心に描いて、嬉しさうに双手を握り合はした。彼女は夫の著書の全體の結構、各章の題目、主要な議論などを知つて居たのである。

潔白を論ずる章は合理的傾向を有つて居たから、特にマリアの好む所であつた。その章に於いてチヨヴァニは次の問題を提供して、それを解決しやうと企てた。即ち「何故に基督教は、人を完全ならしむる一要素として、人をして激烈なる煩悶に陥らしめ、而も何人にも些

の利益を與へず、人世に住むに堪へざるものとなす所の、かの禁慾てふものを賞讃する乎。」著者はこの道徳的現象の歴史的起原及び發達の状況を研究して、それより推論してこの問題の解決を試みやうとする。この書の始の二章に上記の研究の結果が載せられてある。セルヴァは、獸類がその仔又は友の爲めに己を犠牲に供する事、また時としては一夫一婦主義を嚴守する事が出来る事を例證として、下等動物性の中には、肉慾的本能が減少するに連れて道徳的本能が發顯し發達するものであると論じた。彼は又、人間の良心は斯くの如くにして下等種屬の中に在つて進化しつゝあるといふ假説を主張した。茲に於いて彼は、一層高尚なる快樂を満足させる爲めに、肉慾的快樂を制壓する事は、その種屬が一層高い生活に向上せんと努力して居る事を意味するといふ決論に立歸つて、それを共通の原則と定めやうと考へた。次いで彼は、唯だ神を崇めるといふ他に何等の目的をも有たずして、理性と肉感的想像とのために大に刺戟さるゝ肉慾的本能に對抗せしむるに、更に一層強き禁慾的本能を以てする所の、例外の人物の場合を攻究して、多くの宗教は斯くの如き實例を供給し、禁慾を稱揚して居るけれども、この禁慾は常にそれを行ふ人物の自然の行爲でなければならぬと論じやうと思つた。彼は、この禁慾といふものが、若し宇宙の或る法則に従つて永久に肉慾的本

能に對抗して止まぬ所の自然の不可思議な授動力——所謂靈的要素と稱するもの——と一致しなければ、それは全然非難すべき愚かな行爲であるといふ事を認めて居た。不知不識の間に、宇宙を統御する神の同業者となつたこの最大の禁慾を行つて居る英雄は、唯だ彼等の犠牲によつてのみ神を崇めて居るのだと思つて居るが、其實、彼等は神の計畫に従つて、彼等自身の靈的要素を強からしめるどころの人類の進歩的精力を彼等の身に體し、それに依つて一層神に似寄つた高い肉體を人類の爲めに創造するの能力を得るのである。斯くの如き理由によつて彼等の潔白は人間を完全ならしめるものであり、吾人の人性の高陞の極頂であり、又未だ吾人の知らざる超人間的性の朦朧とした起原に接觸するのである。

「私は潔白の化身といふ事を思ふと、何時もドン・クレメンテ師の姿が目前に浮ぶのだよ。あの人が今夜の集會に来る事を私はお前に話したかね？ 夕飯を済ませて直に來ると云つてた。」

とチヨヴァニが云つた。

マリアはびくりとして云つた。

「あゝ！ 妾は妹から手紙が來た事を貴方に申し上げるのをすんでのことに忘れる所でした。」

た。ノエミは昨日テサレさんと一緒にミラノを發つて、羅馬に一日二日逗留して、それから此處へ來る筈なのださうで御座いますよ。」

「私がドン・クレメンテさんの事を云つたから思ひ出したのだらう。」

とチヨヴァニは微笑みながら云つた。

「左様で御座います。けれども妾はあの事は信じは致しませんよ。」

ドン・クレメンテの秀でた額や、穩な澄み切つた碧い眼が情慾を経験したとは如何しても信じられぬ。この若いベネディクト僧の優しい、大人しい、殆ど物に怖ぢた様な聲の中に、情慾を知るには餘りになよやかな美しい貞操と、餘りに處女的な潔白とが潜むで居る様に、マリアには思はれた。

「お前はあの事を信じないが、結局お前の云ふ通りに、あの人がマイロニではないかも知れぬ。けれども、何とかして今晚あの人に、テサレさんが來るといふ事と、來たら無論修道院へ見物に行くだらうといふ事を話して置いた方がよからうと思ふがね、殊にあの人は見物人を接待する係だから、テサレさんを案内しなければならぬ。」

これは疑を挿む餘地のない事である。マリアは自分が彼に注意を與へやうと云つた。マ

リアはドン・クレメンテがジアンンの恋人だつたと信じて居ないのだから、チヨヴァニが話すよりも一層容易に、何気なくジアンンの事をドン・クレメンテに話す事が出来やう。併し、若し彼が本當にマイロニであつて、修道院の前で唐突に二人が出會つたら如何だらう！併し彼は今晚屹度集會に出て来るだらうか？それは屹度来るに違ひない。チヨヴァニが修道院に居る中にドン・クレメンテは院長の許可を受けて、直に其由をチヨヴァニに話した位であるから、間違はない。それから此間一寸話のあつた、修道院の野菜畑の仕事の手傳をして居る男を連れて来て、夫婦に紹介する筈である。一度紹介をして置けば、其次からその男は獨り来て、チヨヴァニが自耕す積で借りて置いた、別荘の背後の小さな地面の中に馬鈴薯の畝を如何して作るかを教へて呉れる事が出来る。チヨヴァニは近頃道樂に労働を始めて大分面白味が出たのであるが。マリアは労働などは夫の習慣にも年齢にも似合はしくないと思つて賛成しなかつた。併し、彼女は夫の出来心に敬意を表して敢て異議を挿まなかつた。此時アフレ生れの下女が這入つて来て、お客様が二階へ上つて来られます、又夕飯は纏て支度が出来ますと云つた。

果して三人の男がこの小さな別荘の狭い回り段階子を昇つて来た。チヨヴァニは出迎へに降りて行つた。真先に彼の友人のレイニといふ青年が彼に挨拶をして、同伴の二人の僧侶を差し置いて先に立つた事を詫言した。

「今晚は私が式部官です。」

と云つて、階段の途中で二人をチヨヴァニに紹介した。

「この方はゼチヴァアのアベ・マリニエ師です。此方の方のお名前は貴方も既に御承知です、ヴァレセのドン・パオロ・ファレ師です。」

チヨヴァニは少し當惑したが、何気なく先に立つて、客を露臺へ案内した。其處には既に椅子が數脚並べてあつた。

「ティン君は？それからミヌツチ教授とサルヴァテイ師とは？」

とチヨヴァニはレイニの腕を執つて心配さうに問うた。青年はにつこりとして答へた。

「皆もう来て居るんですが、今アニエ子に居ます。その譯を申さなけりや解りませんが、随分長い話です。纏て皆此處へ来るでせうよ。」

二人が話して居る中に露臺へ出たアベ・マリニエは、此時感嘆の聲を洩した。

「やあ、これは立派だー」

常に故郷のコモを愛して變らなかつたドン・パオロ・ファレは「美しい！實に美しい！」と呟いたが、「けれども一度私の故郷の景色を見せ度いな！」と附け足し度いやうな風であつた。

聽てマリアが挨拶に出て來たので、紹介が繰り返された。レイニが話をして居る間、マリニエは小さな眼を光らせて、明い西の空を背景として芝居の書割の様子に黒く際立つて居るピラミッド形のスピアコから、手近に茂つて東を遮つて居る四手樹に至る風景を眺めて居た。

ドン・ファレは自分の信仰を高め、變化せしめた舊新約聖書に關する評論、殊に未來のカトリック教神學の基礎を論じた書の著者セルヴァをしげ／＼見て居た。レイニ男爵は話を續けた。テイン教授はマンテラの停車場で大層風が吹いたから風を引きはしなかつたかと大心配をしたが、セルヴァの様なアルコール嫌ひの家にコニヤック酒はあるまいし、其上に毎日定つて卵を二顆食ふ時間が來たと云つて、アニエ子旅館へ這入つた。料理屋の川添の露臺は風通しが良過ぎるし、その附近の小間は風通しが悪過ぎるといふので、彼は旅館の一室で夕飯を出せよと命じて、それから卵を二度も取り替へさせた。他の人々はミヌツチ教授とサルヴァテイ師とにテインを預けて置いて、先に來たのである。

病身で直感胃に罹るテイン教授が居ないから、セルヴァは露臺で食事をしやうと云つたけれども、アベ・マリニエの喜ばない色を見て取つて、直にその考を棄てた。この邊幅を飾る世俗的なゼ子ヴァの僧は、その友のテインに劣らず、身體を大切にしたが、而も彼はテインの様に公然とそれをせず、また病身を唱ふる理由をも有たなかつた。彼がテインと共にアニエ子で食事をしなかつた譯は、以前スピアコへ來た時に、あの旅館の料理が餘り淡泊で自分の口に合はなかつたので、今夕はセルヴァ夫人の佛蘭西料理の饗應に與かる望を抱いて居たからである。レイニ男爵はこんな望の誠に儂い事をよく知つて居たけれども、面白半分に態ど黙つて居たのである。食堂が狭いので五人は這入り切れぬ程であつた。他の二人が來なかつたのは好都合であつた。實はアベ・マリニエもドン・ファレも全く不意に來たのである。來る筈の他の人々が來なかつたから丁度好かつた。この他に伊太利北部の有名な二人の僧侶が今晚列席する筈であつたが、二人とも書面で斷つて來たので、セルヴァもファレもレイニも大に残念に思つた。マリニエは招待を受けずに來た事を詫びて、ドン・パオロ・ファレの來會に就いてはレイニが責を負ふのであるが、自分が來た事はテインの責任であると云つた。セルヴァはその言葉を打ち消して、自分の友人の友人の來る事は無論何時も歓迎する

所である。レイニもテインも、彼等が信頼し、彼等と説を同じうする人は、誰でも連れて来てよいといふ事を知つて居ると答へた。マリアはアベ・マリニエが餘り氣に入らなかつたから黙つて居た。そしてレイニやテインが、豫めチヨヴァニに通知をせずに、見ず知らずの人々を連れて來たりなどしなければよいのにと思つた。マリニエは自分の前の蠶豆のスープを熟視してから、少し眉を擡めて云つた。

「今晚の集に御相談なさる事柄を今茲で話しましたならば、奥様は御退屈で御迷惑で御座いませうね。」

マリアは、今夜の集會の目的には大層興味を有つて居りますが、集會には列しませんから、自分に御遠慮なくお話し下さい、と答へた。其處でマリニエは言葉を續けた。

「左様で御座いますか。では少し伺ひますが、一體皆様の御目的が如何いふものであるか、もつと委しく承つて置いた方が、私に取つては大に利益であらうと思ひます。尤もテイン君から一寸聞きはしましたが、餘り要領を得ませんので、私が全然皆様と意見を同じうして居ますかどうか、確に判りませんので御座ります。」

ドン・パオロは焦躁し相に身を動かした。セルヴァも少し當惑した様子であつた。如何し

ても根本的の主義に就いては、來會者の意見が一致しなければならぬ。この一致がなくなれば、今夕の會議は無益よりも更に悪い結果を生ずるかも知れぬ。或は危険な結果をさへ生ずるかも知れぬのである。セルヴァは説明し始めた。

「成程。では一通り申し上げませう。この伊太利の中にも、また伊太利の外にも、私共と同じく教會の内に或る改革を見ることを希望するカトリック教徒が澤山あるので御座います。私共はこの改革を穩な方法によつて成就したい、正當な當局者の働によつて成就したいと思つて居ります。私共は宗教教育の上に、儀式の上に、また教役者の訓練の上に改革を見たいので御座います。否、更に進んで、教會政治の最高府の内にも改革を見たいのであります。是等の目的を達するためには、二十年先か、三十年先か、或は五十年も先かは判りませんが、當局者を動かして私共の意見に従つて行動するの必要を認めしむるに足るだけの有力な輿論の潮流を創造せねばなりません。所が私共斯ういふ意見を抱いて居る者等は随分遠方に散在して居まして、論文や著書を公にする人々の外は、互の意見を知らないの御座います。恐らくカトリック教界の、敬虔な、教育のある多數の人士は、私共と同じ考を有つて居るかも知れませんが、若し私共同志の者が、尠くとも互を知り合ふ事が出來たな

らば、私共の意見を擴める上に於いて最も強い助となる。私は信じます。それで今晚私共數人の者が集まつて、第一回の相談會を開く筈になつて居るので御座います。」

「チヨヴァニが話して居る間、他の人々はマリニエの顔を注視して居た。彼は自分の前の皿を熟と見詰めて居た。暫時は誰も口を開かなかつたが、チヨヴァニが先づ沈黙を破つて問うた。

「テイン教授はこの事を貴方に申されませんでしたか。」

「いや、承りました。テイン君は何かその様な事を私に申しました。」

「マリニエは漸く皿から眼を離して答へた。その調子は唯だ僅に半ば賛成を表するもの、様であつた。それならば彼は何のために此處へ來たのであらう？ドン・パオロは不興氣な顔をした。他の人々は黙つて居た。皆手持無沙汰に口を噤むた。遂にマリニエが云つた。

「この事は今晚また御相談致しませう。」

「左様、この事は今晚また御相談致しませう。」

「セルヴァは靜に答へた。彼はこの僧は自分等の敵であると感じた。そしてテインが彼を集會に連れて來た事は、判断を誤つた事であり、また策略としても拙であつたと思つた。併しまた、有るだけの反對説を聞いて置く事は利益でもあり、又テイン教授の友人であるから

は尠くとも信用するに足るに違ひないから、當分は秘して置く方がよいと思はれる來會者の姓名や議論を、他所で曝露したりなどはしまいと、心の中に思ひ返して己を慰めた。レイニはまた、マリニエが先年或る歴史的研究をする爲めに五年間も羅馬に住んで居た事があるの、羅馬の種々の階級に友人を澤山有つて居る事を知つて居たから、彼がこの集會の事を口外しはしまいかと大層心を痛め、また、今少し早く彼の來る事が判つたならば、豫めセルヴァに通知して、彼の機嫌を取るために先づ彼の口を悦ばせるのが上策であると忠告して置いたものをと、残念に思つた。セルヴァ家の食卓は何時も頗る清楚で、花を以て飾つてはあつたけれども、實に約やかで、食物の點から見れば大層簡單であつた。その上にセルヴァ夫婦は少しも酒を嗜まなかつた。縦しや今夕は特に酒を出した所で、色が悪くて酸いスピアコ地作りの葡萄酒などは、佛蘭西酒を飲み馴れたマリニエの様な男の心を唯だ酸くする許りである。この様な理由があるからレイニの心配も全く無理ではなかつたのである。

夕餐が終つて、アフネ生れの下女が珈琲を出した後に、サンタ・スコラステイカ修道院から徒歩で來たドン・クレメンテと、スピアコから二頭曳の馬車で來たテイン、ミヌツチ教授、サルヴァテイ師の一行とが、同時に着いた。先刻噂のあつた作男を連れて來たドン・ク

レメンテは、馬車が別荘の門に近寄るのを見て、其中にセルヴァの客が乗つて居ると思つたから、集會の始まるぬ中に作男をチヨヴァニに紹介して置かうと思つて足を早めた。

セルヴァ夫婦と三人の客は既に食事を終つた。マリヤはアベ・マリニエに手を引かれて露臺へ出たが、追々深くなり行く夕闇の中に、ドン・クレメンテが街道に向いた別荘の門の内勾配の急な小徑を辿つて登つて来るのを認めて、上から聲を掛けて、今燈火を持つて行くから階段の下で待つて居つて呉れよと云つた。彼女は洋燈片手に階段を降りて、僧の背後に立つて居た男の方を意味あり氣な眼で見ながら、少し話したい事があると手眞似で知らせた。ドン・クレメンテは後を顧みて、作男に庭のアカシヤ樹の下で待つて居れよと命じて置いて、マリヤが無言で招くが儘に二三段昇つて、マリヤの言葉に耳を傾けた。

マリヤは三人の來客の事、殊にアベ・マリニエの事を手短かに話して、更に言葉を繼いで云つた。チヨヴァニは常に懷抱して居るカトリック教徒の聯合を形づくろうといふ希望の正しい事を飽くまでも信じて居るが、今思ひも寄らぬ反對に遭遇せんとして居るので、夫の爲めに心配に堪へぬ。チヨヴァニは今客の側を離れる事が出来ぬ故、自分がドン・クレメンテにマリニエの事を豫め話して置いて用心をさせる爲めに降りて來た。自分は女でもあるしまた

何も解らぬから會議に出席せぬ積ゆる、今此處で訣別を告げて置く。多分數日の中に修道院で會ふかも知れぬ。ドン・クレメンテは見物人を案内する係ではないか？自分は三四日の中に妹と一緒にサンタ・スコラスティカへ行くかも知れぬ——。

此處まで話した時に、マリヤは相手の顔をじつと精密に觀察しやうと思つて我知らず洋燈を少し上げたが、直に自分のはしたない舉動を悔いた。誠に聖いドン・クレメンテの魂、男らしくて又處女的な、美しい、丈の高い、すらりとした姿、赤地で禮讓のある、殆ど軍人風と思はれる許りの姿勢を常に保つて居る眞直な首、女性的の優しさ、男性的の熱情を同時に宿して居る清しい碧い眼と廣い額とを有つて居る氣高い顔とに、確に調和して居る所の彼の魂を、尊敬する念が足らなかつたのを耻かしく思つたからである。

「妹の親しいお友達でテサレさんといふ方も一緒に行きなさらうと思ひます。」

とマリヤは耻かし相に低い聲で附け足した。ドン・クレメンテはびくりとして顔を背けた。マリヤはその反動を感じて體を震はした。それでは矢張この人であつたか？ドン・クレメンテは直に再びマリヤの方を向いた。彼の顔は少し赤くなつては居たが、落着いて居た。

「失禮で御座いますが、その方のお名前は何と仰有いますか？」

「誰の？ テサレさんので御座いますか？」

「はあ。」

「ジャンさんと仰有いますよ。」

「お幾歳位でいらつしやいますか？」

「さあ、幾歳位で御座いますか、多分三十から三十五の間で御座いませうね。」

「マリアは今何が如何した事やら全く解らなくなつた。ドン・クレメンテは實に平然として之等の質問をしたではないか！ 今度はマリアの方から怖々質問の矢を放つてみた。」

「あの、貴方はテサレさんを御存知なので御座いますか？」

ドン・クレメンテは答へなかつた。此時、痛風に罹つて居るティンが門からミヌッチ教授の腕に縋つて痛い足を引摺りながら、漸く入口まで昇つて来た。二人とも懇意な間柄であるから、セルヴァ夫人は彼等を懇に迎へたけれども、何となく心が餘所に在る様子であつた。

集會はチヨヴァニの小さな書齋で開かれた。この室は甚だ狭い上に、感冒に罹つて居るティンが困るであらうと思つて、窓が閉ぢてあつたので、暑がりのドン・ファレは呼吸が塞まり

相に思つたから、例のロムバルディ風に遠慮なくさう云つた。けれどもレイニとチヨヴァニとの他の人々は聞えない振をして居た。レイニは辛抱せよと手真似で示したが、チヨヴァニは立つて、廊下に面した扉と、廊下の向側の露臺に出る扉とを開けた。併しティンが直に濕つた森の香を嗅ぎ付けたので、再び扉を閉ぢねばならなかつた。机の上に古い石油洋燈が點してあつた。眼の悪いミヌッチ教授は、氣の毒相に、笠はないかと云つた。笠は纏て見出されて洋燈に掛けられた。ドン・パオロは小さな聲で「宛然病院の様だ！」と呟いた。レイニも又この様な多くの些細な事は、今宵の様な重要な場合には棄てらるべきものだと思つて、何となく熱心も冷め果てるやうに覺えて、不愉快に感じた。チヨヴァニも同じ様な感を抱いたが、彼のはまたレイニのとは反對の源から起つた感であつた。それは彼が列席の人々でティンやミヌッチを知らぬ者が、彼等二人に就いて屹度どんな印象を受けるかを知つて居たからである。彼自は二人をよく解して居た。ティンは既に六十二歳にもなり、始終感冒と弱い神經との爲めに悩むで居ましたが、深遠な學識を有つて居る上に、何物も服従させることのできる出來ぬ精神の氣力と鞏固な道德的勇氣とを有つて居た。アンドレア・ミヌッチはその手入をせぬ美しい髪や、無雜作に懸けた眼鏡や、起居の舉動に或る無骨な所があつて、何處となく

獨逸の學者の風があつたが、人生の猛火に鍛錬された、若々しい、頗る熱烈な魂を有つて居た。そして彼の魂は、自の焔に包まれて居たから、ドン・ファレの魂のやうに表面は輝いて居なかつたが、峻厳で、或はドン・ファレのよりも更に強かつたかも知れぬ。

チヨヴァニは打ち解けた様子で開會を告げた。彼は先づ列席の人々にその來會の勞を謝し、缺席した二人の僧侶に代つて説言を述べ、併せて、彼等の出席が出来ないことを遺憾に思ふが、併し缺席はしても彼等が同志の中である事は確な事實で、また彼等が同志の中にある事は重要な事であると主張した。それから彼は更に聲を高め、語調を緩めて、アベ・マリニエを注視しながら、自分はこの集會に就いても、會議の結果如何なる方法を取るに決したかも、當分は外に洩さぬ方が良策であると思ふから、列席の方々はその名譽に懸けて秘密を嚴守せられし事を望むと云つた。彼は尙言葉を續けて、先刻夕餐の際に話したよりも少し委しく、自分の胸に浮んだ考と今宵の集會の目的とを説明した。

「右様の次第で御座いますから、どうか各々御意見をお話し下さる事を望みます。」

チヨヴァニの言葉が終つてから、暫時は誰一人口を開く者もなく、室内は寂然として居た。聽てアベ・マリニエが何か云はうとした時に、ティンは力なく立ち上つた。上品で、智的な、

蒼白い、肉の落ちた彼の顔には、肅然とした色が浮んで居た。彼の伊太利語は外國人の口調を帯びて、儀式張つて居る様に聞えはしたけれども、其中には熱情が籠つて居た。

「今夕私共が心を一にして或る宗教運動を開始せんとするに當りまして、私共は先づ二つの事を爲なければならぬと信じます。その一つは、私共が私共の衷に神御自身の在す事を感じ、私共の心の中に神の望と神の榮光その物とを感ずるまで、私共銘々が黙して各自の魂を神に集中する事でありませう。私は今それを爲やうと思ひます。皆様も私と偕にそれを爲られし事を希望します。」

ティン教授は胸の上に兩腕を組んで、頭を垂れて、眼を閉じた。他の人々も立ち上つて、アベ・マリニエの他は皆双手を合はせた。マリニエは兩手を伸して、空を抱くやうな手附でそれを胸の上に組み合はせた。洋燈の静な吐きや、階下で人の歩く聲音が、明に聞えた。霎時してマリニエは竊に顔を上げて、他の人々が猶祈つて居るかを窺つた。聽てティンも頭を擡げた。

「アーメン。第二の事は、私共が凡ての事に於いて正當な教會の權威に服従しやうと志す事でありませう。」

「それは時と場合によります！」

とドン・パオロ・ファレが怒鳴つた。

不意に心に浮んだ思想の震動と、唇を漏れぬ言葉の響が一座の人々を動かした。けれども
テインが「正當な主義に依つて用ゐらるゝ時に」と附加した時に、その動搖は縮小して同意
を表する低聲となつて、間も無く止むた。テインは更に語を續けた。

「それから今一つの事があります。私共の言葉にも心の中にも他人に對する憎惡の念が
在つてはなりません。」

ドン・パオロは再び叫んだ。

「左様です！憎惡は悪い事でありませうが、併し憤といふものは必要であります！『主
怒を含みて環視し給へり！』」

「如何にも、私共が心の中に基督を迎へ奉つた時、私共が心の中に純然たる愛の憤
を感じる時には、貴方の仰の通りで御座いませう。」

とドン・クレメンテは美しい、優しい聲で云つた。彼の側に坐して居たドン・パオロは黙
つて、眼に涙を湛へて、彼の顔を眺めて居たが、不意に彼の手を掴むでそれを自分の唇に當

てた。ドン・クレメンテは吃驚して、顔を眞赤にして後込みした。

チヨヴァニは今一座の中に神秘的空氣が漲らんとして居る様に思つて歡びながら、感に堪
へぬ面持で云つた。

「併し私共が若しこの改革の計畫を愛によつて聖化しないならば、若し實行の曉に先づ
私共の手と道具とを聖化しないならば、私共は決して基督を心の中に迎へ奉るとは出来
ません。只今ドン・パオロ師の云はれました憤といふものは、實際は惡魔が私共を陥
れる爲めに掛ける所の強い係蹄であります。憤といふものは外觀か徳に似て居て、時とし
ては（譬へば聖徒達の憤は左様でありますが一實際に徳の實質を具へて居りますから、却て
強い係蹄となるのであります。私共は如何にして人を愛すべきかを知らませんから、私共の
憤は、先づ大概の場合に於いて、純然たる怨恨であります。私が主の祈に次いで最も愛す
る祈は、合一の祈であります。即ち『彼等も我儕に在りて一つにならん爲め』といふ祈であ
ります。基督が父の神に斯く祈り給ふ時に、私共は基督の御精神に因つて皆一つになるの
あります。私共は各信仰が異つて居るために離れ々々になつて居る兄弟等と、神に在つ
て一つになりたいと常に深く願ひ、又なれるものであると堅く信じて居ります。でありますか

ら、この團結を作るといふ私の提案を諸君が御賛成なさいますか、或は御異見が御座いますか、只今承りたいと存じます。始に先づその問題から御相談下さつて、若し御異議が無くば、進んで如何なる手段を取つて私共の目的を達すべきかを考究したいと思ひます。」

ドン・パオロは、その主義に就いて最早議論をする必要はない、と熱くなつて叫んだ。ミヌッチは大人しい口調で、この集會の目的は出席しない以前から皆が知つて居る事であるから、皆が出席したといふ事が既に賛成の標であり、また共同の事業を爲すために喜んで互の身を結び合はせる積である事は明である。故に今未決の問題は唯だ今後取るべき方針のみである、と云つた。其時アベ・マリニエは自分の所存を述べる許可を求めて、莞爾として云つた。

「大變残念な事で御座いますが、私は今夕私の體を皆様と一緒に結び付ける細い糸の一端をも持つて参りませんでした。私も亦教會の内に多くの弊害を認める一人で御座います。併しながら、セルヴァ氏が先刻晚餐の席上と此處とで、氏の御意見を巨細私に説明せられますのを承りました時に（尤も豫てテイン教授からも承つた事で御座いますが、其際には明白に解らない所が御座いましたのですが）二三私の首肯し兼ねる點を思ひ浮びました。」

その故障は重大なものであると私には思はれるので御座います。」

「左様だとも。若し立身出世が望なら我々と一緒に仕事は出来ないよ。」

と豫てマリニエは野心家だと聞いて居たミヌッチは心の中に思つたが、左あらの體で云つた。

「ではその御異論を拜聴させよう。」

「諸君、先づ第一に諸君は事の順序を顛倒して居られる様に思はれるので御座います。私は諸君に對して充分敬意を有つて居る積で御座いますけれども、今諸君の會合せられた有様を拜見しますと、幾人かの人々が集つて骨牌遊を致します時に、伊太利の骨牌を持つて居る者もあれば佛蘭西の骨牌を持つて居る者もあり、又獨逸の骨牌を持つて居る者があります。爲めに、遊戯をすることが出來ずに困つて居る光景を、心の中に畫くのであります。私共の意見が一致して居ると云はれた方もありませんが、それは寧ろ私共の消極的意見が一致して居るのかも知れません。近時我がカトリック教會が、元來は誠に質素で靈的であつたが十六、十七、十八世紀の間に餘計なものを盛に持ち込まれた或る古い寺に似て居るといふ事を信ずる事に於いて、私共は多分一致して居るでせう。又この寺の内では唯だ死語のみを高聲に話

して、活語は唯だ低聲に囁かねばならぬ。太陽の光すらこの寺の窓を通つて映し込む時に妙な色を帯びると、諸君の中の悪意を有つて居られる方々は多分云はれるで御座いませう。併しながら、私は如何なる救済策を如何程用ゐるかに就いて、私共の意見が一致して居るとは信じられません。故にこのカトリック教徒の秘密會を組織するに先立つて、先づこの改革に就いて御互の意志の疏通を計る方が思慮ある方法だと私は存じます。否、私は更に一步を進めて申しませう。假に諸君の間に完全なる意見の一致を見る事が出来ると致しましたも、矢張セルヴァ氏の御提案の如くに眼に見ゆる足枷を以て互の身を繋ぐ事は上策ではあるまいと信じます。私の認めまする故障は實に細心の注意を要する種類のもので御座います。無論諸君は抜目のない魚のやうに水面に顯れない様に泳いで居れば大丈夫であると思つて居られるでせう。けれどもそれはかの大漁夫——否、寧ろ副漁夫といふ方が適當でせう——その漁夫の炯眼は容易く諸君を發見して、手練の鉞で一突に諸君を刺し通す力のある事を、諸君が想はないからであります。私は最も美しい、最も美味な、最も好ましい魚に、互の身を繋ぎ合はせよとは決して申しませぬ。若し其中の一尾が捕へられて陸上上げられたならば、如何いふ結果を來たすかは、諸君の容易に了解せらるゝ事で御座いませう。加之、かのガリラヤ

湖の大漁夫は小さな魚を生洲の中に放ち給うたけれども、羅馬の大漁夫は魚を天麩羅にするといふ事を、諸君はよく御存知では御座いませんか。」

「巧い！」

とドン・パオロは哄笑して叫んだが、他の人々は固く沈黙を守つて居た。アべは尙語を續けた。

「且又私はこの團結によつて何等の善事も成就する事は出来まいと思ひます。會によつて俸給を上げ、又は商工業を振興することは、或は出来るかも知りませんが、會によつて科學と眞理とを助長する事は斷じて出来ません。尤も思想は人間よりも強く、常に前進しつつあるものでありますから、將來必ず改革を成就する日のある事は疑を容れませんが、若し思想に武装をさせて、隊伍を組ませて、進軍させたならば、彼等は必ず敵の猛烈な砲火を浴びて、將來永い間前進の機を得る事が出来ませぬ。科學と宗教は唯だ個人の方によつて、救主の方によつてのみ、進歩するものであります。諸君の中に聖者がありますか？ 聖者の居所を御存知で御座いますか？ 若し聖者が見付かるならば、その聖者を前進させれば宜しう御座いませう。熱烈な言葉と、博愛主義と、二三の小奇蹟と、之さへあればその救主獨で諸君

全體の事業よりも多くの事を成就する事が出来ませう。」

マリニエが話を終つた時に、チヨヴァニは立ち上がった。

「恐らくはマリニエ師は私共が希望する團結の價値を未だ充分に了解せられないのでせう。私共は今祈禱を共にして、神の前に心を一つにして立つ事を求めました。これによつて私共の團結の性質は充分明に示されて居ります。現今我が教會を悩ませて居る疾病は、大體に於いて、教會の中の變化し易き人的要素と永久不變の神の眞理の要素との軋轢の結果であります。私共は神がこの軋轢を除き給はん事を希ふ事に於いて、眞理の神に在つて一つにならうと願ひ、又私共が團結して居るといふ事を感じ度いと願つて居ります。私共の多くは種々の點に於いて意見を同じうして居りますが、私共の希ふ團結を形づくるためには、必ずしも或る問題に就いて皆が同一の意見を有つ必要はありません。私共は改革を成就するため、公私を論せず、聯合的運動を始める積では御座いません。私は老人で御座いますから我が國が塊太利の管轄の下にあつた時代を記憶して居ります。其頃ロムバルディやヴェネチアの志士が人々を集めて政治を論じたのは、必ずしも陰謀を廻らす爲め、又は革命的行動を議決するためのみでは決して御座いませんでした。その會合の目的は、互に報知を交換し、懇親

を結び、また思想の焔を消さない爲めでありました。之と同じ様な事を私共は宗教界に於いて爲したいのであります。マリニエ師は今消極的一致といふ事を仰有いましたが、その消極的一致があればそれで充分で御座いますから、御安心なさつて宜しからうと存じます。私共は漸々それを擴げて行つて、教育ある信者の大多數をその中に包含し、遂にはそれが法王の政廳にも及ぶやうに努力しなければなりません。丁度果物の肉が腐敗して行く中に生命の種子が成長する如くに、この消極的一致の中に積極的一致が不可思議な成熟を遂げるでせう。左様です、左様です、消極的一致があれば充分です。基督の教會が苦痛を嘗めて居る感ずる心が、母教會を愛する情に於いて私共を一つとならしめ、私共の心を動かして勤くもその爲めに祈らしめるには充分であります！私共と同様に母教會の苦痛を心に感ずる兄弟は、必ず私共と共に祈るでせう！マリニエ師、如何で御座います？」

マリニエは微に笑を含んで呟いた。

「誠に美しい御言葉で御座いますが、論理的ではないやうに思はれます。」

ドン・パオロは席を蹴つて立つた。

「論理なんぞに少しも關係はありません！」

マリニエは後悔した様な顔付をして答へた。

「むー、論理をお棄てなさるお積ならば——」

ドン・パオロは奮激して尙議論をしたさうであつたけれども、ティン教授は手を以て彼を制して、マリニエに向つて云つた。

「私共は論理を棄てる積はありませんが、併し感情や愛や信仰の問題の決論の論理的價値を測ることは、幾何學の問題の決論の論理的價値を測る様に容易ではありません。聰明なマリニエ君は、今セルヴァ氏に答辯せられた時に、若し我々の愛する者が病に罹つたならば、その人の側へ駆け付ける以前に、先づ如何なる治療法を採るべきかを決する必要があるといふ意味を以て、答へられたのではあるまいと私は思ひます。」

マリニエは語氣鋭く答へた。

「それは大層巧い比喻ですが、諸君は比喻と議論とは別物だといふ事を御存知で御座いませう！」

此時、廊下に面した扉と窓との間の一隅に立つて居たドン・クレメンテと、その傍に坐して居たミヌッチ教授とが、同時に何か云ひかけたが、互に機會を譲らうと思つて、双方とも

黙つて仕舞つたので、セルヴァはドン・クレメンテの方から先へ話しては如何と云つた。凡ての眼は天使の顔とも思はれる若僧の氣高い顔に集つた。彼の顔色は益々赤くなつたけれども、彼は伏目にならずに真直に正面を向いて居た。そして暫時踟躕つた後、常の通りの優しい、遠慮勝な聲で語り始めた。

「マリニエ師は先刻聖者の必要をお話しなさいましたが、實に御尤もな御説で、私も亦同感で御座います。私は聖者を尋ね出す事は全く絶望ではないと思ひます。多分何處かに聖者が居られるかも知れぬではありませんか？」

「自分の事だ。」

とドン・パオロは呟いた。ドン・クレメンテは語り續けた。

「扱て、マリニエ師に申し上げたいと存じますが、私共は或る意味に於いてこの聖者、この救主の豫言者で、彼の爲めに道の備をする者であります。彼の道備をするとは、唯だ、我々の宗教の眞理の本體では無く、その外部を包む衣服を凡て革新する必要のある事を指示するに過ぎないのであります。この革新は或は多數の人々の良心に苦痛を與へるかも知れませんが、萬物は歎きて産の苦惱をなす！私共はこの必要を指示する時に、絶対にカトリック主義

身の顯し給ふ所と信する者は、凡て活ける基督の中に在て一となりん事を願つて居ります。我々多くの國々より來る者凡て一となつて、我々の如何なる行動を取るべきかを定めん事を願つて居ります。カトリック教徒の秘密會？然り、これは洞墳の秘密會であります。マリニエ師、貴方は御心配ですか？貴方は多くの首が一撃の下に落ちると思つて居られますか？私はお尋ねしたい。如斯強大な劍は何處にありますか？一撃に一つ宛ならば、終には皆落すと出來るかも知れません。譬へば今日はテイン教授がやられる。明日はドン・ファレ師、その翌日は此處に居られるこの方がやられるといふ風に。併しながら、若し時節到來して、アベ・マリニエ師が想像せらるゝ如き銛の尖にかゝつて、有名な俗人や、僧侶や、監督や、或は最高監督までが一つ紐に繋がれて、ぞろ／＼上つて來たならば、如何なる漁夫も驚き恐て、銛も獲物も皆水中に投げ返さない者がありませんか？かつマリニエ師、この様な事を申せば甚だ失禮で御座いますが、私は貴方や、又貴方の様な用心深い人々の信仰は何處にあるか、承りたいのであります。貴方はペテロを恐れるがために基督に事へる事を躊躇なさるのですか？我々は一致協力して、昔基督を十字架に釘け、今日その教會を毒しつゝある狂信に當らうではありませんか。その酬として縱し我々が苦難を嘗めるとも、父の神に感謝を捧げま

せう。「我が爲めに人汝等を責め、詐りて各様の惡しき言を云はむ時、汝等は福なる哉。」
ドン・パオロ・ファレは立ち上つて、この演説家を抱いた。レイニは熱心に燃ゆる眼を以てミヌツチを注視した。併しながらテイン、セルヴァ、ドン・クレメンテ、サルヴァテイの四人一殊に其中の三人の教役者一は、ミヌツチが餘り云ひ過ぎた事、信仰の廣さ深さに就いて又ペテロを恐れる事に就いての言葉は熟考を経た言葉でない事、彼の議論全體の調子が餘りに攻撃的で、テインの神秘的勸話と、セルヴァが自分の提案した團結の性質を説明する際に用いた言葉とに調和して居ない事を感じて、當惑の餘り黙して居た。マリニエは又ミヌツチが話して居る間、小な光つた眼をその顔から離さなかつたが、今ドン・パオロがミヌツチを抱く様を見て、侮蔑と憐憫と相半した色を顔に浮べた。そしてやをら身を起して云つた。
「成程。併しテイン君もこれと同じ意見を有つて居られるでせうか？私はそんな事はあるまいと思ひます。唯今お話しになつた方はペテロ云々と云はれましたが、實際、今晚御集りの諸君は、多分浪の上を歩く事が出來やうと思つて、ペテロの舟から出やうとして居られるやうに思はれます。私は包まず申し上げますが、私の信仰はそれ程堅くありません。水の上へ出れば私は直に沈んで仕舞ふでせう。此方が云はれました通り私は大層臆病で御座いま

すから、舟の中に留つて、高々私の信仰相應に小さな襪を使ふ積で御座います。ですから如何しても私は諸君とお別れ申さねばなりません。何卒私がお邪魔致しました事は幾重にもお宥し下さい。私は消化を助ける爲めに少し散歩しなければなりません。ではデイン君、アニエ子で待つて居ますよ。」

彼は訣別を告げるために手を伸してセルヴァに近付いた。ドン・パオロとミヌッチの他の人々は皆彼を取巻いて、留まる事を勧めた。けれども彼は言葉静に歸る事を主張して、冷な微笑や、巧に皮肉な辭や、上品な身振を以て、餘りに熱心に彼を宥める人々の言葉を遮つた。レイニはドン・パオロの方を向いて、他の者と共にマリニエを引き止めよと陶したけれども、短氣なファレは唯だ腹立たし相に高く肩を時て、顔を盛めて之に答へた。此時マリニエを圍んだ人々の聲に紛れず、ツスカニー辯で話す聲が聞えた。

「未だ何一つ相談が纏まらんでありませんか。まあお待ちなさい。私にも意見があります。」

斯う云つたのは雪白の髪と艶々した顔色と快活な眼とを有つた老僧サルヴァテイ師であつた。

「未だ何一つ相談が纏まらんでありませんか。私も團結する事は賛成ですが、私は特に一つの目的を有つて居ます。然るに先程から種々諸君のお話を承れば、諸君は私のとは全然異つた目的を有つて居られる様に見受けられます。智的進歩、結構な事です。時代精神に従つて儀式を革新する事、勿論結構です。カトリック教會の改革、頗る結構な事であります。私はかの偉人ラファエル・ラムアルスキと同感であります。かの「隠者の黙想」と同意見であります。然るに、ミヌッチ教授の説かる、所の改革は大に智的のもの、様に思はれます。又——」

此時デインは小さな白い上品な手を舉げて云つた。

「サルヴァテイ師、失禮で御座いますが一寸、マリニエ君、相談が再び開始されましたから、何卒御着席下さい。」

マリニエは少し眉を上げたけれども、云はれるが儘に腰を下した。他の人々も亦安心して着席した。彼等はアベが思慮深い人物であると思ひなかつたから、若し彼が腹立まされに歸つたならば大變な事になつたらうと思つた。

サルヴァテイ師は再び話を始めた。自分は羅馬の法王廳を恐れるのではないが、満足して

居る多勢の人々の單純な信仰を擾亂する事を恐れる故に、専ら智的方面に改革運動の鋒先を向ける事は賛成せぬ。この同盟が活動の第一着として、迷つて居る信者を導いて福音書の教訓の實行に還らしめる、道徳的大事業に手を着ける事を希望する。自分の見る所によれば、人の智に光明を與へんと望む者の第一の義務は、人の情に光明を與へる事である。聖書に對するカトリック教徒の信仰を變化する事も大切な事には相違なからうけれども、それよりも先づ基督の聖訓に對するカトリック教徒の信仰を更に有効ならしむる事の方が重要である事は明白である。吾人は、信者が一般に口を以て基督を讚美して居るけれども、人々の心は遠く基督を離れて居るといふ事と、また、多くの人々が神聖な生活の源と信じて居る所の或る一種の熱心な信仰の中に利己主義が大に混じて居るといふ事を、世の人々に説き示さねばならぬ。

「そんな事は我々の議して居る問題に少しも關係がない。」

とドレ・パオロとミヌッチとが吐いた。

サルヴァテイは、いや、大に關係があるとか力むだ。そして彼は列席の人々に、辛抱して終まで聽いて呉れよと云つて、更に話を續けた。彼は財實を求め之を用ゐる事に關する基督教

徒の義務が一般に誤解されて居る事に論及して、この誤解は數百年來教役者の是認を受けて、人の良心の中に深く根を下して居るから、之を根絶ぎにする事は實に困難であらうと云つた。

「諸君、現代はフランス運動を要求するにも拘らず、私は今その様な運動の徴候をも見ません。私は唯だ、社會を感化する力を既に失つた昔ながらの宗派を見ます。私は聖フランシスの精神を繼がず、神聖な貧乏を愛しない基督教民主主義を行政の上にも政治の上にも見ます。私はフランス思想の研究會を見ますが、これは唯だ智的娛樂に過ぎません！我々はフランス運動を奨励しなければならぬと信じます。若し我々がカトリック教會の改革を冀ふならば。」

「如何して？」

とドン・ファレは問うた。ミヌッチは甚く癩癩を起して吐いた。

「全然そんな事ぢやない！」

セルヴァは、始の感動によつて結合した魂が、再び別れ別れに漂ひ始めた事を感じた。テインもミヌッチも、多分ファレも、彼と同様、智的運動を開始する事を願つて居るのであ

る。それにこのフランス論が時と場所を顧みずに飛び出したのは困つた事である。殊にその議論が生きた真理を以て熱して居た事は尙更都合の悪い事である。サルヴァテイの言葉の中に多くの真理が含まれて居た事は疑を容れぬ所で、セルヴァも之を認めて居る。實はセルヴァ自身も、智的運動よりも道德的運動を始める方が上策であり、又一層教會の利益となりはせぬかと、屢は心の中で自問自答した事がある。併しながら、今自分にフランスの使徒となる資格があるとは思はれず、又自分の友人の中にも誰一人これに必要な資格を具備して居る者は見當らぬ。自分と同様に世を遁れて禁慾的隱者の生涯を送つて、宗教的熱心の最も旺なミヌツチすら、その資格を有つて居ない。マリニエもティンもフランス風とは全く異つた趣味を有ち、食道樂で、神經が弱くて、愛情を鸚鵡と小狗とに傾注して居る事は、世人の善く知つて居る所であるから、彼等をフランスの使徒としたならば如何にも奇であらうと、チヨヴァニは心密に思つた。その事は兎に角、サルヴァテイの議論は破壊こそしたれ、何物をも建設しなかつたから、若し何事かを成就しやうと思ふならば、早速防禦線を張らねばならぬ、チヨヴァニはサルヴァテイに向つた。

「サルヴァテイ師、貴方のお話は眞の基督教的的精神に充ち満ちて居りまして、誠に結構で

御座いますが、少々時機を失しては居まいかと私は思ひます。貴方がカトリック教會の改革を希望せられる事は私共と同様であらうと察します。今晚は唯だ同感の人々が集つて同盟會様のものを組織しては如何といふ提案を議するだけでありまして、先づこの問題を議決致さうではありませんか。」

サルヴァテイは中々承知しない。活動をしない同盟は何の爲めであるか了解に苦しむ。智的信仰家の所謂活動なるものは自分の意に適せぬ。

「私の云つた通りだ！」

とマリニエは叫んで、今度こそは歸る決心で席を離れた。けれどもセルヴァは彼を引き留めて、今夜の集會は是で閉ちては如何かと云つた。彼は明日か或はもつと後に、ティン、ミヌツチ、レイニ、ファレの四人を再び集めて相談をする積であつたのである。今夜の所は、サルヴァテイが自説を固執して一步も譲らないのを幸に、マリニエにこの會が不成功に終つたと思つてこの場を去らせる方が便宜であらうと、チヨヴァニも思ひ、ミヌツチもそれと覺つたから黙つて居た。けれどもドン・パオロはそんな事には氣が附かず、是非何とか形の附くまで討論をせねばならぬと云ひ張つた。レイニもセルヴァの希望を見て取つたから、彼と聲

を捕へてドン・パオロを宥めたが、ドン・パオロは容易にマリニエに對する怒氣を收めなかつた。ティンとドン・クレメンテとは各異つた理由に因つて、共に心平ならず思つた。ティンはマリニエの言行を苦々しく思つて、彼を連れて來た事を心密に悔いた。ドン・クレメンテは、サルヴァテリの言葉は實に美しい神聖なもので、決して時機を失したものである。人は各自神の召に従つて努む可きで、智的信仰家は一方に、フランシス派は又他方に、銘々異つた方面に努力する事が當然である。彼等双方を等しく召し給うた神は、彼等の働を同等に見給ふであらう。この二種の異つた職務を執る者がこの同盟の中に在つて一致協力する事は善い事である、と云ひ度かつたのである。けれども彼は突然の事で準備をして居なかつたので、下手な話方をしては耻かしいとも思つたし、又セルヴァがこの會を閉ぢたいと思つて居る事も明であつたから、彼は躊躇して居る中に、つい好機會を逸して仕舞つた。纏て人々は席を離れて、ティンとセルヴァの他は皆露臺へ出た。

アベ・マリニエは、明日サンタ・スコラスティカ修道院とサクロ・スペコ（聖窟寺）を訪うて、オレヴァノとバレストリナとへは未だ一度も行つた事がないから、歸途には多分其處を通つて羅馬へ出るかも知れぬが、誰かこの露臺の上から道を教へて呉れる者はないかと

云つた。ドン・クレメンテは道を指差して教へた。それはマリニエが今夕スピアコから此處へ來る時に通つたのと同じ道で、この家の真下を通つて、少し左の方に架つて居るサン・マウロ橋を渡つて、アネオ川の彼岸を右へ曲つて、彼方のアプシレの丘陵の方向へ登つて行くのである。

森の香と、アネオ川を吐き出す僧院の下の谿の香とが、空氣に混つて露臺へ上つて來た。空は一面暗雲に鎖されて、唯だフランコラノ山の真上のみが透いて居た。その大な黒い山の上に星が二つ慄うて居た。ミヌッチはレイニを呼んでその星を指差した。

「あの小さな星が二つ大層光るちやありませんか。」

「若しダンテにあれを見せたら、あれは聖ベネディクトとサンタ・スコラスティカの『小き煙』が闇の中に自分等に似た魂を認めて輝いて居るのだと云ふでせう。」

マリニエが二人の側へ來た。

「聖者のお話ですか？ 先刻私は貴方がたの中に聖者が居られるでせうと申しましたが、あれは唯だ言葉の文です。貴方がたの中に聖者が居ない事はよく判つて居ります。若し聖者が居れば、直様警察から説諭を受けるか、或は教會の手で支那へ遣られるでせう。」

「縦し警察から説諭を受けたつて何でもないぢやありませんか。」
とレイニが答へた。

「今日説諭を受けると、明日牢に入れられますよ。」

「牢に入れられたつて何です？ 聖パウロは如何しました？」

「ひー、聖パウロは——聖パウロは——」

マリニエはこの後を云はなかつたが、多分、聖パウロは矢張聖パウロだと云ふ積であつたらう。レイニは又、マリニエは矢張マリニエだと思つた。ドン・クレメンテは、聖者を悉く支那へ遣る事は出来ぬ。聖者は僧侶と定つた譯ではない。將來の聖者は俗人の中から出ないとも限らぬではないか、と云つた。

「如何さま、私も左様思ひます。」

とサルヴァテイが相槌を打つた。熱心家のドン・ファレはそれと反對に、將來の聖者はどうしても法王に違ひないと云つた。マリニエはそれを聞いて笑つた。

「それは單純で結構なお考ですな。いや、併し、スピアコからティン君と私とを迎へて来た馬車の音が聞えますから、セルヴァ氏に挨拶をして來ませう。如何です？ 何方か我々と一緒に

緒にお歸りになりませんか？」

彼は欄干から手を伸して、階下の露臺に植付けてある橄欖樹の小枝を一本折り取つた。

「私はこれをセルヴァ氏にも諸君にも差し上げねばなりませんね。」

と笑を含んで、優美な身振をしながら云つて、室内に這入つた。

マリニエが云つた通り、下の街道を此方に来る二頭立の馬車の響が聞えた。聽てその音は別荘の下の崖を廻つて門の前に止つた。暫時して、重い外套を着て大な黒い鍔廣の帽子を冠つたティンと、マリア・セルヴァが露臺へ出て來た。その背後にチヨヴァニとアベが隨いて來た。

「何方か我々と一緒にお出掛けなさいませんか？」

とティンが問うたが、誰も答へなかつた。門を這入つて別荘に近付く人聲と琤音とが、ア
ニオの轟々たる水聲に消されずに聞えた。露臺の東端に立つて居たミスツチは下を見て云つた。

「御婦人ですよ。二人。」

「女が二人！」

マリアは驚いて、喘ぐ様に叫んだ。急いで欄干に近寄つて見ると、白い姿か二つ徐々と登つて来るのが見えた。彼等は今般しい小徑の最初の曲り角の所を通つて居た。未だ随分間が隔つて居た上に四邊は暗かつたから、彼等が何者であつたかは、逆も見別けが付かなかつた。多分階下の家主の所へ来る人だらうとチヨヴァニが云つた。ティン教授は底意あり氣に微笑むだ。

「二階へ来るのかも知れませんが。」

「貴方は何か御存知なのですか！」

とマリアは叫んだ。そして下を向いて呼んだ。

「其處へ来るのはノエミさんなの？」

「はあ、二人！」

とノエミの清しい聲が答へた。すると又別の高い女の聲がノエミに云つた。

「小供なのねー！黙つてれば宜いのにー！」

マリアは小さな喜悅の叫聲を後に残して、回り段階子を駆け降りた。

「ティン教授、貴方は御存知だつたのですね？」

とセルヴァは問うた。左様、ティンは知つて居た。彼は曩にヴェネトに在るテサレ夫人の別荘——テイエポロの壁畫のある別荘——で彼女と戀意になり、近頃また羅馬で遇つた。彼女の弟のカルリノはフネレンツエに滞在して彼女と一緒に來なかつた。彼女とタルセル嬢とは、セルヴァ夫婦を驚かさうと思つたから、ティンに堅く口止をして置いたのである。テサレといふ名を聞いて、セルヴァは今まで忘れて居た事——ドン・クレメンテが其場に居るといふ事、彼がこの女の行衛の知れぬ戀人であらうといふ疑、二人が今出會つてはどの様な事が起らうかも知れぬ故遇はさぬ様にする必要がある事——を急に思ひ出した。彼は無論自分の妻とドン・クレメンテとが先刻階段の途中で話をした事を知らなかつたのである。其中にマリアが小徑を急いで降りる聲音や、次いで起る嬉し相な叫聲や挨拶が聞えた。ティンは餘り永く露臺の上に居つては身體に障ると思つて、階下へ降りやうと云つた。婦人達は屹度彼を迎ひに來た馬車に便乗して來たのであらう。ドン・クレメンテも亦頗る心安からぬ面持であつた。セルヴァは自分の胸の騒を押し隠して、ドン・クレメンテの腕を執つた。

「女達にお會ひなさり度くなければ、これから私に随いてお出でなさい。東屋を抜けて上の方から外へ出る道を御案内しますから。」

僧は之を聞いて大に安堵した様子であつた。それから二人は急いで出掛けたが、ドン・クレメンテは他の人々に訣別を告げる事をも忘れた。

「それに又大分遅くなりました。院長さんの許可を受けました時に、私は九時半には歸ると申しましたのです。」

二人は階段を駆け降りた。けれどもアカシヤ樹の生えて居る狭い空地まで来た時に、向からジャン・テサレとマリアとノエミとが歩いて来た。

アカシヤ樹の下は暗かつたが、それでも眞暗といふ程ではなかつたから、マリアは家から出て来た二個人影は夫とドン・クレメンテとに違ひないと知つた。彼女はジャンの手を曳いて妹の先に立つて歩いて居たが、猶豫なく右へ曲つて、別荘に脊を向けて立つて居る小さな東屋の方へジャンを連れて行かうとした。セルヴァは妻の行動を見て、早速ドン・クレメンテに耳打した。

「早くこの眞直の徑をお出でなさい。」

併しこの用心は何の甲斐もなかつた。

何の甲斐も無かつたといふのは、ノエミが姉が右へ曲るのを見て驚いて、立ち止まつて叫

んだからである。

「姉さん、何處へ行きなされるの？」

ドン・クレメンテは行手に女が一人立つて居るのに氣が付いたのか、女の側を通り抜けて降りて行かずに、家の側面と丘とが相接する所の、小さな空地の最も暗い隅に待つて居た作男を呼びに行つた。彼は「ベネデット」と呼んで、それからセルヴァの方へ向いて云つた。

「今あの畑をお見せなさいますか？」

「今時分に？」

とチヨヴァニは答へた。彼方ではマリアがノエミに囁いた。

「今お客様が二三人お歸りなされる所だから、此處を通つて仕舞ひなされるまで東屋で待つて居ませうよ。」

彼女は話しながら、ノエミに向つて頻に頭を振つて見せたから、ジャンもそれに氣が付いて、直に何か秘密の理由があるものと察した。

「何故ですか？ お客様は恐ろしい人なので御座いますか？」

とジャンは歩調を緩めた。ノエミは姉の秘密の動機は解らぬが、希望だけは了解したから、

姉に賛成の意を表して、姉とジアンとの腰を抱いて、東屋の方へ押して行かうとした。ジアンは友が餘り熱心に自分を横道へ連れて行かうとするから、自然反抗したくなつて、ノエミの方を向いて叫んだ。

「何をするんです！」

此時チヨヴァニが彼等に近付いた。彼は兩腕を擴げてドン・クレメンテを隠す様にして、ジアンとノエミに挨拶をするために足早に近寄つた。ドン・クレメンテは作男を連れて、ジアンから五歩許り隔つた所を急いで通り過ぎて、険しい小徑を降りて行つた。

セルヴァはドン・クレメンテがジアンに遇はずに歸れた事を喜ばしく思つた。ノエミも姉婿の挨拶を聞いて、後返りをしてその側へ走り寄つた。ノエミとの挨拶が済んでから、チヨヴァニはジアンと握手する爲めに手を差し出したが、ジアンはそれに氣が付かず、他に心を取られて居る様子で、何やら譯の解らぬ挨拶の言葉を口の中で呟いた。此時恰もティン、マリニエ、ファレ、レイニ、サルヴァテイの一行が家から出て來たので、セルヴァ夫妻はノエミとジアンを待たせて置いて、彼等の方へ行つた。訣別の挨拶に少し時が費つた。ティンはデサレ夫人に挨拶をして行きたいと云つたけれども、マリアは先刻の處にジアンの変が見

えないので、多分ノエミと連れ立つて、人々が話して居る背後を通り抜けて、家の内へ這入つたのであらうと思つたから、自分が然るべく傳言をして置かうと約束した。終に五人の客がチヨヴァニに伴はれて飯を降りて行つた時に、マリアはノエミの聲を聞いた。

「姉さん！姉さん！」

妹の聲の常ならぬ調子は何かの起つた事を彼女に知らせた。馳せ返つてみると、今から五分間も経たぬ以前に、サンタ・スコラスティカ修道院の作男が行んで居たあの片隅に置いてあつた薪の束の上に、ジアンが腰を掛けて、力の無い聲で「いゝえ、何でもありません、何でもありません、何でもありません！直に内へ這入りますよ、直に這入りますよ！」と繰り返して云つて居た。ノエミは大層狼狽した様子で事態を説明した。あの客が話して居た間にジアンは急に眩暈がしたので、ノエミは一生懸命になつて漸くジアンを薪の處まで引張つて來たのである。

「這入りませう、這入りませう。」

と繰り返しながら、ジアンは漸くの事で立ち上つて、二人に助けられて別荘まで辛うじて徐歩した。彼女は下女が水を持つて來るまで入口の段に腰を掛けて待つて居たが、水が來た時

に唯だ一啜しか飲まなかつた。マリアが薬を上げやうかと問うても、要らぬと云つて、暫時其儘休むで居たが、聽て大分気分が良くなつたので、徐々と階段を昇る事が出来る様になつた。昇つて行く中に度々立ち止まつて息を吐いたが、其度毎に言譯をして笑顔を作つた。燈火を持つて先に立つて、後退しながら案内をした下女は、ジアンが眩むだ眼や、白くなつた唇や、恐しい程蒼い顔を見て、氣が遠くなるやうに感じた。ジアンは小さな客間の長椅子へ案内されて、暫時眼を閉ちて黙つて休息した後、尙笑を含みながら、この様な眩暈は貧血の結果起るので、今夜に始まつたのではないと、セルヴァ夫人に語つた。ノエミとマリアとは密々と話した。「寢床へ」といふ言葉が聞えたので、ジアンは有難相な顔付をして、領いて同意を表した。マリアはジアンとノエミとの爲めに豫め二階中で一番良い室―廊下の向側の、チヨヴァニの書齋に面した隅の室―を用意して置いた。ジアンがノエミの腕に縋つて苦し氣にこの室の方へ歩いて行く中に、客を送つて門まで行つたチヨヴァニが戻つて來た。階段を昇つて來る夫の聲音を聞いて、マリアは降りて行つて彼を止めた。夫婦は闇の中に立つて聲を潜めて語つた。それでは矢張彼であつたらしいが、女の方が如何して彼を認めたのであらう？チヨヴァニはあの刹那に自分の體でジアンとドン・クレメンテとの間を隔てた積であつた。

そしてドン・クレメンテは殆ど走らぬ許に降りて行つた。けれどもチヨヴァニは直ぐうも妙だと思つた。ジアンが彫像の様に突立つて、握手もせず、挨拶も碌々しなかつたから。ドン・クレメンテも露臺の上で、テサレ夫人が着いたと聞いた時に、心配らしい風であつた。彼が女を避け度いと思つた事は明白であつた。併し彼は少しも感情を外に顯さなかつた。マリアも左様思つた。それから彼女は階段の下での彼の話の趣を夫に語つた。話が終つて、夫婦は徐に階段を昇りながら、この異常な一場の戯曲、憐な女の身をも魂をも壓し碎かんとする悲哀、男が心に受けて歸つた恐しい印象、今宵二人は如何に苦しい一夜を過すか、明日は如何なる事が起るであらうか、男は如何するであらう、女はどうするであらうなど、我を忘れて思ひ回らした。

「貴方、此様な事に就いてお祈をしても宜う御座いませうね？」

とマリアは問うた。

「うむ、あの女が愛も悲も神に捧げる事が出来るやうに一緒に祈らう。」

と夫は答へた。

二人は手を繋ぎ合はせて、厚い帷で二つに仕切つてある寢室に這入つた。彼等は窓際に立つ

て、無言の中に祈りながら、空を見上げた。小さなサンタ・マリア・テラ・フェアレ禮拜堂の上に覆ひ被さつて居る櫛の葉の中を、北風が歎息の様な音を立て、通つた。

「可哀相に！」

とマリアは呟いた。彼女にも夫にも、今宵は互を愛する情が常にも増して深いやうに思はれたけれども、併し——孰も口に出しては云はなかつたが——二人とも、互の間を妨げて愛の接吻を交させない何物かあるやうに感じた。

ノエミが室の扉を閉ざると、ジアンは抑へ切れぬ悲が一時に發して、友の肩に顔押し當てて、身を震はせて泣き沈んだ。ノエミはかの僧が急いでジアンを傍を通り過ぎた時のジアンの有様から推測して、彼が例のマイロニといふ男であると断定したから、今友を憐む情に堪へられなくなつた。彼女は病児を慰撫する様な聲で、愛情の籠つた優しい言葉を盡して友を慰めたが、ジアンは答へもせずに泣き續けた。ノエミは遂に勇を鼓して次の様に云つた。

「ね、ジアンさん、この方が善いのかも知れなくつてよ。もう空頼をする事が出来ないよ、はつきり判る方が善いのかも知れなくつてよ。ね、あの方があんな装をして居なさるのを見

なかつたのが、却て貴女の爲になるのかも判りませんよ。」

今度は泣吃逆の合間に返事があつた。

「いゝえ！ 違ひますよ！」

とジアンは幾度も語氣烈しく繰り返したが、その調子が殆ど悲を帯びて居ない位であつたけれども、實に妙に聞えたので、ノエミは全く譯が解らなくなつた。それで彼女は又前の様に慰めたが、前よりは少し遠慮して居る様な風であつた。

「いゝえ、左様よ。ね、ジアンさん、左様よ。もう斯うなつては仕方がないのでですから——」

「妾の云ふ事が解らないの？ あの人ぢやないつて云ふのに！」

とジアンは涙に濡れた顔を上げて云つた。

ノエミは仰天して、ジアンを抱いて居た手を放した。

「何ですつて？ あの人ぢやないつて！ あの人ぢやないからと云つてこの大騒ぎ？」

ジアンは又ノエミの肩に顔を當て、涙に咽びながら云つた。

「あの坊さんぢやないのよ。もう一人の人ですよ！」

「もう一人の人つて？」

「坊さんに随いてた人よ！坊さんと一緒に歸つて行つた人ですよ！」
ノエミはその様な人が居た事にも氣が付かなかつた。ジアンは一聲煙擧的に笑つて、息が窒まる程緊くノエミを抱き締めた。

第三章 嵐の一夜

ドン・クレメンテはセルヴァの住居から門へ降りる途すがら心竊に思ひ煩つた。「男は女に氣がついたであらうか。若し氣がついたならば、女が彼の心に如何なる印象を與へたであらうか。門に達した時に、ドン・クレメンテは今し方「ベネテツト」と呼んだ男の顔を熟視めたが、その肉の落ちた蒼白い智的な顔には、少しも心の騒いで居る様子が見えなかつた。その眼は訝し相に「何故私の顔をその様にお眺めなさるのか？」と殆ど詰るが如くに、彼の眼を見返した。「多分彼は女に氣が付かなかつたのであらう。或は女が來た事を私が知らないと思つて居るのかも知れない。」と僧は思つた。彼は友の腕をかへて身を寄せながら、無言の中に左へ曲つて、暗い、水音の高いアニオ川の谿の方へ向つた。路傍の並木の下を二三歩行つてから、ドン・クレメンテは問うた。

「お前は今晚の集會の事を聴きたくはないかね？」

彼の聲には此様な普通の言葉には不必要な程の優しさが含まれて居た。

「え、お聴かせ下さいませ。」

その聲は暖て感興のない調子であつた。ドン・クレメンテは、「てつきり女を認たに違ひない！」と思つた。それから集會の話をしたけれども、他の思案に心を奪れた人の様に、話振に活氣も無く、委しい事も語らなかつた。聽いて居る方も亦、唯だの一度も質問や批評を以て話を遮らなかつた。

「それで何一つ相談が纏らずに別れたのだよ。尤もこれは幾分か外國の客が來た爲めかも知れないが、兎も角さういふ譯で、お前の事に就てセルヴァさんと話を定められなかつた。併し明日また少くとも三四人は集るだらうと思ふ。だがお前は、踞躅ひながら、「お前は明日また一緒に來てみやうと思ふか、どうだね？」

ベネデットはすん／＼歩きながら、前と同じ謙遜な調子で、

「先程見えました外國婦人達は逗留せられる筈で御座いますか？」

ドン・クレメンテは彼の腕を緊く締めた。

「どうだか知らないよ。」

彼は大層心を動かされた様子で、今一度腕を締めて、云ひ足した。

「若しさうと知つたら——」

ベネデットは何か云はうとして口を開いたが、一言も云はずに口を嚙んで仕舞つた。二人は黙つて、水音騒がしい谿間に竝立する黒い崖の方へ進んで、サン・マウロ橋と成つてアニオ川を越える爲めに屈折する街道を棄て、左手の崖の方へ紆り昇る僧院の驛馬徑を傳つて足を運んだ。此時ドン・クレメンテの眼には、行手に聳ゆる斜の巨巖が、ベネデットの道を遮る悪魔の象徴とも見えた。又深くなりゆく闇も、人跡絶えた川の高く太くなり増る水音も、等しく彼を威嚇す力の象徴の様に思はれた。

左へ曲つて、丘の側面に沿つてマドンニナ・テロロの方向に昇つて行く僧院の驛馬徑と、今一つ、ネロ帝の浴場の廢趾を過ぎて、眞直に谿間へ向ふ別の驛馬徑とが分れる處に在るサン・マウロ禮拜堂の少し彼方で、ベネデットは靜に僧の腕から自分の腕を離して、立ち止つた。

「お師匠様、貴方に申し上げねばならぬ事が御座いますが、どうぞお聞き下さいませんか。少し長くなるかも知れませんが。」

「聽いても宜いが、併し遅いから僧院へ歸つてからにしては如何だね。」

ベネデットは、往來に面した修道院の大門からも、往來から禮拜堂と三個の廻廊の中の

第二に通ずる廊下の小門からも、這入る事の出来る中庭に接した、巡禮を宿らせる小家に住んで居たのである。

「私は今夜僧院へ歸らずに置かうかと思ひます。」

「歸らずに置かうと思ふ？」

ベネデットは、修道院に仕へて送つた三年の間に、ドン・クレメンテの許を受けて、丘陵の上で祈禱に一夜を明した事が幾度もあつた。それ故に今ドン・クレメンテは、弟子が激烈な靈的煩悶の時機を通過して居る爲め、彼の寢床と彼の部屋の物影——悪魔と謀し合はせて彼の想像を苛責する物——を避けて、外に通れ度いのであらうと察した。

「お師匠様、どうぞお聴き下さい！」

ベネデットの調子は決然として、今や彼の唇を出でむとする言葉の重みに壓されて、苟且ならず開えたので、ドン・クレメンテは時が遅いと云ひ張る事は宜しくないと思ひ定めた。此時頭の上に蹄の音が聞えて此方へ近附く氣配であつたから、二人は徑の片方のネロ帝の榮華の夢の跡が未だ残つて居る小な草原へ上つた。この廢趾と、川の彼岸の四手樹の森に隠れて居る二三のアーチとは、曾ては共に一つの浴場の一部を成して居たが、今は脚下

遙に咽ぶアオ川の水に隔てられて居る。昔このアーチの上の山に悪魔の祭司と妖婦とが住んで居て、聖ベネディクトの弟子等を誑さうとしたことがあつた。僧はジャン・テサレの事を想つた。遙彼方アオの谿の末端なるプレクラロとイエネ・ヴエツキオの丘陵の上に、セルヴァの家の露臺で人々が「聖き光」と呼んだ二つの星が輝いて居た。二人は馬上の人々を通り過ぎるのを待つた。彼等の姿が闇に隠れた時に、ベネデットは物をも云はず師の肩に顔を押し當てた。ドン・クレメンテは驚いたが、弟子の體がわな／＼慄うて、痙攣的に強く揺ぐのを見て、この感動の原因は夫の女を見た事にあると推測した。

「心を確に、え、お前心を確に。是は神が下し給うた試煉だから。」

と彼は幾度も繰り返した。

「貴方は思ひ違ひをしてゐらつしやいます。」

とベネデットは囁いた。

彼は臙で感情を壓し鎮めて、師に壞れた古堀の上に腰を掛ける事を乞ひ、自分は草の上に跪きながら、兩腕を組んで堀の上に靠せた。

「私は今朝から、主が私に就ての聖旨を變へ給うた事を、或る徴に依つて教へられまし

た。けれども、それが如何いふ風に變つたのか解りませんでした。三年前に、私の家内が死にかけて居りました時に、あの小さな禮拜堂で、私が祈つて居る中に起つた事を、貴方は御存知で御座いますか？」

「あの幻の事かね？」

「いゝえ、あの幻を見るよりも前に、私が眼を閉ぢて居りますと、眼瞼の上にあのマルタの言葉が映りました——『師來りて汝を呼び給へり。』と！今朝貴方が勤行をとなへておいでなさいます中に、私は心の中に同じ言葉を見ましたが、これは自然に記憶の中へ返つて來たのだと思ひました。聖餐が済みましてから、私は暫時心配でなりませんでした。基督が私の魂の中で『解らぬか？解らぬか？解らぬか？』と云ひ續け給うた様に思ひましたから。それで畑で常よりも餘計に働いて體を疲れさせやうとしましたがその甲斐もなく、一日中絶えず胸が騒ぎ詰めでした。午後、皆様が何時もお集りなさいますあの終の下で、暫時讀書を致しました。その本は聖アウガステンの『僧徒勞働論』でした。上の方の道を幾人か大なる聲で話しながら通る者がありましたので、私は無意識に首を上げました。それから、別に何といふことも無く、私は讀書を續けずに、本を閉ぢて考へ込みました。聖アウガステンが僧侶

の勞働に就て云つた言葉や、聖ベネディクト教團の事や、ロンセの事などを考へました。またどうしたならばベネディクト派が舊の勞働に立ち歸るであらうかなど、考へました。其時體は疲れて居りましたが、心は未だ聖アウガステンの大議論を頗に味つて居りますと、天から『師來りて汝を呼び給へり』と云ふ聲が確に聞えた様に思はれました。多分これは幻想に過ぎななだかかも知れません。聖アウガステンを讀んだ故かも知れません。『取りて讀めよ』が知らぬ中に潜んで居た故かも知れません。私はさうでないとは申しません。けれども、其時私は慄しました。木の葉のやうに慄しました。私は恐る恐る我と我が心に、主は私が僧になる事を望み給ふのであらうかと問ひました。お師匠様、貴方も御承知で御座います、私は二度か三度貴方に申し上げましたでせう、私が僧になれば、少くとも一つの點に於て、私の幻の終一致する。併し、貴方が、ドン・チウセツペ・フロレス師と同じ様に、此の幻を信じるなど私に忠告して下さいました時に、私にとつて此の幻を信じてはならぬ理由と思はれる事がある事、貴方にお話し申しましたでせう。それは、私が僧になる價值があると思はれぬ事、又其上に、それでも一つの宗派に這入つて仕舞ふ事が私には奇妙に嫌に感ぜられる事、で御座いました。けれども、若し神が僧になる事を私に命じ

給うたら如何でせう！若しこの甚しい嫌悪の情が試験に外ならなかつたならば如何でせう！私は今夜セルヴァさんの處へ参ります途で、貴方にお話し申し度かつたのですが、貴方がお急ぎのやうでしたから、何も申されませんでした。彼處で、アカシヤの下で薪に腰を掛けて居ります中に、私は最後の打撃を受けました。私は疲れて、疲れ切つて居りましたので、五分間許うとく、眠りました。夢の中に、私はドン・チウセツペ・フロレス師と一緒に、ブラリア寺の中庭のアーチの下を歩いて居りました。私は泣きながら「此處でした、此處でした！」と彼に申しました。ドン・チウセツペは言葉優しく「左様です、けれども、その事は考へずに、寧ろ主が貴方呼び給ふと思ひなさい」と答へました。私はまた、「何處へです？主は私を何處へ呼び給ふのでせう？」と申しました。其時、餘りの悲しさに眼が覺めました。家の上から誰か人を呼ぶ聲が聞えました。すると、誰か庭の下の方から答へました。躡て女の方が一人家の中から駆け出して來られました。そしてその人と客との挨拶が聞えました。が、其中に私はあの女の聲を聞きました！始の中は確に判りませんでした。躡てだんだん聲が近くに來ました時に、私は最早疑ふ事が出来ませんでした。矢張あの女でした！一秒ほどの間、私は頭がぐらくしました。それは僅一秒ほどの間でした。その時私の

心の中に大なる光が照り輝きました。」

ベネデットは頭と組み合せた手を上げた。彼の聲は神秘的な熱情を帯びて響いた。

「師來り給へり！私の申す事がお解りになりますか。お師匠様！主が私と共に居給うた爲めに、私は少しも恐を感じませんでした。私は何物をも恐れませんでした。あの女をも私自身をも。私はあの女があゝの空地へ昇つて來るのを見ました。私はこんな考を持つて居りました。「若し他に人が居ない時に二人が出會つたならば、私は妹に對する様に彼女に話さう。私は彼女の宥を乞はう。多分神は彼女に語るべき真理の言葉を私に與へ給ふであらう。私が彼女の魂の救はれる望を有つて居る事！私自身の魂に就ては心配せぬ事を彼女に説いて聞かさう」と。」

ドン・クレメンテは彼の言葉を遮らすには居られなかつた。

「いや、いや、それは宜しくない！」

と彼は大層心配して叫んだ。そして弟子の顔を兩手で抱きながら、如何したならば二人の出會ふ事を防げやうか、如何したならばベネデットを他處へ遣る事が出来やうか、と思案に暮れた。あゝ然だ、セルヴァ夫婦！セルヴァ夫婦に警告せねばならぬ！

ベネデットは喘ぎながら語り續けた。

「貴方が何故左様仰有るのか解つて居ります。けれども、若し私があの女に遇ひましたら、以前私があの子に私の心の中の悪を興へやうとしましたと同じ風に、私の心の中に在る善を興へやうとしては悪う御座いますか。我々が自分等の魂の救はれる事を凡ての他の事よりも餘計に願ふ事は、凡ての他の者よりも餘計に神を愛するその愛と矛盾すると、貴方御自身が私にお教へなされた御座いませんか。また、我々が眞實に人を愛する時には、我々は自分の事を考へぬと。また、我々は唯だ愛する者の意を爲さうと努めて、他の人々がそれに倣ふ事を願ふと。また我々は斯くの如くにして確に救拯を得る事が出来る、絶えず自分の魂の救拯を心に想ふ者は、救拯を失ふ虞があると、お教へなさいましたでは御座いませんか。」

師は弟子の髪を撫でながら、

「左様だ。全くお前の云ふ通りだ。だが併しお前は明日イエネへ行つて、私が迎へを遣るまで歸つて来てはならないよ。私はイエネの教區の教師に宛てた添書を書いてあげるから、それを持つて行つて世話になるのだ。その教師は實に善い人だ。宜いかね？では、遅いから

僧院へ歸らう。」

彼が立ち上つたので、ベネデットも餘儀なく立つた。頭の上でサンタ・スコラスティカの時計が鳴つて居た。十時だらうか。十一時だらうか。ドン・クレメンテは始から數へなかつたので、十一時ではあるまいかと心配した。彼は様々の感情に心を占められて、時の移るのを覺えなかつたのである。如何なる事が起らむとして居るのであらうか。誰か未來を豫想する事が出来やうぞ。果して今何事が起らむとして居るのであらうか。二人は草原を去つて、峻しい驪馬徑の岩の上を昇り始めた。ドン・クレメンテが先に立つて、ベネデットが直その後を隨つて、二人とも黙つて感情の嵐に騒ぐ魂を抱いて、昇つて行つた。アネオ川の沈鬱な聲が彼等の思に答へた。徑の屈折する處から遠いスピアコの燈火が見えた。けれどもそれは僅であつたから、多分十一時かも知れぬ。纏て修道院の塙の暗い隅が、二人の前に朦朧と現れた。ベネデットは嘗てジアンに誘惑せられて、それに敗けた處である、あのブラリアの廻廊から、今ジアンに近くに居ながらも、然も固く基督に心を下した心を持つて、別の聖所を指して行くこの間の中の歩み難い上り路まで、神が如何に不可思議な手段に由つて自分を導き給うたかを、つくづく想ひ回らした。

この危急の時に當つてドン・クレメンテの心に強く浮んだ實際的の分別を是とする理由と
同じ理由が、嘗て平穩無事の日に彼がこの最愛の弟子に教へた理想的の神聖を可とする理由
と、先程から既に弱りかけたベネデットーの意志の統治權を奪ひ合つて居た。實際的の分別
を是とする理由は壓制的な猛威を振つて彼に肉薄したが、理想を是とする理由は唯だ悲壯美
を帯び遠方から攻め懸けた。塀の暗い角の上に高く輝いて居る二つの「聖き光」は冷厳たる姿
に哀愁を帯びて、彼を見守つて居る様に思はれた。嗚呼不浄なる地よ！嗚呼傷しき地よ！又
恐らくは——不浄なる分別よ！傷ましき分別よ——現世的分別よ！とベネデットーは思つた。
塀の角へ来た時に、二人はアニオの沈鬱な聲を後に残して、左へ曲つた。修道院の大門を
抜けて、今一つ角を曲つて、圖書室の下の長い暗い廊下を横切つて、低い入口に達した。ド
ン・クレメンテは鈴を鳴らした。九時に、或は九時を少し過ぎると、修道院の鍵は皆院長の
手許に差出す事になつて居るから、二人は暫時待たねばなるまい。

「では、外に居りましても宜ろしう御座いますか」

とベネデットーは問うた。

是迄、彼は師の許可を受ては時々修道院の上のコレ・ルンゴの禿山か或はタレオの丘陵に

登るか、又はサンタ・クロチエラ禮拜堂からサクロ・スペコの森へ行く途中に越える岩山の
中腹で、一夜を祈り明したとがあつた。今ドン・クレメンテは彼の言葉を聞いて、暫時踟蹰
つた。彼は先刻の弟子の顔を忘れて仕舞つて居た。ドン・クレメンテは弟子の顔が、殊に今
日は常よりも曇れて、血の氣が無く見えたから、唯さへ畑の仕事の疲勞と、贖罪の苦行と、
慰安のない生活との爲に、甚く害はれた彼の健康が、更に悪しくなりはせぬかと氣遣つて、
其由を彼に話した。

「私の體の事は御心配下さいませぬ。私の體は私から遙に隔つて居ります。それよりも
どうぞ神の聖旨を確める爲め、私に出来るだけの事をさせて下さいませ。」

と弟子は謙遜に而も熱心に求めた。彼は尙言葉を續けて、彼がこの出會に就て神の教を祈
り求めやうとする事、又丘陵の上で祈つた時ほど、神が自分に近いと感じた事のない事を語
つた。師は兩手で弟子の顔を抱いて、その額に唇をつけた。

「行つても宜しい。」

「では貴方は私の爲めに祈つて下さいませうか。」

「あゝ、今も、何時も。」

寔音が廊下に聞えた。錠の中で鍵が廻つた。ベネテットは影のやうに消え失せた。

修道院の門番のフラ・アントニオ老人は、ベネテットの姿が見えぬ事を訝る念を色にも出さず、下輩の謙遜と古い律義な家人の誇りが混合して成つた威儀のある、恭しい口調で、院長が居間で待つて居らるゝ旨を、ドン・クレメンテに傳へた。ドン・クレメンテは小さな手燭を提げて、院長の室や自分の室の列んだ大廊下へ出た。

院長のオモボノ・ラヴァシオ師は、小さなラムプを點した薄暗い小室に彼を待つて居た。この質素に過ぎると思はれる程飾のない座敷の中には、見る者の眼を引く物としては、唯だモロネの筆になつた立派な男子の肖像と、ルイニの書風によつて天使の首を書いた小さな書板二枚と、楽譜を堆く積んだ大ピアノとが在るのみであつた。繪畫と音楽と嗅煙草とに目の無い院長は、僧として又統治者としての職務を盡した後の多くも無い餘暇の大部分を、モツアルトとハイドンとに捧げた。彼は怜悯で、少し晴人の風があつて、文學、哲學及宗教上の學問も一通りは有つて居た。併し彼は千八百五十年以後の學問を凡て侮蔑の眼を以て見て居たから、彼の學問も其年限りで止つて、前へは少しも進まなかつた。彼は丈が低く、髪が白く、

賢さうな顔をして居た。彼は僅三日前に前任地パルマから着任した許であつたが、その膠のない様子と、骨々とした狎々しい物云ひとは、身分の高い羅馬人で極めて上品であつた前院長を見馴れた僧等を驚かした。

ドン・クレメンテは彼の前に跪いて、彼の手に接吻した。

「スピアコといふ處は妙な處ぢやの。十時と十一時とは同じ事ぢやと思つて居なさるか？」

と院長が問うた。ドン・クレメンテは、途中で愛の務の爲めに止められて暇取つたのであると辯疏した。院長は彼に椅子をすゝめた。

「睡いかの？」

ドン・クレメンテは答へずに微笑んだ。

「うむ、お前は睡眠時間を一時間徒費したのぢやが、今私はもう少しその時間を取らねばならぬ譯があるで、暫時辛抱しなさい。私はお前に二つの事を話したいと思ふ。お前はセルヴァとかいふ人とその家内とを訪問しても宜いかと私に問はつしやつたが、もう行つて來たかな。え？行つて來たか？お前は良心に答める事は無いかの？」

「はい、決してその様な事は御座いません。」

とドン・クレメンテは躊躇せず答へたけれども、心の驚を隠す事は出来なかつた。

「うむ、うむ、うむ。」

と院長は得心した様子で、嗅煙草を澤山攫んで嗅いだ。

「私はそのセルヴァといふ人を知らぬけれども、羅馬には知つて居る人が居る。その人達も本當は知らぬのかも知れぬが、まあ自分達では知つて居る積で居るのぢや。セルヴァといふ人は著述をする人ぢやつての？ 宗教上の著書があるぢやらう？ 反対派の顔振れから察すると、この人はロスミニ派ぢやと思はれる。反対派の人間なんぞ、ロスミニの靴の紐を結ぶ價値も無い者許りぢやが、私等はよく考へて、物の識別をして掛らねばならぬて。本當のロスミニ派の人等はドモドツソラに居て、この様な女房のあるやうな人ぢやない筈ぢやの。え？ それはまあそれとして置いて、今夜夕飯が済んでから、羅馬から手紙が来た。その手紙には——其手紙を寄越した人は中々の勢力家ぢやがの——丁度今夜このセルヴァといふ似而非信者が、同じ様な毒蟲等を自分の家に集めて、秘密會を開く相ぢやで、多分お前も出席し度がるぢやらうから、お前を遣らぬ様にせいと書いてあつた。私は如何したら宜かつたのか判らん。私は聖父様の仰せがあれば、善かれ悪かれ従ふのぢやが、若し聖父様から何とも仰せが

無ければ私は考へるのぢやからの。處がお前が出て行つた後ぢやつたから、お前に取つては都合が好かつたのぢや。いや、本當に、天國の中まで搜し廻つて、異端信者を引捕へやうとする熱心家があるものぢやて！ 併しお前は今、良心に答める事は無いと云ふ。では手紙に書いてある事は本當ではないのぢやらうか？」

ドン・クレメンテは、セルヴァの家の集會には確に異端信者も不平家も居なかつた。出席者は共に教會や教會の弊害やその救済策に就て談じたが、其人々の教會に對する赤誠は、院長其人の赤誠と異らぬであらうと答へた。

「いや、いや、教會の弊害とか、その救済策とかいふ問題は、私なぞの考へる筈のもではない。縦し考へるにした處で、私は唯だ神様にだけその事を申し上げて、神様御自身からそれ／＼適當な人々にその事を云つて頂くのぢや。お前もさういふ風にしたが善い。宜いか、この事は忘れぬ様にな。それは教會の中には弊害も在らう。又、その救済策も在らうも知れぬが、併しその救済策は毒藥かも知れぬではないか。ぢやから私等は手出しをせずに、神様といふ名醫にその藥を盛る事をお任せ申して、私等の方では祈るのぢや。若し私等が聖徒の交といふ事を信じぬなら、修道院の中で何の用事がある？ 御互の心を亂さぬ爲め、もう二

度とあの家へは行かぬ様にな。二度と行き度いなぞと云つてはなりません。」
院長は父が子に對する様な調子で諭し終つて、慈愛の籠つた様子で若僧の肩に手を掛けた。
ドン・クレメンテは再びその良友に會はれぬ事、殊に明日チヨウアニと會合して、ベネデッ
トーがジアンと會ふ虞がある事を警告し、且つ共に防禦策を講じる事が出来なくなつたのを
大層悲しんだ。

「二人とも純金の様な立派な基督者で御座いますが。」

と彼は悲し氣な様子で素直に云つた。

「お前の云ひなざる通りぢやらう。あんな手紙を書く熱心家よりは多分餘程善い人々であ
らう。私は腹藏なく云ふのぢやよ。お前はアレツシアの生れぢやの？うむ、私はベルガモ
やが、アレツシアでもベルガモでも、あの様な人達を腫物ぢやと云ふの。本當に教會の腫物
ぢや。まあ都合の好い様に返事を出して置かう。この寺の者は誰も異端信者の集會に出たり
なごせぬと。ぢやが、お前はセルヴァの處へ二度と行かぬやうにしなければ。」

ドン・クレメンテは諦めた様子で、父親のやうな老僧の手に接吻した。

「それからもう一つの事ぢやが、聞けばお前の傳で、巡禮の宿坊に三年も前から住んで居

る男がある相ぢやが、全體あの家には牧羊者の他は定まつて住ませぬ筈ではないか。え？前
の院長の許可を受けた？勿論それは私も知つて居る。その男は大層お前を慕つて居て、お前
がその男の師匠で、またその男に勧めて圖書室で勉強させると聞いた。尤も、その男は野菜
畑の仕事をするし、中々の信心家で、皆の者の良い手本ぢや相ぢやが、併し、その男は僧に
なる考を有つて居る様子は少しも見えぬ相ぢやで、寺の宿坊に三年も居る事は少し妙ではな
いか。お前は譯をよく知つて居るぢやらう。さあ、話しなさい。」

ドン・クレメンテは修道院の僧の或者が——それも年齢をどつた者の中ではなく、却つて
若輩者の中に——前院長がベネデットーに好意を表した事を喜ばぬ者があるのを知つて居
た。彼とベネデットーとの間の友愛も彼等の餘り好まない事で、既にドン・クレメンテはこ
の事に就て厄介な目を見た事がある。それで、今彼は此話を聞いて、早誰か、新院長を味方
に引き込まうとして、運動に着手したのだなど覺つた。彼の美貌には紅を潮した。彼は先づ
胸の中に燃え立つ憤の焰を寛容の念を以て消さんと欲したから、即座には答へなかつた
が、遂に口を開いて、院長に事情を告げる事は自分の義務であり、又希望であると云つた。
「その男はピエロ・マイロニと申しまして、アレツシアの者で御座います。貴方もその家

族の事は屹度お聞きなさいました事が御座いませう。彼の父はドン・フランコ・マイロニと申しましたが、身分も財産も無い女と結婚致しました。其當時ドン・フランコの両親はもう亡くなつて居りましたので、彼は父方の祖母で、マイロニ侯爵夫人といふ高慢な女の世話になつて居りました。」

「あゝ、知つてる！ 恐しい女ぢやつた！ 私はよく覚えて居る。アレツシアではあの女の事を『狼 侯爵夫人』と云つて居たつて。大きな黒い鬘を冠つて、猫を十二匹も畜つて居た。私はよく覚えて居る。」

「私は唯だ噂を聞いて知つて居たので御座います。」

とドン・クレメンテは笑を含んで云つた。院長は咽喉の中でごろ／＼音をさせて、この不愉快な記憶が置いて行つた嫌な味を消す爲めに、喫煙草を澤山擽んで喫いた。

「扱て、祖母がその様な不釣合な結婚を承知致しませんので、新夫婦は暫時妻の叔父の家に厄介になつて居りました。妻にも亦両親が無かつたので御座います。ドン・フランコは千八百五十九年に軍隊に這入りましたが、負傷した爲めに死にました。其後間もなく妻も死にましたので、小供は祖母のマイロニ侯爵夫人の世話になつて居りましたが、祖母が亡くなつ

てからは、その親戚でスクレミンといふヴェネチアの者が世話をして居りました。祖母は澤山の財産を小供に遺して行きました。彼はこのスクレミン家の娘と結婚致しましたが、不幸にも、多分結婚後間も無い事と思ひますが、その妻は發狂致しました。ピエロはこの不幸を大層悲しみまして、世間へも顔を出さずに隠棲して居りましたが、到頭或時に、或る夫と別れて居た女と交際を始めましたのが病み付きで、それから暫時は罪の生涯を送りました。彼は道徳上にも信仰上にも罪を犯しましたので御座います。處が遂に（神様御自身で行ひ給うた奇跡の様に思はれますが）妻は死ぬ間際になつて正氣に復しまして、夫を呼んで色々話をして、癡て聖徒の様な立派な死に様を致しました。妻の死はピエロの心を神に向けました。彼は女を棄て、權利を棄て、凡ての物を棄てまして、或夜行先を誰にも云はずに家を出ました。之よりも前に、私が父の病氣を見舞にアレツシアへ歸りました時に、一度面會した事がありませんので、私がスピアコに居る事を知つて、頼つて参りました。其上に彼は我々の派が好きなので、また何か我々の派のあのアラリアの寺に關聯した事柄を懐しく思つて居たので御座いました。それから彼は私に會ひまして、色々身の上を打ち明けてまして、ごうか罪亡しの生涯を送れるやうに力を貸して呉れよと願ひました。私は彼が我々の派に這入る希望を

有つて居るものと思ひましたが、彼はどうしても自分は僧になる價值がなく、又此點に就て未だ神の聖旨を確めて居ないから、當分は罪亡しの苦行をしながら勞働をして自分のパン——唯僅ばかりのパンを儲けたいと申しました。其他にも彼の身の上に起つた或る超自然的の出來事など色々の話をして聞かされた。それで私は直様彼の事を前の院長様に申し上げまして、彼を宿坊に住ませて、野菜畑で作男の手傳をさせ、彼の願ひ通りの食物を宛行ふ事に定めました。三年の間に彼は珈琲、葡萄酒、牛乳、卵などを食べた事は唯だの一度も御座いません。パンと栗粉團子と果物と野菜と油と水より他の物は決して口に入れませんが、彼が今日まで聖者の様な生活を送りました事は、誰も皆知つて居る事で御座います。けれども彼は自分の程の罪人は世の中に無いと信じて居ります。」

院長は考へながら、

「ふむ！ふむ、判つた！ちやが、何故我々の派に這入らぬのちやらうか？それからもう一つ聞くが、その男は寺の外で泊つて來た事が幾晩もある相ぢやの？」

ドン・クレメンテは再び顔が熱くなるのを感じた。

「それは外で祈つて居つたので御座います。」

「それはさうかも知れぬが、人によつては左様思はぬかも知れぬ。ダンテも云つて居やうがの。」

「偽の面を有てる眞は、

出來得る限り口にせぬものぞ、

汝過を犯さずとも、その眞は耻を來たさむ。」

と。

「あゝ！」

ドン・クレメンテは卑劣な疑惑を懐く事の出來る人々の心根を察して、淺猿しさに顔を赧めて、嘆聲を發した。

「氣に障つたら堪忍しなされ。何もその男が悪いと云ふのではない。唯だ外觀が面白くないと云ふだけぢや。腹を立てなされるな。併し家の中で祈る方が穩當ぢやの。時にその超自然的の出來事といふのはどんな事ぢやな？」

ドン・クレメンテは、それは幻と空から聞えた聲とであると答へた。

「ふむ！ふむ！」

院長は酢を一口嚙んだ様に、額と眉と唇とに皺を寄せて叫んだ。

「あの男の名前は何か云つたの？ 本名は？」

「ビエロといふので御座いますが、寺へ参りました時に、其名前を棄て度から、他の名を附て吳よと申しましたので、ベネデットーが一番善からうと思ひまして、それを選びました。」

此時院長は一度ベネデットーに會ひたいから、明朝朝歌席の勤行が済んでから、彼を自分の處へ寄越す様に、ドン・クレメンテに命じた。ドン・クレメンテは當惑の色を浮べて、丁度今宵は折悪しくベネデットーが祈禱に一夜を過ごす爲めに丘陵の方へ出て行つたので、何時に歸つて来るか確に判らぬ故、院長に約束する事が出来ぬと、白状せねばならなかつた。院長は不興氣に様々の非難と皮肉な言葉とを嘸嘸と吐いた。それを聞いてドン・クレメンテは心を決して、ベネデットーが以前の情婦のデサレ夫人と邂逅した事、歸途での出来事、彼をイエネへ遣つて女が此地を去るまで彼處に留まらせるに決した事等を院長に話した。老僧は絶えず口の中で低う吐きながら眉を擡めて聽いて居たが、遂に口を開いて叫んだ。

「また聖ベネディクトの昔に歸るのか！ 淫婦の尿管に！ その男を餘所へ遣れ！ 餘所へ遣れ！ 餘所へ遣れ！ イエネへでも、まだ遠くへでも！ お前は私が尋ねなかつたら云はぬ積ぢ

やつたのか？ これが何でもない事と思ふてか？ 寺の近邊でこんな私通をする事が軽い事か？

もう彼方へ行きなさい！ さあ行けと云ふに！」

ドン・クレメンテは私通などは扱て置き、女が男に氣が附いたかも知確には判らぬ。兎に角ベネデットーにはイエネへ遣る事を既に話してあると答へ様と思つたけれども、今自分を辯護する事は無益の業であると覺つたから、口を噤んで、院長の前に跪いて暇を告げた。

ドン・クレメンテは廊下へ出て、先刻の手燭を再び手に取つたが、部屋へは歸らなかつた。靜に、極めて靜に、彼は廊下の端まで歩いた。靜に、極めて靜に、折々足を止めて行みながら、小さな回り段を傳つて會議室に通ずる廊下に降りた。山上の間の中を彷徨つて居る最愛の弟子の事、彼が彼の神に祈つた後に形づくるやも知れぬ決心の豫想、同輩の竊に抱いて居る敵意、院長の不興と疑惑、彼がベネデットーを強ひて、修道院を退去するか誓約を立て、僧となるかの二つの中の一つを選ばせはしまいかといふ虞、是等の思は重くドン・クレメンテの心に覆ひかゝつた。ベネデットーの神秘的熱誠、彼の大にして而も銜はぬ謙遜、チヨヴァニ・セルヴァに源を發した所の思想に依つて見た信仰に對する彼の理解力の進歩、彼の談話の中に輝く思想の新しい光、益々強くなり行く師弟の交情の力は、ドン・クレメンテ

の心の中に、遠からぬ中に、この世の中より捨てられた者を通して、靈魂を救ふ神の恵と神の眞理と神の力が世に顯されるといふ希望を萌さしめた。今宵セルヴァの家の集會で、人々は聖者が必要であると云つた。始に是を云ひ出したのは瑞西の僧マリニエであつた。他の人々はその聖者は俗人たるを要すると云つた。自分も亦それと同意見を有つて居るので、ベネデットーが修道院生活を嫌ふ事は、神の攝理の然らしめる處の様に思はれる。またあの女が來た爲めに彼が僧院を強ひて去らなければならぬ様になつた事を思へば、宛然天意のやうにも見える。それは左様として、丘陵の上では今何事が起つて居るであらうか。神はベネデットーの心の中に何事を語り給ひつゝあるであらうか。若し――

この豫期しなかつた、恐しい「若し」は思案に暮る、彼の心の中に閃き渡つて、彼の遅い歩を止めた。「師來りて汝を呼び給ふ」或は神なる師御自身が、現在今、ベネデットーを呼んで、緇衣を身に纏つて神に仕へる事を彼に命じ給ひつゝあるかも知れぬ。

彼は恐怖に打れて思案を止めた。そして手燭を下に置いて、會議室の前を通つて禮拜堂へ這入つて、聖禮奠室の方へ足を向けた。心の嵐が如何に狂り狂ふとも、優美な態度と氣高うて美しい容貌に具はる威嚴さを失はぬ彼は、聖禮奠室の中央、四本の圓柱の間の神燈の下に

在る机の前に跪いて、神龕を仰ぎ見た。

其處に道と眞理と生命との教師、靈魂の愛人は、昔ゲネサレの湖に嵐吹き狂る夜、風波の音凄じい間の中を、波に揺られながら伴ひくる他の船を従へて、ガダラとガリラヤとの間を走る船の中に眠り給うた如くに、今宵も靜に眠り給ふ。其處に彼は、昔夫の山の上に唯一人夜祈り給うた如くに、今宵も祈り給ふ。其處に彼は永遠に亘りて響く美しい御聲を以て呼び給ふ。「凡て惱める者よ、我許に來れ。重荷を負へる者よ、我に來れ。」と。其處に彼、生ける基督は在して語り給ふ。「我汝と共に在れば我を信せよ。我は汝の力なり、我は平和也。全能者の子にして謙遜なる我、恐しき者の子にして柔和なる我、正義の王國の爲めに、將來全人類の我父に在りて我と共に一ならむ爲めに、人の心の備へを爲す我を信せよ。」彼慈愛者はその神龕の中に在つて得も云はず美しい言葉を以て招き給ふ。「いざ汝の心を我に明せよ。汝の身を我に任せよ。」と。

ドン・クレメンテは基督に心身を傾倒しつくして、己自にも明さなかつた事をも明した。彼はこの神龕の中に在す基督の他は、この古い修道院の中の物は凡て死に瀕して居ると感じた。教會組織の胚種を藏した細胞、基督者の熱情を世界に向つて發する中心點としての

修道院は、一度寄せては還らぬ年波に洗はれて化骨せんとして居る。その壁の内には、聖壇の上に燃える蠟燭の焰のやうに、傳説的形式に包まれた信仰と敬神の尊き火が、その人的外包を焦いて、眼に見えぬその氣は天に向つて蒸騰して居るが、その火は熱や光の波動を古い壁の外に少しも送らぬ。生ける空氣の流は最早修道院の中を吹き通はず、今の僧等は最早初代の僧等のやうに、それを求めて森に畑に勞働して、歌に神を讚美しながら、自然の精氣と協力する事をしない。ドン・クレメンテは、修道院生活は人の魂の中に滅すべからざる根を下して居る事を確信して居たけれども、チヨヴァニ・セルヴァと語る事に依つて、間接に且つ徐々に、修道院生活の現在の形に就て斯くの如くに感じ始むる様に導かれた。併し彼が彼の信仰を眞正面から見たのは多分今が始めてあらう。彼は随分前から、ベネテットが福音の大傳道者——徒の傳道者、説教家、懺悔僧などではなく、異常の大傳道者となり得む事、制服と紀律とに縛られて運動の自由を得ない普通の兵士ではなく、聖靈の爲めに闘ふ自由な戦士となり得む事を願ひ、また期待して居たが、修道院の戒律が現代の聖徒に就ての自分の理想と今宵ほど烈しく抵觸して居るやうに思はれた事はない。けれども今、若しベネテットに就て神の聖旨が自分の願望と反對に顯されたならば如何であらう？

嗚呼！彼は今既に死を以て罰すべき罪の淵に臨んで居たではないか！彼は塵泥の身の鳥澁がましくも將に神の所爲を批判せむとして居たではないか！彼は膝臺の上に平伏して、無言の中に神の宥恕を乞ひ、神の聖旨がベネテットに示されし事を祈り、其聖旨が如何なる事なりとも、今より後それを崇めむと心を定めて、自分の魂を全能者の中に没入せむと努めた。躓て立上つた時に、彼の心から神秘的情緒の潮は當然退き始めて居たが、彼の眼は猶聖壇の方を見た。けれども最早神靈を凝視めなかつた。そしてジャン・テサレの事とベネテットーの言葉を想はずには居られなかつた。聖壇の上には、殉教者アナトリアが、嘗て自分を唆かさうとして、却て自分の導きに由つて基督に歸した異教徒の青年アウドックスに、天國から手を伸べて勝利の象徴たる棕櫚を與へんとして居る光景を描いた、下手な繪が掲げてあつた。ジャン・テサレはベネテットを唆かした。ベネテットーはかの女に罪は無いとして、自分に罪を歸せんと試みたけれども、ドン・クレメンテは女に罪があつた事を疑はなかつた。今若し夫の女がベネテットーの教に由つて改心したならば如何であらう？ベネテットーが其事を試みても宜いであらうか。ベネテットーの感情は自分の心配と院長の狐疑よりも實際に基督者に相應しい事であらうか。彼が頭を垂れて禮拜堂を通り過ぎた時に、彼の心

は之等の問題の解決を見出さんとして努力して居た。噫アナトリアとアウドックス！彼は曾て一人の不信仰な外國人が自分の口からこの繪の説明を聞いて云つた言葉を想起した。「成程、併し二人とも殺されなかつたら如何でせう？若しアウドックスに妻があつたら如何なつたでせう？」ドン・クレメンテはその戯談を聞いたときに、蔑むべき不敬の言だと思つたが、今又それを想ひ起して、歎息を洩しながら、會議室の床に残して置いた手燭を取り上げた。彼は自分の部屋の方へ行かずに、第二の廻廊へ曲つて、ベネテットが今多分祈つて居るかも知れぬと思はれるコレ・ルンゴの頂を眺めた。所々黒い處の見える灰色の岩山の頂に星が二つ三つ煌いて居た。その微かな光に照らされて廻廊の庭、所々に生えて居る灌木、アパテ・ウムベルトの大塔、廊下の弓状柱、九百年の昔から立つて居る古い塙、今ドン・クレメンテが思に沈んで立ち盡して居る頭の上の、大なる門の弓状柱の上を、二列に並んで昇つて行く僧侶の小さな石像が朦朧と眼前に現れた。廻廊と塔とは闇の中に嚴然として際立つて居た。この廻廊や塔は實際死に瀕して居るのであらうか。修道院は晝間日の光に照らされて居る時よりも、今星の光に照らされて星と神秘的な宗教的の交通をする時の方が、偉大に、生々として居る様に見える。然り、修道院は生きて居る。恰も種々様々の磨かれ、彫まれた石が集つて、

の一つの寺院を成すが如く、また人の良心の中に種々様々の思想や感情のあるが如くに、多くの異つた靈的潮流がこの唯だ一つの存在物の中に混亂して孕まれて居る。愛に導かれて此處に來た人々を宿し、聖い渴望と聖い非哀と、歎聲と祈禱とが深く浸み込んだこの古い石壁は、人の潜在意識に透徹する處の朦朧とした或る物を放射する。この石壁は、清い泉が淋しい丘陵の上に働く收穫者の身に力を注入するが如くに靈の渴に堪へ兼ねて、世を遁れて此壁の中に短い休息を求める神の働きの裏に力を注ぎ入れる能力を有つて居る。併しながら、この石壁の生命を永續させる爲めには、神を拜し冥想を樂しむ靈の不斷の活きた河がその中を貫流せねばならぬ。ドン・クレメンテは先刻禮拜堂の中で修道院の老衰なごいふ考——自分一個の判断から生じて、自分の自尊心を満足させる考、豫て自分の愛する神秘家に、是を識別して憎めよと教へられて居た所の傲慢の精神に汚された考——を心に宿した事を想つて悔恨に似た或る情を感じた。彼は双手を組んで、荒涼たる丘の頂を見詰めたが、彼處に祈つて居るベネテットの姿を心に畫いた。そして、無言の中に神の聖旨に従つて、弟子の未來に就て自分の抱いて居る願望を抛つ決心をした。彼は、神が彼を俗人の儘に置く事を欲し給ふとも、また彼を僧とする事を欲し給ふとも、等しく神を讚美せんと欲した。彼は、神が

聖旨を示し給ふことも、聖旨が顯されずとも、同じく神を讃美せんと欲した。

「汝若し光の中に我が住む事を望み給は、汝は讀むべきかな。汝若し闇の中に我が住む事を望み給ふとも亦汝は讀むべきかな。」聽て彼は彼の部屋を指して歩を運んだ。

二つの薄暗いランプが未だ點つて居る廣い廊下を傳つて、院長の室の前まで来たときに、彼は夫の老僧との會話、教會を惱せて居る弊害及びこの弊害に反抗する事の愚に就ての彼の格言を想つた。彼は又、「汝の聖旨を成し給へ。」といふ言葉に就て曾てチヨヴァニ・セルヴァの語つた事、即ち、信者の大多數はこの言葉を單に服従を意味するものとのみ思つて居るが、實際は、人類の自由の戰場に於て神の律法が勝を占める爲めに、全力を盡して働くべき義務を指し示して居るものだ、といふ事を想ひ起した。チヨヴァニは彼の心臓の鼓動を早めたが、院長はその鼓動を遅くした。生命と眞理との言葉を語つた者は孰であつたらう？

彼の部屋は廊下の右側の端の室で、スピアコの町と、サヒナ山々、アニオ川に潤される貝殻形の地を見渡す椽側に近かつた。ドン・クレメンテは部屋に這入る前に歩を止て、遠いスピアコの燈火を眺めた。そして、スピアコよりは近いが、闇に包まれて見えぬあの小

な赤い別荘と、あの女の事とを想つた。「私通」と院長は云つたが、女は今も猶ビエロ・マイロニを戀うて居るであらうか。彼女は男がサンタ・スコラステイカに隱家を求めた事を探り出して此處に居ることを知つて居るのであらうか。今夜ベネテットに氣が附いたであらうか。若し氣が附いたならば、如何する積であらう？セルヴァの家は大層狭いから、彼女は彼處で泊らすに何處かスピアコの旅館に居るかも知れぬ。あの遠い燈火は敵陣に燃える篝火であらうか。ドン・クレメンテは十字を畫いた。そして頌歌席の勤行の時刻の二時まで、短い休息を求めたためにその狭い部屋に這入つた。

ベネテットはサクロ・スペコへ行く道を取つた。修道院の彼方の角を通り過ぎて、水の涸れた小川の川床を越えて、餘程昔からあるサンタ・クロチメラ禮拜堂を右に見る處へ来た。そして星の冠を戴いて絶頂に立つ十字架まで、眞直に黒く屹立するフランコラノ山の四手樹の森に面して、水音高く流れるアニオ川の方に時々石塊を轉落す凹凸の烈しい坂を昇り始めた。サクロ・スペコの森の入口に在る弓門の手前で道を離れて、サンタ・スコラステイカの四角な屋根と低い塔の遙上の、此前に一夜を祈り明した場所を捜しながら、左の方へ攀ち

た。悲哀に満ちし先の夜に跪いて祈つたその石を捜す事は、彼を包んだ神秘的熱情から彼の心を迷はせて、その熱を冷した。聽て彼はそれと氣がついて、烈しい後悔の念と、熱情の焔を再び燃さうと焦る心に襲はれた。この焦心は、再び焔を燃す事が出来ぬかも知れぬといふ心配と、情が冷えたのは自分の越度であると感ずる事と、又以前に聖い感情の涸渇した時の追憶とに依つて、更に強められた。彼の感情は冷えて来た。益々冷えて来た。彼は堪へ兼ねて不意に跪きさま、神の佑を呼び求めた。生木の束を小な焔で燃さうとする事が無益である如く、彼の意志のこの努力は沈滞した心を動かす事が出来ずに、漸々弱くなつて、遂に死んだ。さうして彼は惘然としてアノ川の單調な水音に耳を傾けた。聽て我に歸ると、恐怖の念が急に彼を襲つた。多分終夜この様な状態を持続するのも知れぬ。聖い感情の涸渇したこの冷な状態に次で熱烈な誘惑が来るかも知れぬ！彼は烈しい想像の騒ぐ聲を押し鎮めて、思想を集中して、決して勇氣を沮喪せぬ様にと決心した。彼は自分に敵する靈が自分を虜にしたと今確信した。縦し近くの岩の割目から悪魔の爛々たる眼が彼を窺つて居るのを實際目撃しても、彼の確信は是以上に強くなつたらう。彼は心の中に毒氣の漲るのを感じた。彼は凡ての愛と凡ての悲とを失つた事を感じた。彼は疲労と、強い壓力と、再び醒むる事

なき睡氣の近附のを感じた。再び彼は惘然として川の水音に耳を傾けながら、フランコラノの暗い森を曇つた眼で熟と眺めた。あの山に昔多くの淫婦と供に住居た悪僧の姿が、徐々に、自動的に、彼の心眼の前を通つた。彼は疲労の爲に跪いて居る事に堪へられなくなつて、地に仆れた。再び彼は知覺の鈍い自動人形になつた。苦しいのを忍んで彼は漸く身を起して、石塊の間から萌え出た柔な好い香のする草の房々と茂つた上に手を衝いた。その草の柔かな手觸と、香と、休息との快さを樂しみながら眼を閉ぢると、羽毛で飾つた黒い帽子の縁の垂れた下で蒼白く見える顔に笑を含んで、涙に濡れた眼で彼を眺めて居るジアンが見えた。彼の動悸は速く、速く、益々速く打ち出した。その顔の招に應じて、その傍に赴く坂路を駆け降りやうとする足を繋ぎ止めて居るものは、唯だ僅に一筋の意志の力の糸であつた。大きく眼を睜つて、兩腕を伸して、双手を擴げて、彼は長い呻き聲を洩した。そして不意に誰か道を行く人がその聲を聞きはしなかつたかと心配して、息を殺して耳を敏てた。……沈黙。——川の他は萬物聲を收めて沈黙を守つて居た。彼の心は稍靜になつて来た。彼は自分が陥つた所の危険と、自分が越えた所の深淵とを顧みて、恐怖に打たれて、「我神！我神！」と呟いた。彼の眼と彼の魂とは、脚下遙に蹲る大な、聖い、四角な修道院と、彼の愛す

る優しさうな、その低い塔ごとに、懐しさうに縋りついた。彼の心は影と屋根とを通り抜けて、禮拜堂と、火の點つた神燈と、神龕と、聖餐を見た。彼は聖餐を饑えた眼色を以て眺めた。彼は無理に心を凝して、廻廊や、僧侶の部屋や、その中の寢臺の近くに在る大十字架や、天使の顔の様な自分の師の寝顔を胸の中に畫いた。彼はあの縁に垂れ下つた、羽毛で飾つた帽子と蒼白い顔とが、屢心の中に閃き渡るのを、魂を惱ませながら抑へ抑へて、出来るだけ長く努めて思を修道院の中に馳せたが、遂にその閃は次第に薄れて、魂の何處とも知れぬ深所に消え込んで仕舞つた。それから彼は力無く立ち上つて、徐に、恰も彼の一舉一動が大なる威嚴の自覺に支配せられて居るが如く徐に、兩手を組んで、其上に顔を乗せた。彼は「基督の模倣」の中の祈禱に思想を集中した。「主よ、僕の意常に正しく堅く主の方にあり得む爲に、主の喜び給ふ事を何事にまれ僕に爲し給へ」彼の心は最早騒がすなつた。悪魔は既に彼を離れ去つたが、天使は未だ彼の身に宿らない様に思はれた。彼の疲れ果てた心は靜に外部の物——靡げな物の形、影の中の白い點、遠い四手樹の森で啼く鳥の聲、兩手に残つて居る幽な草の香——などに繋がれた。其の草の香は彼の眼前にジャンの悲し氣な微笑が現れた前に、彼が草に手を衝いた事を思ひ浮ばせた。彼は奮然として組合はせて居た手を解いて、饑

ゑた眼を修道院の方に向けた。否、否、神は自分が誘惑に敗ける事を許し給はぬであらう！神はその聖業を成さしめむ爲めに自分を選び給うたのである。此時、彼がサンタ・スコラスティカへ來てから師の勸告に従つて、一度も心に見浮べやうと爲なかつた光景——彼がドゥン・チウセツペ・フロレスに書き遺して置いた夫の幻の光景——が、呼びもせぬに自ら魂の底から現れ出た。

彼は今しも羅馬の聖彼得寺院の廣場で、月に照らされた大伽藍の前面と方尖塔との間の地に跪いて居る。廣場には人影一つ見えなかつた。ベネテットの耳にはアネオ川の水音が噴水の音と聞做された。纏て赤や紫や黒い衣服を纏つた一群の人が寺院の戸口を出て、階段の上に止つた。彼等はこの聖所を立去れよと彼に命するが如く、サンタンゼロ城の方を食指で指しながら、彼を注視した。併し、今は最早あの幻の回想ではなく、新しい想像を描いて居るのであつた。彼は毅然としてこの敵の前に直立して居た。突然、後の方に、近傍の街衢から續々廣場の中へ足早に流れ込んで來る群集の轟が聞えた。人の波が彼を押し流して、是こそ教會の改革者、基督の眞の代理人なれと宣言しながら、寺院の入口に彼を立たせた。其處で彼は將にこの世界大の權威を自主張せむとするが如くに、群集の方を向いた。この

剌那に、悪魔が世界の諸王国を興へむと基督を誘つた事が、彼の心に閃き渡つた。彼は岩の上に俯に仆れて心の中に呻き叫んだ。

「耶蘇よ、耶蘇よ、我には汝が誘はれ給ひし如くに誘はるゝ價値あらず！」彼は堅く閉ぢた唇を石に押し當て、物言はぬ被造物の中に神を求めた。噫神よ！神よ！靈魂の願望、靈魂の生命、靈魂の熱き平和よ！一陣の風が彼の身を吹いて、周囲の草を動かした。彼は呻いた。

「こは汝なる乎？こは汝なる乎？こは汝なる乎？」

風は黙して答へなかつた。

ベネテットは握り詰めた手を頬に押し當て、頭を上げ、岩に腕を衝いて、何はともなく耳を澄まして聽入つた。彼は歎息を吐きながら、身を起して地に坐つた。

神は彼に語り給はぬ。彼の疲れた魂は思に洩れて、黙して居る。時の歩は這ふ様に遅い。疲れた魂は元氣を回復しやうとして、夫の幻の最後の光景、魂が天降る天使に出會ふ爲めに、嵐吹き猛る夜の空を翔る状を回想しやうと努めた。そして彼は臍氣に思ひ廻らした。斯の様な運命が自分を待つならば、自分は何しに怒み悶えやう。假令誘惑に遇ふとも、自分は敗けぬであらう。縦し敗けても、神は再び自分を扶け起し給ふであらう。又、自分の身の上にて神の聖旨が如何であるかも問ふ必要はないのだ。何故降りて寝ないで、此處にぐすくして居るのか？」

ベネテットは立上つたが、彼の頭は鉛の様に重い疲勞に壓せられて居た。アニオ川の上流の谿が屈曲する邊に連なるイエネの丘陵に至るまで、空は一面に深い雲に蔽はれて居た。ベネテットには向のフランコラノ山の黒い影も、脚下の鉛色の岩山も見別る事が殆ど出来なかつた。彼は降り始めたが、二三歩行つて立ち止つた。彼の脚は躊躇して體を支へる事が出来ず、血液は上昇して彼の顔を燃した。彼は今日正午にパンを少し食た他は、三十時間程何も口に入れて居ない。彼は今幾萬とも知れぬ多くの針で體を刺される様に感じた。彼は心臓が激烈に鼓動するとき、精神が曇り始めるのを感じた。

罪の無い草に身を扮して、自分の足の周圍に纏れ絡むこの蛇は何であらう？灌木の姿を装つて、そら、其處の岩の上に四つ這ひに蹲つて、自分の來るのを待つて跳び懸らうとする、あの悪魔は何であらう？修道院にも亦鬼共が自分の歸りを待ち構へて居るではないか。彼等はあの大きな塔の窓に潜んで居るではないか。あの窓に黒い煙が燃えて居るではないか。否、

否、今は燃えて居ない。

今はあの窓は、半ば閉ちて人を嘲る眼の様に、自分を睨んで居る。あの音はアオ川の水音か？否、それよりも寧ろ勝ち誇る無限の淵の咆吼であらう。ベネテットーは見るもの聞くもの凡てを信じなかつた。けれども、彼は慄うた。風に揺らる、藁のやうに慄うた。そして幾萬とも知れぬ針が彼の全身を覆うて動き廻つて居た。彼は足を蛇の絡み合から抜かうとしたが、力及ばなかつた。恐怖は今や忿怒と變つた。「これ位の事が出来ぬ筈はない！」と彼は大聲に叫んだ。暗憺たるイエネの谿から雷の太い聲が彼に應へた。彼は音のした方向を眺めた。電光一閃雲を撃いて、漆黒のプレクラロ山の上に消えた。ベネテットーは再び蛇の間から足を抜かうとした。此時再び獅子の吼える様な雷鳴が彼を感嚇した。

「私は何をして居るのか知ら。何故私は降りたいのか。」

彼は己に問うて、考へてみた。彼は最早譯が解らなくなつて、理由を思ひ出す爲めに心の中に努力せねばならなかつた。あゝ左様だつた！天國に入る確信のある者には祈禱の必要が無いから、自分は降りて寝やうと思案を定めたのではないか。此時、彼の周圍に煌く電光のやうに、この一事が彼の裏に煌いた。

「私は神を試みて居るのだ！」

蛇は彼の足を一層緊く締めた。悪鬼は悍猛な元氣に充ちて、毒々しい形相凄じく、四つ這ひの儘、彼を目掛けて岩山の坂を昇つて來た。黒い煙は大きな塔の窓で炎々と燃え始めた。無限の淵は絶えず勝ち誇つて吼え狂つた。此時、雲の中に王者のやうな威嚴のある雷の聲が轟き渡つた。「汝、主なる汝の神を試むべからず！」ベネテットーは天を仰いで、組み合はせて手を伸べて、曇つた知覺の將に消えなむとする光を振り起しつゝ、出來得る限り心を籠めて神に祈つた。身を反らしつゝ、兩腕を擴げて虚空を掴んだ。徐々に仰反つて丘の斜面に仆れた。そしてその儘動かなくなつた。

激しい雷雨に曝されて少しも動かぬ彼の體は、根扱にされた樹のやうに、風に靡く刺鷹瓜と草の中に横はつて居た。彼の靈は至高永遠の存在者と接觸して、その印を受けたのであらう、彼は知覺を回復したときに、時處の觀念を全く失つて居た。彼の四肢は奇妙に軽く、彼は身體の疲勞による一種の快感を覺えた。そして彼の心には限りも無く甘美な情が漲つた。空氣中に浮游する、愛情のある、生きた極微分子が靜に彼を撲つて居るのか、彼は始に顔の上に、

次に手の上に、無数の何物か、軽く觸るのを感じた。彼は自分の寢床と思はれる處の周圍に、弱い聲が幽に吐くのを聴いた。彼は身を起して、惘然としては居るが心持は穩に、四邊を見廻した。彼は時處の觀念を失つて居たが、而も心は全く平和に、そして心の中に靜に湧いて、彼の身に漲る靡げな愛の泉は、四邊の事物の上や、彼の周圍にあつて與へられたる愛に報ゆる處ある愛らしい小な生物の上にも溢れて、満足を彼の心に満した。雖て彼は此處は何處で、自分は如何して此處に居るかを思ひ出して自分の今までの惑を笑つた。けれども今が何時であるかはどうしても解らなかつた。又知りたくも思はなかつた。彼は自分が仆れてから幾時間経つたのか、或は何分間過ぎたのかを、自問はむごもしなかつた。彼は祝福多き現在に斯くも満足して居たのであつた。嵐は既に羅馬の方へ渦巻き去つた。風無き空から深沈に降る雨の音の中に、アネオ川の轟の中に、嵐過ぎて元に復つた山々の威嚴の中に、雨に濡れた岩山の草木の香の中に、自分の心の中に、ベネデットは樂園の目に見えぬ幸の原素なる、神の或物が被造物と混つて居る事を感じた。彼は、恰も小な一つの聲が大なる合唱隊の歌に混るやうに、自分が萬物の靈と混つて居る事を感じた。自分が快い香を發する丘と一であり、祝福せられた空氣と一である事を感じた。斯く天國の如き歡喜の海に深く沈められて、

双手を膝に、兩眼を半ば閉ぢて、靜な、靜な雨に慰められながら、彼は歡樂に耽つた。併し彼は、信仰の無い人等も、愛のない人等も、亦等しく此様な喜悅を味ふ事が出来ればよいがと、思ふともなく思つた。彼の歡喜が漸く衰へて來るに連れて、彼の心は再び自分が夜の闇に包まれて此寂しい丘へ來た理由、明日は他人も我も如何になり行くかといふ心配、ジアンノの事、自分が修道院を去らねばならぬ事などを思ひ出した。併し今は彼の魂は神に歸を下して居たから、恰も嚴然として搖がぬフランコラノ山がその身に纏ふ木葉の衣の微動を意に介せぬ如くに、心配や疑惑を意に介さなかつた。神が自分を如何に處置し給ふとも、自己を棄て、その聖旨に従はうと、深く決して居る彼の心からは、心配も、疑惑も、神秘的な幻の記憶も、影を隠した。ジアンノの姿さへ、今誘惑の手の届かぬ高い塔の頂上からは是を見れば、唯だ彼女の益となる爲めに兄弟の情を以て働く願望を彼の心の中に呼び起すのみであつた。冷靜な判斷力が全くその權能を回復したときに、彼は雨が彼の衣服を全く濡して、今猶しとく降つて居る事を見た。如何しやうか知らず今頃巡禮の宿坊へ歸つて行けば、牧牛者は寢て居るであらうし、呼び起して戸を開けさせるのは氣の毒でもあり、又中々容易に這入れさうにも思はれぬから、歸ることは出来ない。其處で彼はサクロ・スペコの櫛の樹の緑の木蔭で雨

を渡がうと決心して、力なく立ち上ると眩暈がした。暫時静にして居て、それから、極めて徐々に、修道院から櫓の森の入口に在る弓門へ行く徑の方へ、降りて行つた。そして、山腹に立つて幹を曲げて枝を張り擴ろげた、四時色の變らぬ大な櫓の木の森の暗い蔭、右手の弓門の彼方の坂の薄明と、左手の森の前の坂の薄明りとこの間の地に、彼は疲れ果てた體を横たへた。彼は餓を感じたけれども、敢て神に食を求めなかつた。それは奇蹟を求めると同じであるからであつた。彼は夜明を待つ覺悟をした。空氣は暖で、地は殆ど濡れて居なかつた。大な雫が櫓の葉から少し許り此處彼處に落ちた。ベネデットはうとうとと眠つた。其眠は極めて軽く、殆ど彼の感覺を鈍らさぬ位で、彼の感覺を變じて夢とした。彼は祈禱と平和に充ちた安全な隱所で、頭の上に擴げられた聖い腕の蔭に居ると夢みた。そして彼には或る理由があつてこの隱所を去らねばならぬ様に思はれた。如何しても去らねばならぬ事は解つて居るが、何故去らねばならぬかは解らなかつた。世間へ降りる道に面した戸口からも外へ出られるし、それと反對の戸口を潜つて寂しい聖地へ昇る道へも出られる。彼は心を決し兼ねて踟躕つた。此時手近の地へ大な雫が落ちて彼の眼を覺した。彼は霎時間然として居たが、遽て、修道院とスピアコと羅馬の方へ降りて行く道の端に立つて居る、右手の弓門と、サクロ・

スベコの方へ爪先上りに行く左手の徑を認めた。彼は、右も左も、櫓の森の外の禿げた岩が以前よりも餘程白く見えて、頭の上の葉越しに細い光線が幾筋も映すのに氣が附いて驚いた。夜明か？もう夜明なのだらうか？ベネデットは未だ十二時少し過ぎた位だと思つて居た。サンタ・スコラステイカで鐘が鳴る——一つ、二つ、三つ、四つ。矢張朝だ。雨は最早止んだから、スピアコの丘陵からイエネの丘陵まで空一面が深い雲でなかつたなら、もつと明るいのであらう。遠くに聲音がする、誰か弓門の方へ昇つて来る。

昇つて来たのは修道院の牧牛者で、何か特別の理由があつて、例に無くこの様に早く、サクロ・スベコへ牛乳を持つて行く途中であつた。ベネデットは彼に聲を掛けた。その男は飛び上らぬばかりに驚いて、今少しで牛乳の壺を落す處であつた。

「やあ、ベネデ！此處に居さつしやつたか？」

と彼はベネデットを認めて叫んだ。

ベネデットは後生だから乳を少し飲ませて呉れよと云つた。

「寺の衆に然云つて下され。私が大層弱つて居て、後生だから少し乳を飲ませて呉れろと云つたと、皆の衆に云つて下されば宜い。」

「左様ぢや！左様ぢや！宜いとも！宜いとも！さあ、飲まつしやれ！」

その男はベネットーが聖者であると信じて居たから、斯う叫んだ。

「したが、お前さんは夜通し此處に居さつしやつたか。あの土砂降の最中に？こりや如何ぢや！お前さんの濡れ様は！宛然海綿のやうにびつしよりぢやわ！」

ベネットーは乳を飲んだ。

「私はお前さんの深切と、乳を與へて下さつた事を神様に感謝します。」

彼はその男を抱いた。牧牛者ナツツアレノ・メルクリは其後久しい間常に人に語つた。彼がベネットーに抱かれて居た間は、自分が自分でない様に思はれて、身體の血が始は氷のやうになり、それから火のやうになつて、心臓が始めて聖餐の中に基督を受けた時のやうに烈しく、烈しく鼓動して、二日前から苦しんで居た酷い頭痛が急にけろりと癒つたので、其時自分は、奇蹟を行ふ聖者に抱かれて居るのだといふ事を覺つて、その足下に跪いたと併し實際は跪いたのではなく、化石した人の様に突立つて、ベネットーが二度も「さあ、ナツツアレノ、もう宜しい。行きなさい。」と云ふまで動かかなかつたのである。ベネットーはサクロ・スペコへ行く牧牛者を見送つてから、自分はサンタ・スコラステイカの方へ歩き出した。

た。

夜が明けて見れば、岩山には善惡ともに魔などは居なかつた。山も、雲も、修道院の暗い壁も、又あの塔さへも、蒼白い曉の光を受けて、睡さうに見えた。ベネットーは宿坊へ這入つて、濡れた衣服を脱ぎもせず、寢床の上に體を伸して、胸の上に腕を組んで、深い眠に入つた。

第四章 顔と顔

(其一)

二時少し過ぎて、雷の音がノエミの眼を覺した。彼女は今し方寝入った許りであつたのだ。彼女の部屋はジアンのと隣合はせて、間の扉は開け放してあつた。ジアンは直ノエミに話し掛けた。二人は二時が鳴るまで話し續けて居たが、ノエミは疲れ果て、幾度も幾度も口を酸くして勸めた末、漸く友の疲れぬ口を嚙ませる事が出来たのであつた。扱て、ノエミは友の聲を聞かぬ風をして居たので、ジアンは再び呼び掛けた。

「ノエミさん！ 酷い雷ね！ 妾恐しくつてならないわ！」

「ちつとも恐しくない癖に！ 黙つてお眠みなさいよ！」

とノエミは痾癢聲で答へた。

「妾恐しくつてならないわ！ 貴女の部屋へ行きますよ。」

「いけませんよ！」

「ちや此方へいらつしやいな！」

ノエミの「黙つてゐらつしやいつてば！」と云ふ聲が決然と響いたので、ジアンは黙つた。けれども、黙つて居たのは唯だ僅の間で、聽て、ノエミの聞き馴れた、小供の様な涙聲がまた始まつた。

「もう大分寝たのぢやなくつて！ 話してはいけないの？ 先刻から屹度三時間は寝なすつてよ！」

ノエミは憐寸を摺つて、先程ジアンを黙らせた時にも手に取つた、その懐中時計を見た。

「二十二分よ！ 静にしてゐらつしやい！」

ジアンは暫時黙つて居たが、間もなく、駄々つ兒の涙の先觸をする例の低いフム！フム！フム！が聞えて、それから恨めしさうな聲で、

「貴女は妾の事なんかちつとも思つて呉れないんだわ！ フム！フム！後生だから少し話して下さいな！ フム！フム！フム！」

ノエミは自國語で歎息を洩した。

「噫！ 厭になつてしまふ！」

彼女は今一度歎息して、避けられぬ運命に服従した。

「ちやお話(はな)しなさいよ！けれども話(はな)す事(こと)はもう先刻(さつこ)から四時間(じゅうしじかん)もかゝつてすつかり話(はな)して仕舞(しま)つたぢやありませんか。」

雷(かみなり)がまた鳴(な)つた。けれどもジャンは最早(もはや)それに氣(き)がつかぬ。

「明日(あした)の朝(あさ)一緒に修道院(しゅうどういん)へ行きませうね。」

「解(わか)つてますよ！」

「貴方(あなた)と妾(めかけ)と二人(ふたり)だけでよ！」

「左様(さやう)よ。もう定まつてるぢやありませんか。」

涙聲(なみだごゑ)は暫時(しばらく)跡切(あとぎ)れて、又續(またつづ)いた。

「貴女(あなた)は此處(こゝ)の家(うち)で何も話(はな)さないつて、未だ約束(やくそく)しないでせう。」

「もう十遍(じゅうべん)許(ゆる)り約束(やくそく)してよ！」

「何故(なぜ)昨夜(よる)妾(めかけ)が倒(たふ)れかけたのかと尋(たず)ねられたら、貴女(あなた)は如何(どう)返事(へんじ)するんだか解(わか)つて、？ 解(わか)つてるでせう？」

「解(わか)つてますよ！」

「あの坊(ぼく)さんはあの人(ひと)ぢやないつて云(い)ふんですよ。だから妾(めかけ)は失望(しつぱう)して、それで眩暈(めまい)がし

たんだつて。」

「解(わか)つてよ、ジャンさん！その事(こと)なら是(これ)で二十遍(じゅうべん)も聞いてよ！」

「酷(ひど)いわ！ノエミさん！貴女(あなた)は妾(めかけ)の事(こと)をちつとも思(おも)つて呉(くれ)れないんだもの！」

沈黙(ちんもく)。

ジャンの聲(こゑ)が又始(またはじ)まつた。

「貴女(あなた)は如何(どう)思(おも)つて？ 貴女(あなた)は本當(ほんとう)にあの人(ひと)が妾(めかけ)を忘(わす)れて仕舞(しま)つたと思(おも)つて？」

「その事(こと)ならもう返事(へんじ)しません！」

「後生(ごせい)だから返事(へんじ)をして下さいな！ たつた一言(ひとこと)で宜(い)いのよ。そしたら寝(ね)させて上げますよ

！

ノエミは一才(いちさい)考(かんが)へて、そつけ無(な)い返事(へんじ)をした。ジャンを黙(だま)らせやうと思(おも)つたからである。

「妾(めかけ)はあの人(ひと)はもう貴女(あなた)を忘(わす)れて仕舞(しま)つてると思(おも)つてよ。始(はじめ)つから貴女(あなた)を愛(あい)してたのぢや

ありますまいよ。」

「妾(めかけ)が貴女(あなた)に左様(さやう)云(い)つたから、貴女(あなた)は左様(さやう)云(い)ふんでせう！ 貴女(あなた)にそんな事(こと)が解(わか)るもんか

！

「ジャンは最早涙聲を止めて、語勢烈しく反駁した。」

「おやまあ！自分が妾に左様云つた癖に！妾の知つた事ぢやない！」

とノエミは佛蘭西語で呟いた。

再び沈黙。

「ノエミさん！」

とまた涙聲。

答が無い。

「ノエミさん！あのね——」

未だ返事が無い。到頭ジャンが泣き出したので、ノエミは降参した。

「本當に仕様の無い人ねえ！今度は如何したつて云ふの？」

「あの人は妾の良人の亡くなつた事を知つてる筈がないわね。」

「さあ、それが如何したの？」

「左様だと、妾が自由な體になつた事もあの人は知らないわ。」

「それが如何して？貴女は本當に無神経ね！妾は腹が立つて来るわ！」

沈黙。ジャンはノエミの腹立の性質をよく知つて居た。ノエミの確信は自分の確信に似過ぎる程よく似て居たので、彼女はノエミに自分の悲しい豫想に反對して貰ひ度かつた。希望の一言を聞かせて欲しかつた。

彼女は無理に低い聲で笑つた。

「ノエミさん、貴女は話をせずに居やうと思つて、態と怒つた風をしてるんでせう。」

沈黙。

ジャンは大に優しい調子で。

「あのね、貴女はあの人がいろんな誘惑に遇つてると思はなくつて？」

沈黙。

ジャンは、今度はノエミが返事をしなかつた事にも構はず、叫んだ。

「あの人が今誘惑に苦しめられなくなつたら、本當に善いのにねえ！」

ノエミは甚だ厭な心地がしたけれども、ジャンの諷刺が餘り滑稽だつたので、笑はずに居れなかつた。ジャンも友と聲を合はせて笑つた。ノエミは可笑しくつて笑ひながらも、ジャン

がこんな馬鹿氣た事を考へてみせせずに軽々しく口にした事を叱つた。ノエミは友の爲人を

がこんな馬鹿氣た事を考へてみせせずに軽々しく口にした事を叱つた。ノエミは友の爲人を

がこんな馬鹿氣た事を考へてみせせずに軽々しく口にした事を叱つた。ノエミは友の爲人を

知つて居たから、今夜のジアンは、自若として感情を外に表さぬ眞のジアンではない、或は寧ろこの方が眞のジアンであるかも知れぬが、兎に角、萬一ピエロ・マイロニに邂逅する事があれば、その前に立つ時のジアンではない、と信じて居た。

雷が止んだから、ジアンは空模様を見たいと思つたが、起きると気分が又悪くなるかも知れぬ。今から数時間後には修道院へ行く積で居るのに、如何しても行けぬといふ事を發見するかも知れぬと思つと、恐ろしくて寢床を離れられなかつた。餘り天氣が悪いとセルヴァ夫婦が外出を留めるかも知れぬから、それも心配であつた。それ故彼女は雲行を見度かつた。で、時々謀叛を企てるが滅多に勝つた例の無い奴隷のノエミが、厭でも起きねばならなかつた。ノエミは寢床を出て、窓を開けて、手を伸して闇の中を調べて見た。小さな雫が澤山掌を擦つた。彼女の眼が闇に馴れて来るに連れて、段々四邊が明るみえた。遙下に、サンタ・マリア・テラ・フェアレの堂が、黒い背景を控へて鼠色に立つて居た。深い霧の一面が明る成つて、右手に聳える樅の木が黒く際立つた。頭に落ちる小さな雫は、外に突き出して居た彼女の手を猶擦つた。遂に彼女は手を引き込めた。

「如何？」

とジアンが尋ねた。

「降つて、よ。」

「困つたわねえ！」

永久に雨が降り積くと思つたかの様に、ジアンは歎息を吐いた。小さな雫は前よりも聲を高めて、その静な囁を室に満たしたが、暫時して又聲を収めた。ジアンはその静なさ、やきを解さなかつた。自分の心を占めて居るあの男が、雨に洗はれて居る寂しい岩山の中腹に、悶絶して仆れて居る事を知らなかつた。

翌朝客が二人とも遅くまで起きて来なかつたので、セルヴァ夫人は少し氣掛りに思つて、静に妹の部屋に這入つた。ノエミは大方化粧を済ませて居て、姉に黙つて居よと手眞似で示した。ジアンは到頭寢入つたのであつた。姉妹は一緒に部屋を出て、チヨヴァニが待つて居る書齋へ行つた。如何なの？ 矢張りドン・クレメンテが夫の男だつたの？ 夫婦はノエミの話の如何によつて、如何にか取るべき手段を定めねばならぬから、壘み掛けて問うた。チヨヴァニは最早疑つて居なかつたが、妻は今尙迷つて居た。さあ、ノエミ！ ノエミは知つて居

るに違ひない！チヨヴァニは書齋の戸を閉ぢた。マリアは妹が黙つて居るのは、自分等の推察の當つた爲めと解釋して、繰り返し、繰り返し問うた。

「ちや矢張あの人だつたの？ 矢張あの人？」

ノエミは黙つて居た。彼女はセルヴァ夫婦が自分に同意せぬかも知れぬといふ疑と、衷心の躊躇の念とに制せられなかつたならば、多分今姉夫婦にジアン secretes 打明けて、彼等と心を合せて友の幸福を計らうとしたかも知れぬ。セルヴァ夫婦はカトリック教徒の立場から、一旦世を離れたこの男が再び世に還る事を望まないであらう。ノエミは新教徒であるから、その様に感ずる事は出来ぬ、尠くともその様に感じてはならぬ。彼女は寧ろ、人は世の中に出て、妻を有つて、神に仕へる方が、善く仕へられると、信せねばならぬ。彼女は然思つた。けれども、若しマイロニが今ジアンと結婚するならば、彼女はマイロニに對して敬意を拂ふ事が出来ぬといふ感を抱かすには居られなかつた。兎に角、この出来事の奇妙な真相を話さずには置く方が策の當を得たものであらう。

「貴方がたは如何お思ひになつて？ 昨夜此處へ來なすつて、そして貴方がたがいろんな狂言をお書きなすつた甲斐なく、妾等の眞前を通つて行つた坊さんが、實際に昔の戀人だつたと思つてゐらつしやるの？ あの方が例のドン・クレメンテつていふ人ですか？ それちや、あの人ちやありません。」

「え！ 實際にですか？」

とチヨヴァニは驚と疑と相半して叫んだ。

「そら御覽なさい！」

と妻は勢誇つて云つた。

けれどもチヨヴァニは屈しなかつた。彼はノエミに屹度その言葉の通りに違ひないか、テサレ夫人の眩暈を如何に解釋するか、と問うた。ノエミは答へて、何も解釋を要する事は無い。ジアンは貧血症に罹つて居るので、折々烈しい眩暈に襲はれるのである、と云つた。チヨヴァニは黙つて居たが、未だ疑が全く晴れなかつた。縦し本當にノエミの云ふ通りであるにしても、如何してノエミは其様にドン・クレメンテが例の男ではないと斷言する事が出来るか。チヨヴァニは妹の言葉の中に、その態度の中に、その顔の中に、どうも自然でない處を認めた。マリアは又妹に問ひ掛けた。ノエミとジアンとは如何して昨夕を過したか。テサレ夫人は安眠したか。え、氣分が悪かつたか？ 如何いふ風に悪つたのか？

「唯だ気分が悪かつたのですよ！それより他に何も知りません。」
 とノエミは少し五月蠅さうに答へて、雲行の工合を確かめやうと思つたのか、扉の開けてある窓の側へ寄つた。チヨヴァニは是非ノエミに實を吐かせやうと決心して、一步彼女に近附いた。ノエミはそれと覺つて、差當それを避ける手段として、チヨヴァニに今日の天氣を如何思ふかと尋ねた。

空は全く曇つて居た。低い、深い雲がカルヴォ山の頂からカツプチニ僧院と城の上へ渦巻き下つた。空氣は暖で、アニオ川の水音は高かつた。道下には、泥濘で殆ど黒くなつた、纤々としたリボンの様なスピアコ道が、橄欖の葉越しに見えた。

「雨ですな。」

とチヨヴァニは答へた。

ノエミは折り返して、此處から修道院迄道程はどれ程あるかと問うた。サンタ・スコラスティカ迄行くのに二十分かかる。併しノエミは何故そんな事を問ふのか？ジアンが今朝ノエミと一緒に修道院へ行く積で居ると聞いて、マリアは反對した。こんな天氣に？寺の側迄は馬車が行けまいから、どうしても少し歩かねばならぬ。見物を明日か明後日迄延ばせないのか。

「デサレさんは何時左様云ひました？」

とチヨヴァニは殆ど詰問する様な調子で問うた。ノエミは少し踟蹰つた。

「昨夜です。」

彼女は斯う云つて仕舞つてから、この言葉はセルヴァ夫婦の疑を惹起しはせぬか、殊に暫時踟蹰つてから云つたのであるから、猶更怪まれるであらうといふ事に氣が附いて、抵抗しやうか、降伏しやうか、と心を決し兼ねて、襲撃を待つた。

「ノエミさん！」

とチヨヴァニは嚴然として云つた。

ノエミは少し顔を赧めて、彼の顔を見た。そして、

「何ですか」とも云はずに黙つて居た。

姉婿は言葉を續けた。

「隠しなさんな。あの女はドン・クレメンテに氣が附いたに違ひないでせう。隠さずに、然だと早く云つてお仕舞ひなさい。これは貴女の良心が貴女に命じる義務ですよ。貴女の良心は然命じるでせう？どうしても二人を會はせてはなりませんぞ！」

「妾の云つた事は嘘ぢやありません。」

ノエミは如何いふ行動を取らうかと、既に心の中に決して斯う答へた。その大人しくて、少しも腹立の氣色の見えなかつた調子の中には、口にくそ出して云はぬが、事の真相の全體を明さなかつたと、暗々裏に告白する様子が潜んで居た。

「ではドン・クレメンテぢやないのですな？ 併し貴女は屹度その他にまだ知つて居る事があるでせう？」

「はあ、未だ他にも知つてる事はありますけれども、それを貴女に申す事は出来ません。併し何卒ドン・クレメンテさんに、今朝テサレさんと妾と二人が修道院を見物に行く筈だと知らせて置いて下さいませんか。妾はもう其他には何も云はずに置ませう。ではジャンさんが起きたか一寸見て來ます。」

ノエミは惶しく出て行つた。セルヴァ夫婦は互に顔を見合はせた。ノエミがドン・クレメンテに二人が行く事を知らせたいと思ふのは、一體如何した譯だらう？ マリアは夫の心の中に、自分の喜ばぬ考、彼に語らせ度くない考が浮んだ事を見て取つた。

「ドン・クレメンテさんに手紙をお遣りなさいました方が宜しう御座いませう。」

けれどもチヨヴァニは手紙を書く前に先づ自分の考を有の儘に云つて置き度いと思つた。どうしても矢張ドン・クレメンテがジャンの尋て居る男だとするより他に、解釋の爲方が無い様に思はれる。ノエミは左様だといふ事を決して口外せぬとジャンに約束したから、あの様に云つたのであるが、それでも矢張二人を會せない様にしやうと思つて居るのではないか。

「だつて、ノエミは嘘を吐いたりなんぞ致しません！」

とマリアは稍や激して叫んだが、直真赤な顔をして、微笑みながら、夫の機嫌を損ねはしなかつたかと心配して、彼を抱いた。曾て彼女は深い考も無く、伊太利人は嘘を吐く國民だと云つて、夫に腹を立てさせた事があつたが、今の彼女の言葉はあの時の不興の雲の影を呼び返す因となつたかも知れぬ。實際、チヨヴァニはその抗議よりも機嫌を取らうとする舉動が氣に入らなかつた。そして以前の事を思ひ出して、彼も顔を赤めて、マリアでも若しノエミの立場に居つたならば、何も彼も否定するであらうと云つた。マリアは抑へても抑へても湧き出す涙を眼に湛へて、物も云はずに書齋を出て行つた。チヨヴァニはこの愛情の攻撃的發露を撃退した事を満足に思つて、ドン・クレメンテに遣る手紙を書き始めた。併しそれ

も暫時の間で、その手紙を書き終らぬ中に、腹立は後悔と變じて、彼は妻を捜しに室外へ出た。妻は廊下で聲を潜めて何かノエミに話して居たが、直夫の方に顔を向けた。そして彼の心を覺つて、未だ眼に涙を溜めた儘微笑んで、彼を招いて、大な聲を出すなど身振で話した。如何した？ ジアンが直サンタ・スコラステイカへ行き度いと云つて居る。尤もジアンはつい今眼を覺した許りであるから、「直」と云つても一時間半程の間は尠くともあるだらう、とノエミが註釋を加へた。併し、今の様子では、ジアンは絶対に必要なだけ——馬車で行けない道の最後の部分——より以上は逆も歩けないから、スピアコまで馬車を呼びに遣らねばならぬ。此時呼鈴が鳴つたので、ノエミが行つて見ると、ジアンは痺を切らして待つて居た。

「何てお饒舌だらう！ 姉さんに何を云ひ付けて居たの？」

とジアンは戲言と癩癩と相半した調子で云つた。

ノエミは、そんな事を云ふなら棄て、置く、と嚇した。ジアンは手を合はせて謝罪つた。そして、心の底まで看破らうとする様に、ノエミの眼を熟と見ながら尋ねた。

「髪はどんなに結びませう？ 着物はどんなのを着れば宜いでせう？」

「どんなになりと好きな様になさいよ。」

とノエミは心無い返事をした。

ジアンは腹立たし相に足踏をした。ノエミは呑み込んで、

「ぢや田舎娘の装をしていらつしやい。」

「馬鹿な事を！」

ノエミは笑つた。

ジアンは歎息を吐いて、例の小言を並べた。

「貴女は妾の事なんか思つて呉れないんだわ！ ちつとも思つて呉れないんだわ！」

其時ノエミは眞顔になつて、本當にあの人——あの大事のマイロニ——を又迷はせて引き戻さうと思ふか、とジアンに問うた。

「妾綺麗になりたいわ！」

とジアンは叫んだ。

「そうら！」

今ジアンが濃い黄色の化粧着を着て、房々とした黒髪を腰から掌の幅程下の邊まで垂れて立つた姿は、實際美しく、昨夜よりも遙に若やいで、婀娜に見えた。彼女の眼は、昔て不

かと尋ねた。陰鬱な光を帯びた眼と、黒ずんだ外套に包まれた丈の高い姿の上に、彼女の蒼白い顔に覆ひ被さる様に垂れ下る羽毛で飾つた黒い帽子の縁は、彼女の陰気な、熱烈な、倨傲な感情の幾分を分け取つた様に見えた。彼女はマリア・セルヴァに朝の挨拶をした時に、自分の姿がセルヴァ夫人の心の中に呼び起した感嘆の念を感じた。彼女はチヨヴァニの眼中にも亦感嘆の色を見たが、それは又別種の、同情を含みぬ感嘆であつた。チヨヴァニに別れて、ノエミと連れ立つて門の前に待つて居る馬車まで降りて行く途中で、彼女はノエミに眞實姉婿に何も洩さなかつたかと問うた。ノエミが決して何も云はなかつたと言明すると、彼女は吐いた。

「妾は貴女が屹度何か云つたのだらうと思つたのよ。」

二三歩行つてから、彼女は友の腕を緊く締めて、何か思ひも寄らぬ発見をした様に、如何にも嬉し相に叫んだ。

「兎に角、妾は未だ綺麗だわ！」

ノエミは友の言葉には心も留めず、獨思ひ煩つた。デサレといふ名はあの僧の心に何かの意味を齎したらうか。マイロニは彼にデサレ夫人の事を話した事が有るだらうか。縦し彼が

師にこの戀の事を語つたとしても、女の名だけは打ち明けなかつたかも知れぬ。ノエミの心の底には、ジャンの胸にこれ程熱烈な愛情を起させ、そしてあの様に奇異な風に世の中から姿を隠したその男に、一度會つてみたいといふ強い好奇心が潜んで居た。併し出来るならば自分一人で會ひたい。若しマイロニとジャンとが心に何の準備もなく、突然邂逅したならば如何であらう？ 思つても恐ろしい。自分が豫めこのドン・クレメンテといふ僧に會つて、彼が事情を知つて居るか如何かを確かめて、若し彼が知らなければ、それを話して聞かせる事が出来れば、大層都合が好いが、若しその僧の口からマイロニの心の状態とその意向に就いて何事かを聞き出す事が出来れば好いが。

「併しもう心配せずに置かう！ 神様が何とかして下さるだらう！ 神様が何卒この可哀相な人を助けて下さればよいが！」

とノエミは馬車に乗る時に心の中に獨語つた。

驟馬徑の始まる處で馬車から降りた時に、ジャンは、スピアコからずつと馬車に隨いて走つて來た小僧に案内を頼んで、自分獨り僧院へ行かうと思ふが如何かと、恰も始から當然拒

絶せられる事を豫期して居る者の如くに怖々と云つた。豫想通りにノエミはそれを拒んだ。而も頑としてそれを拒んだ。そんな事は以ての外である。ジャンは一體何を考へて居るのか？ ジャンは、それが叶はずば、せめてはマイロニに會ふ様な事があれば、其時に傍を避けて呉れよと求めた。ノエミは何と答へて宜いか返事に苦んだ。

「若し妾が先へ行つて、あのクレメンテさんに會て、あの方が今何役を勤て居るのか、如何な仕事をして居るのか、如何いふ考を有つて居るのか、尋たら如何でせう？あの貴女の——」

ジャンは吃驚してノエミの言葉を遮つた。

「あの坊さんに？あの坊さんに話す？」

彼女はノエミを黙らせやうと思つたのか、両手をその顔に押し付けて、叫んだ。

「あの坊さんに話しなぞしたら、それこそ大變な事になつてよ！」

二人は徐に岩の多い驛馬徑を登り始めた。ジャンは折々悪寒に襲はれて、風に吹かるゝ張り切つた弦の様に身を顫はせながら、立ち止つた。彼女は自分の手が如何に冷いかをノエミに觸つてみさせやうと、黙つて両手を差出して、微笑むた。丘陵の方に押寄せる雲の海の中に太陽の蒼白い眼が現れた。太陽も亦好奇心に動かされたのであらう。

(其二)

ドン・クレメンテは七時頃に勤行を済まして、院長と打合をしてから、巡禮の宿坊へ行つた。ベネテットは胸の上に腕を組んで、唇を少し開けて、祝福に充ちた幻の閃を顔に浮べて、眠つて居た。ドン・クレメンテは彼の頭を撫で、靜に彼の名を呼んだ。ベネテットは驚いた様に身を動かさせて、頭を上げつゝ、睡さうな眼を開けた。そして寢床から飛び降り様、ドン・クレメンテの手を掴んで唇を付けた。僧は謙遜の念に驅られて思はず手を引き込めやうとしたが、直己の心に疚しい處の無いこの感と、自分の職務の威嚴の自覺とによつて思ひ止つた。

「如何だつた？何か主の仰を聞いたかね？」

「私は主の聖旨の儘に従ひます。風のまに〜飛ぶ木の葉の様に、何事も知らぬ木の葉の様。」

僧は両手で弟子の頭を抱いて、彼を側に引き寄せた。そして彼の髪に唇を押し當てた儘、二人の魂が無言の中に語り合ふ間、ちつとして居た。

「院長様が御前を召して居られるから行つて来るやうに。其後で私の處へ來なさい。」

「如何な用事で御座いますか？」

とベネデットは口には言はねど問ひた氣に、師の顔を見守つたが、ドン・クレメンテの眼は黙して何事をも語らなかつたので、弟子は急に服従の義務を思ひ出した様子で、己を卑うして、重ねて理由を問はなかつた。

「只今直に？」

「今直に。」

「行きます前に、川で顔を洗つて來ましても宜しう御座いますか？」

師は笑を含んだ。

「では、洗つて來たがよい。」

大雨の後には時々修道院の東のブツチエアの谿間に潺湲流れて、幾筋かの小流となつてサンタ・クロチエラの手で、サクロ・スペコ道を横切る水に浴する事は、ベネデットが耽つた唯一の肉體の快樂であつた。雨は今猶ばら／＼降つて、深い谿には霧が静に湧いて居た。細波立つ浅い水は、道を横切つて急ぎながら、ベネデットに愁訴するが如き聲を立てたが、両手に掬はれると、満足した様に黙つて、掌の中に休らうた。そして彼の額や、眼や、

頬や、頸などから、水の魂のそれかとも思はれる甘美清純の感と、神の豊けき恩恵の感とを彼の心の奥深くに浸み込ませた。ベネデットは頭にも充分水を灑ぎ掛けた。水の靈は彼の思想にも滲み入つた。彼は天父が自分を新しい道に遣はさんとし給ふ事を感じた。併し神はその強い聖手を以て自分を導き給ふであらう。彼は自分に斯くばかり多くの恩寵の光を齎した、この清い水を恭しく祝福した。それから彼は宿坊に足を向けた。中庭で歸りを待ち受けて居たドン・クレメンテは、彼が近附いた時に、彼の容貌が餘りに變つて居るのを見て、甚く驚いた。水に濕つた濃い髪の下に、彼の眼は静な天來の歡喜に輝いて居た。そして肉の落ちた、象牙色の顔は、十四世紀の巨匠等の畫筆から流れ出たかとも思はれる、玄妙な靈味を湛へて居た。この顔が如何して農夫の衣服と調和しやうか？ドン・クレメンテは、自分も昨夜夜の中に思ひ付いて、今朝既に院長に話して置いた一事、即ち、ベネデットに教友用の古い法衣を一領與へる事に思ひ及んだ事を、我ながら善い事を爲たと、心中に喜んだ。院長は諾否を決する前に、一度ベネデットに會つて話し度いと云つた。

院長はベネデットを待つて居る間、ピアノに向つて自作の一曲を指先で叩き付けながら、

音律に伴って唇と鼻孔と眉とを恐しく歪めて居た。臆て扉を静に叩く音が聞えたが、彼は返事もせず、ピアノを弾く手も止めなかつた。一曲奏し終つて、又始から弾き出した。二度目のを始から終まですつかり済ませてから、手を止めて耳を傾けた。再び始よりも尙静に扉を叩く音がした。

「五月蠅い奴！」

と院長は叫んで、腹立たし相にピアノを二三調子打ち鳴らしてから、半音階律を弾き始めた。半音階律から今度は亂調子に移つた。それから三四分間も手を止めて耳を傾けた。何の音も聞えないので、席を立つて扉を開けると、外に居たベネデットが廊下に跪いた。

「誰ぢや？」

と院長は言葉荒く詰つた。

「私はピエロ・マイロニと申します。けれどもこの寺では皆様がベネデットと申されま

す。」

と答へて、ベネデットは院長の手を取つて接吻しやうとした。

「いや、待て。」

院長は顔を覺めながら、手を引き込めて、上へ舉げた。

「お前は何を爲て居る？」

「私は野菜畑の仕事を致して居ります。」

「馬鹿！この入口でお前は何をして居るか尋ねて居るのぢやわ。」

「院長様にお目に懸りに参りましたので御座います。」

「誰が私の處へ行けど云つた？」

「ドン・クレメンテ様で御座います。」

院長は黙つて、跪いて居る男を暫時の間熟と見て居たが、遂に何か聞き取れぬ言葉を吐いて、手を差し出して接吻させた。

「起て！内へ這入つて戸を閉めるのぢや。」

と彼は猶語氣鋭く云つた。

ベネデットが室内に這入つた後は、院長は彼が近くに居るのを忘れて仕舞つた様子で、眼鏡を掛けて、一冊の本を彼處此處繰り擴げたり、机の上の書類を色々見たりなど爲始めた。ベネデットは上官に對する兵士の様な恭しい態度で、直立して、院長が話すのを待つて